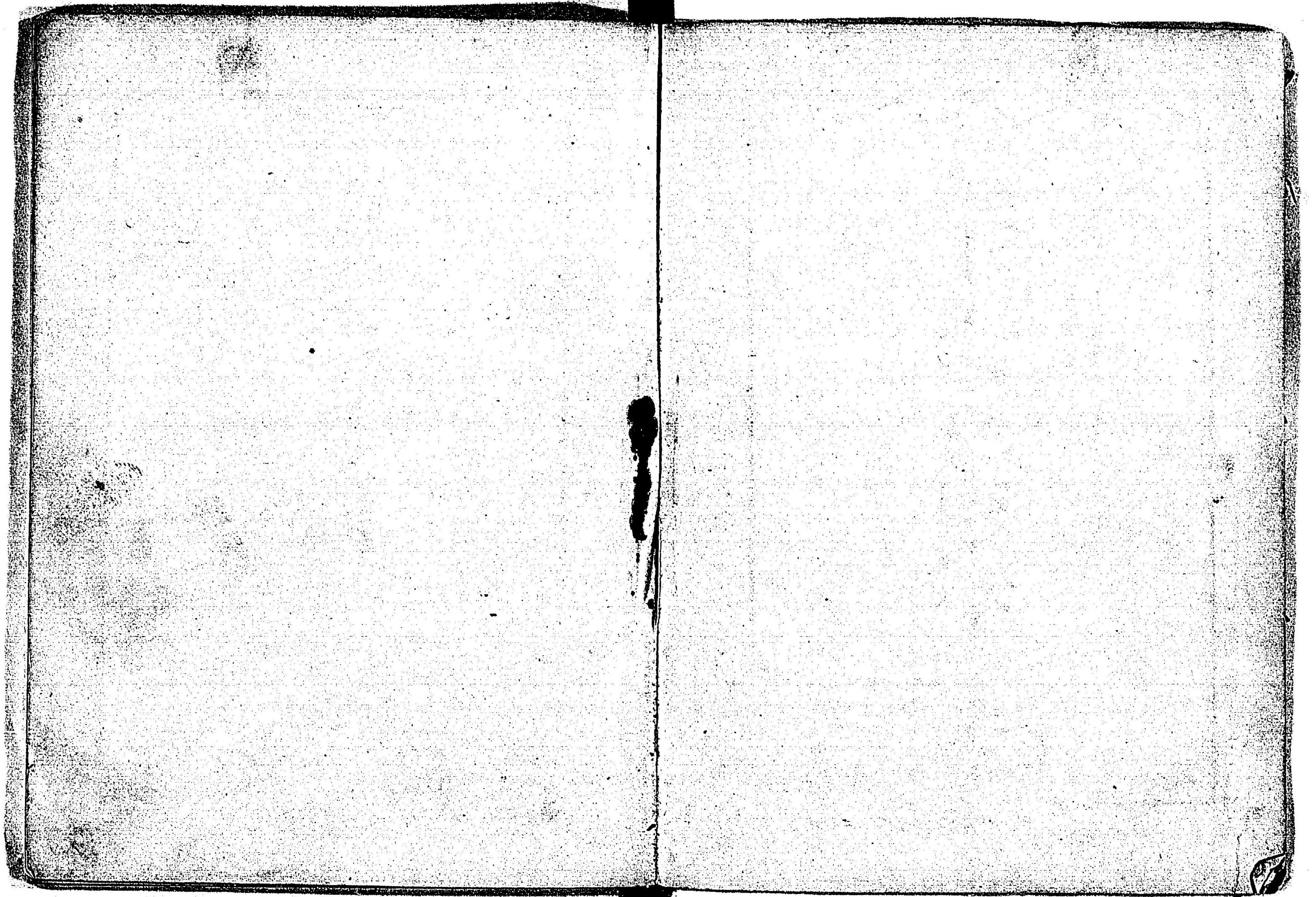


千山萬水



特63  
465



萬山



神寓形

道是寫真神寓形

慘於海嘯蒙天覽

東奧山河探絕勝

匹如達筆類揮灑

譎天

嗜而漸巧進何停

秀與紀行傳地靈

近郊花木記曾經

知自文章得典型

飛揚



出揚

侯爵黒田長成公題字

群

眾

帝

櫻苔書



乙羽子山景水刻

成賦此充題辭

玻璃映景術

通神若若子子

山寫景之新畫

手能饒人匠  
巧天機活潑  
豈金魚  
踏遍東西

小州者山翁  
景能探函書  
君造化存自  
臆收拾機事



# 舟臥遊

正三位子爵附護美園圃

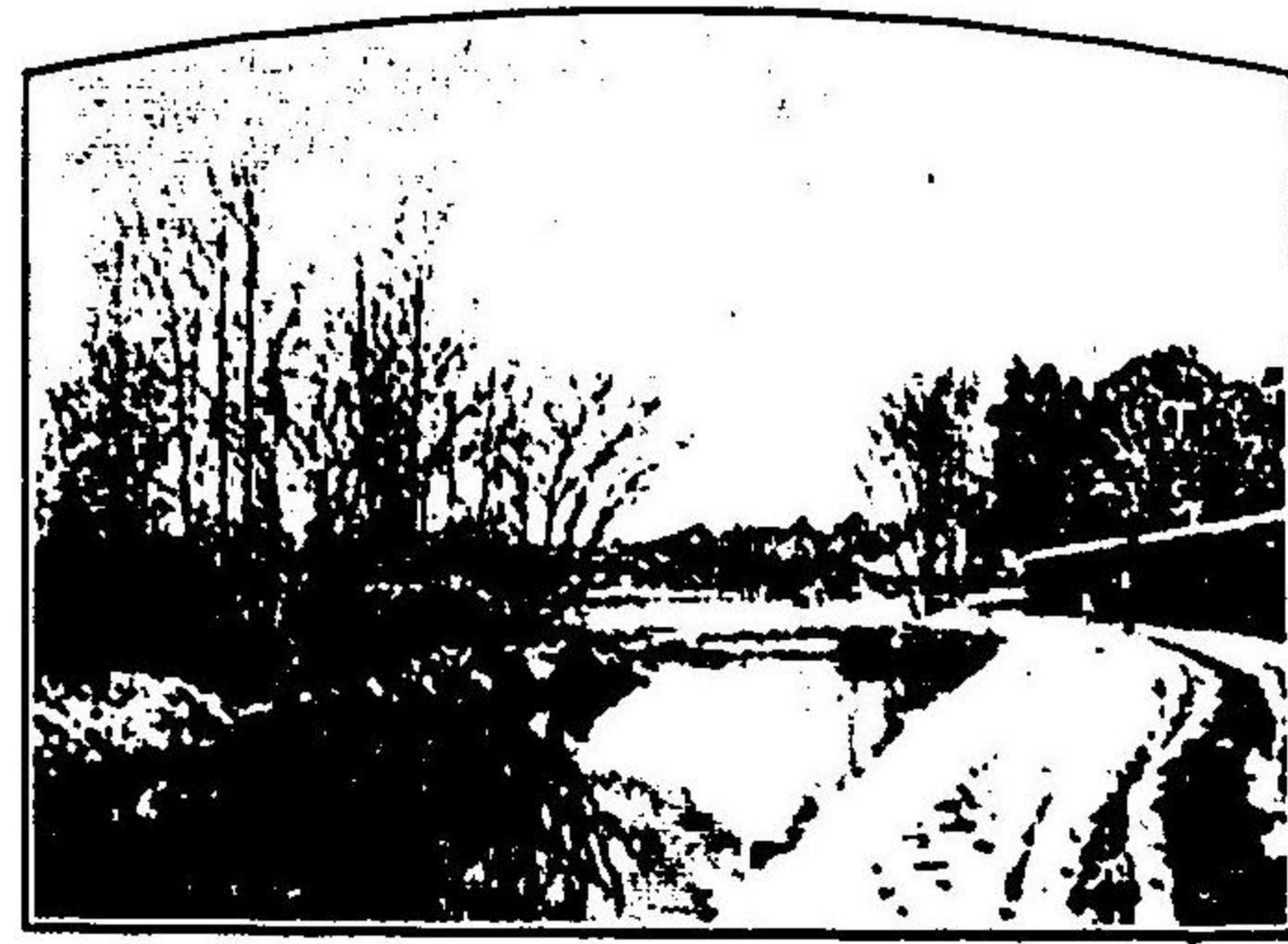
はしおき

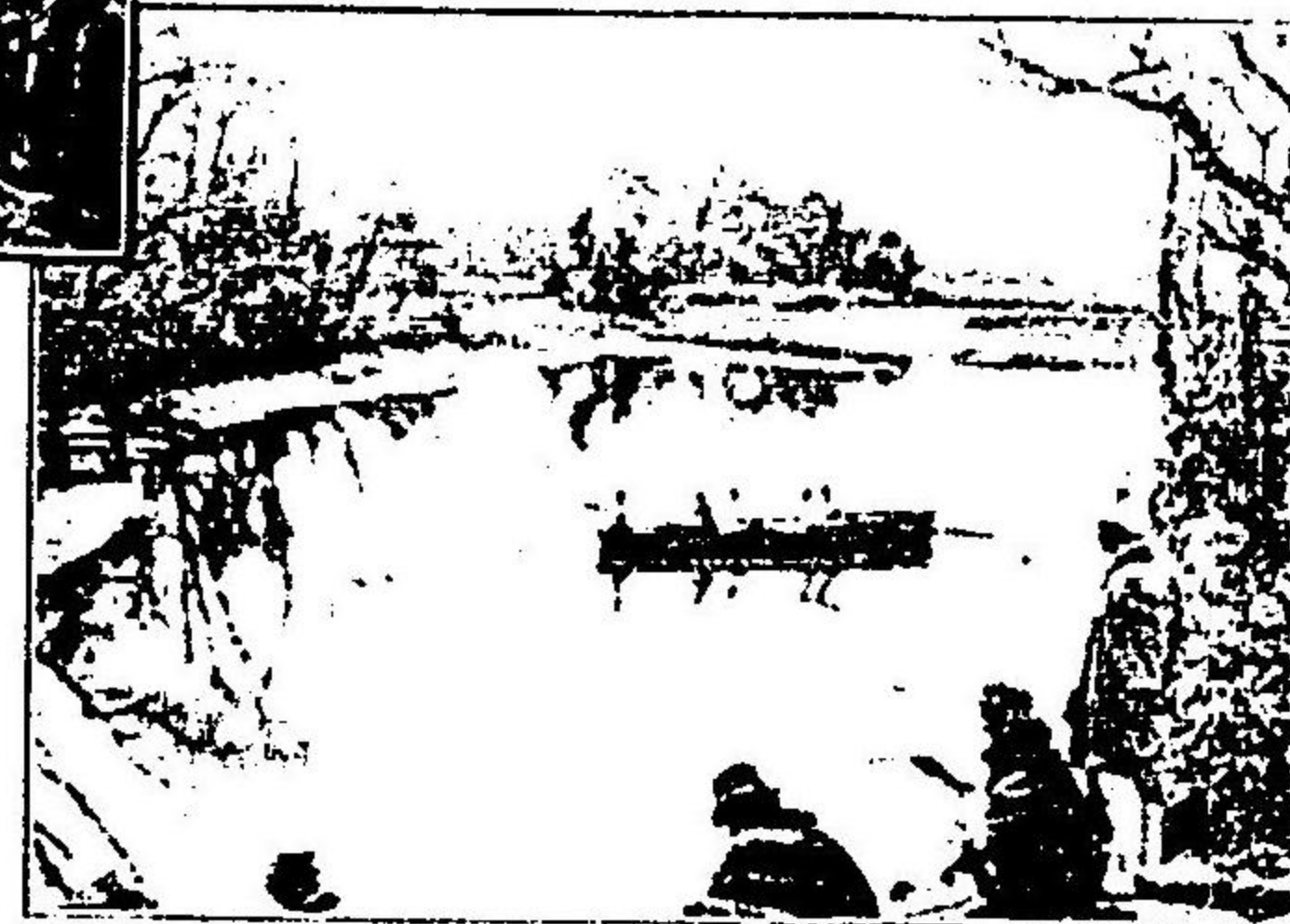
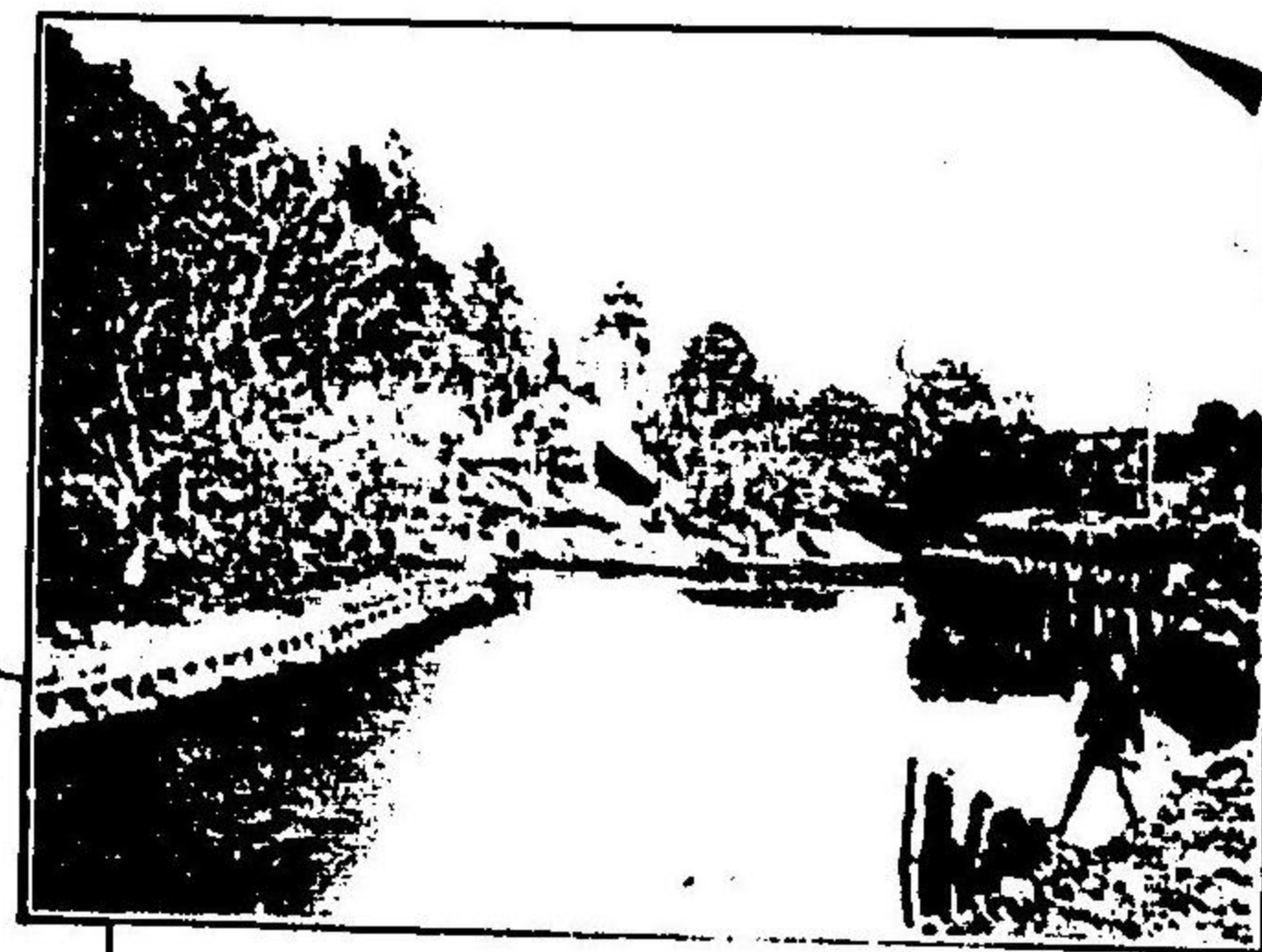
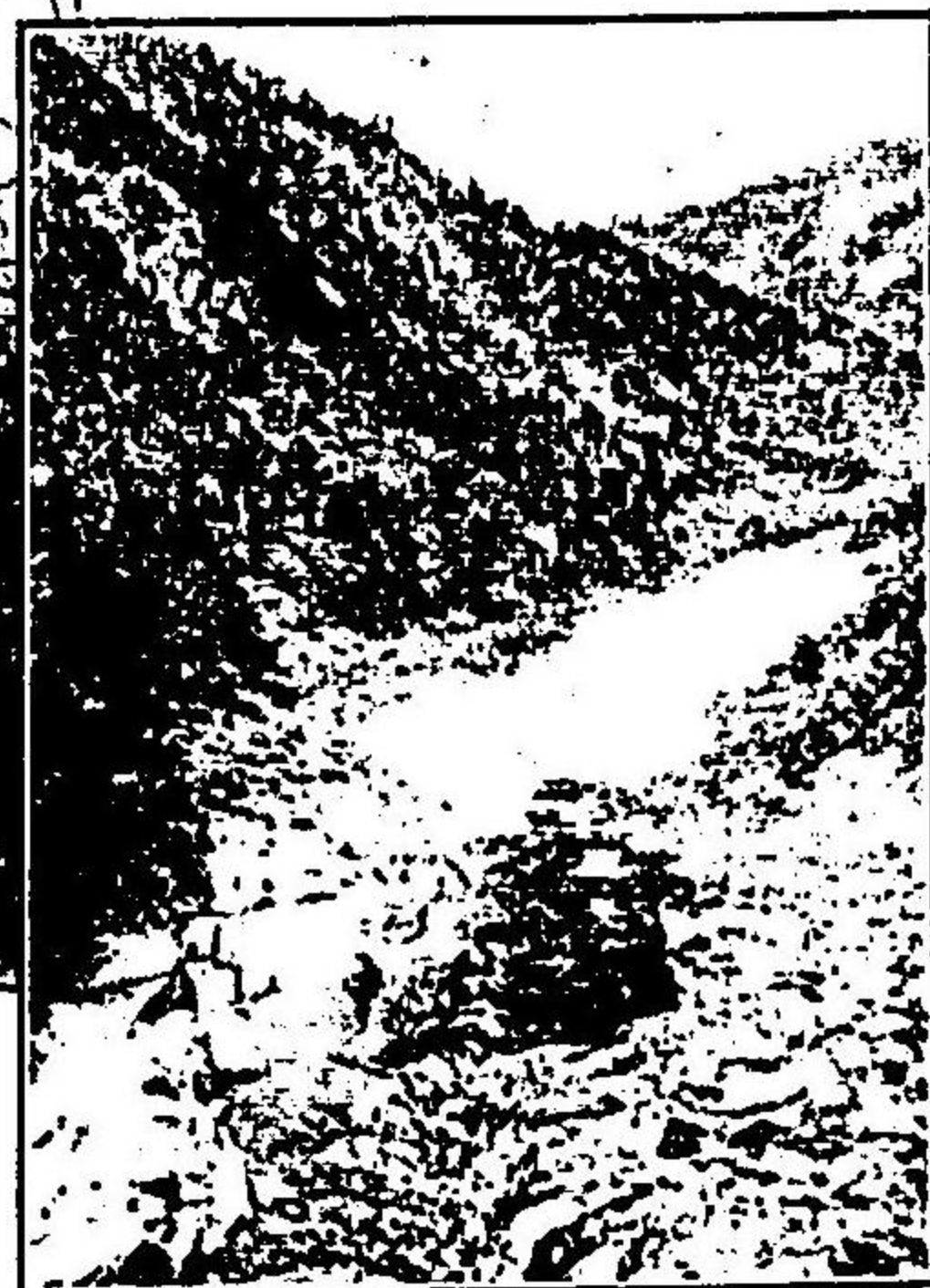
西行法師の繪に、笠と杖とを放したるは少なく、芭蕉翁の像は、旅仕度の儘なるが多し。されば光陰は百代の過客、天地は萬物の安旅籠、生老病苦は合の宿にて、世は一六の賽の目の、上り坂あれば、下り坂ある、道中わづか五十年、東海道廻双六から、振出しと<sup>①</sup>の風袋を引き、餘れるを一ツ振つて、人を追ひ越したのが、下から親分と立てられて、駕籠ならば乗客、昇ぐ男は雲助の、毛臑にソヨと秋の風と、細かい所に目を着ける俳諧

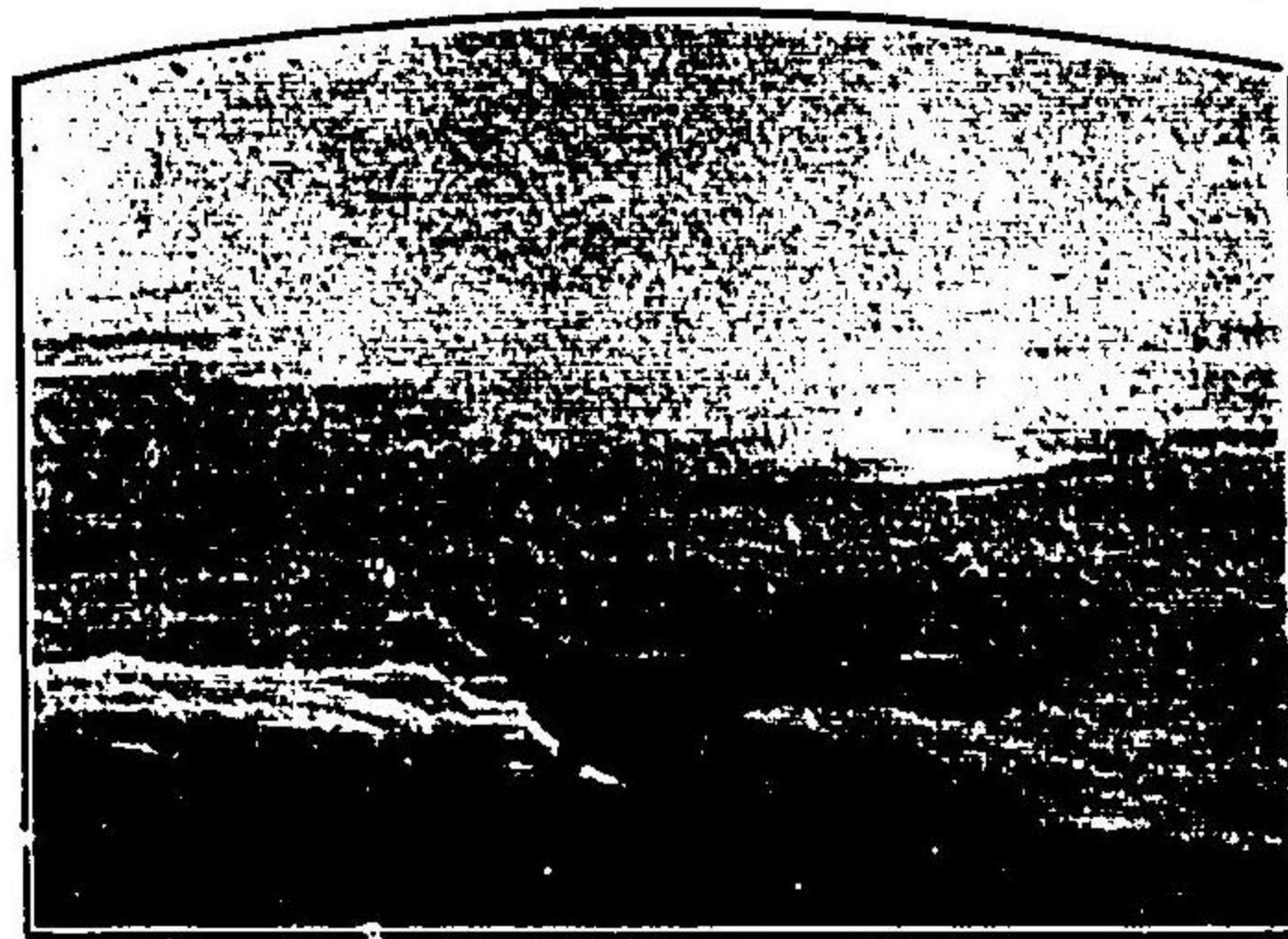
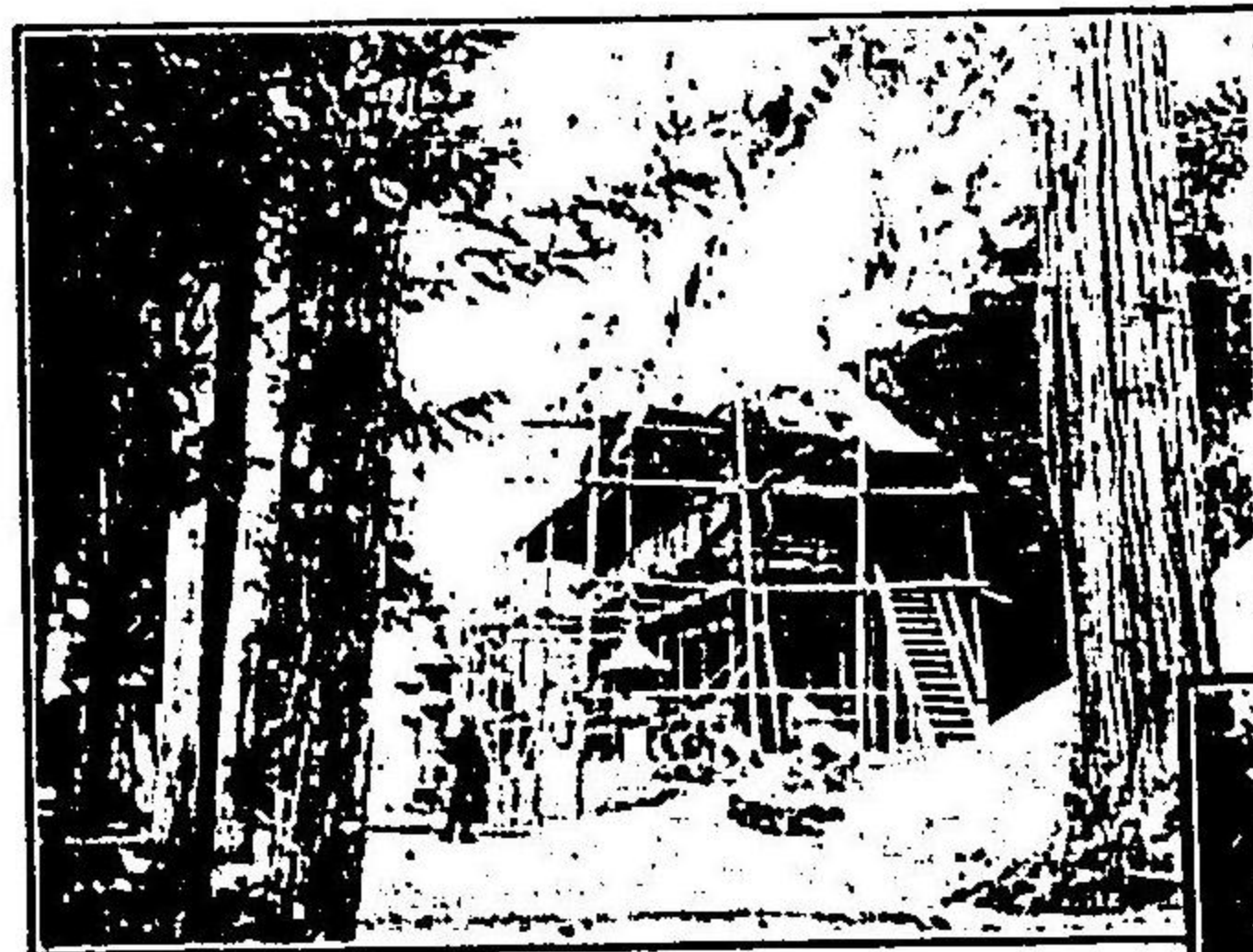
師も、物の哀を知るは旅ならずや。こゝに十數年の筆の立場に、頰杖をつきて、懷オモヒを雲水に寄せたる日記、塵の積つて百餘篇とはなりぬ。みな是ふところ見と可愛がりたるを、今おもひ切つて獨旅をさせ申す。ソレでは餘り不愍だと、おつしやる方のあるに任せ、親の慈悲から極内にて、手前直傳の寫眞師をも道連として手放す上は、世は情けあるお得意様方、昔の圓位や桃青と同様に、矢張これをもお目かけられてよと云ふ。

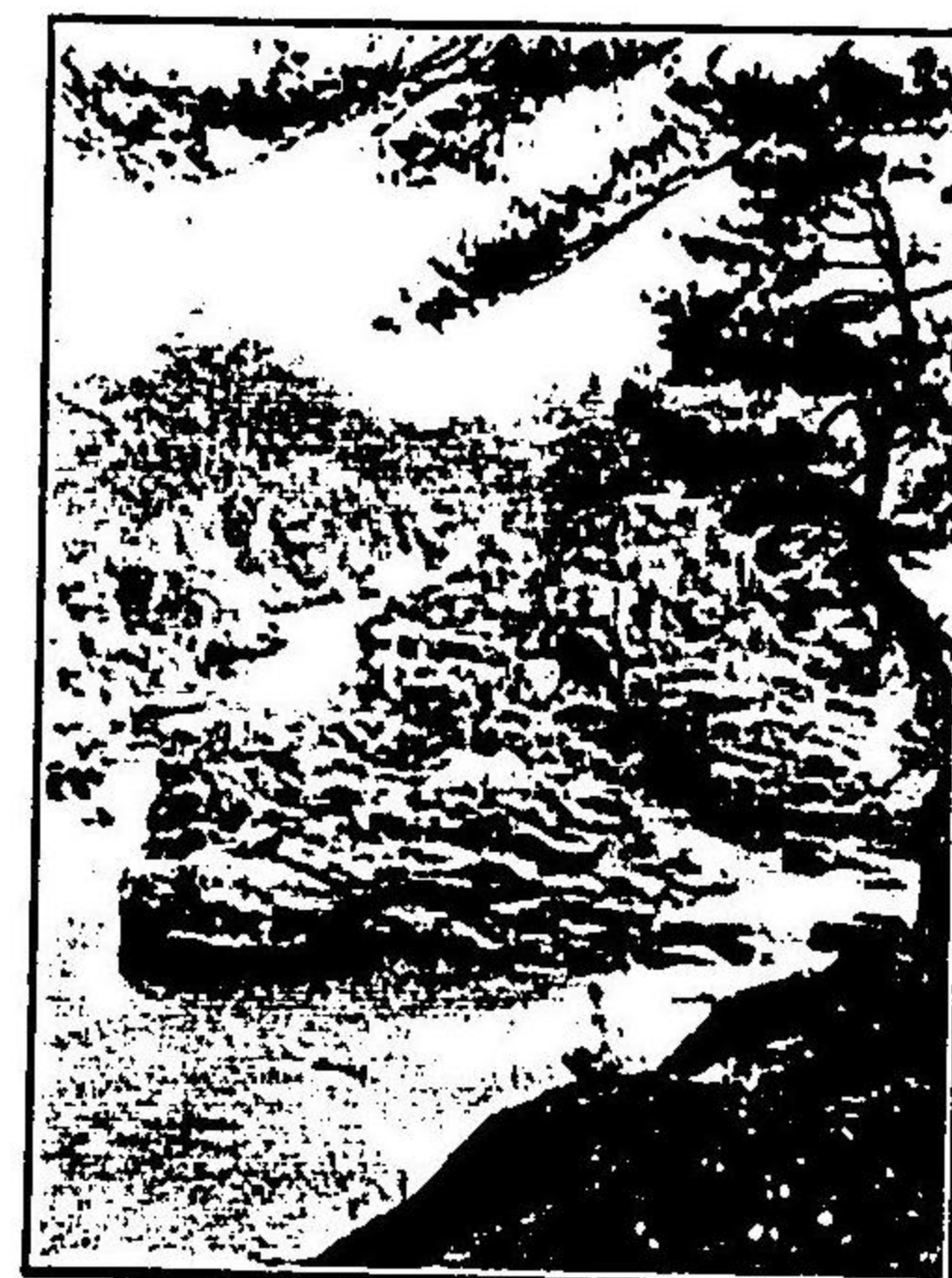
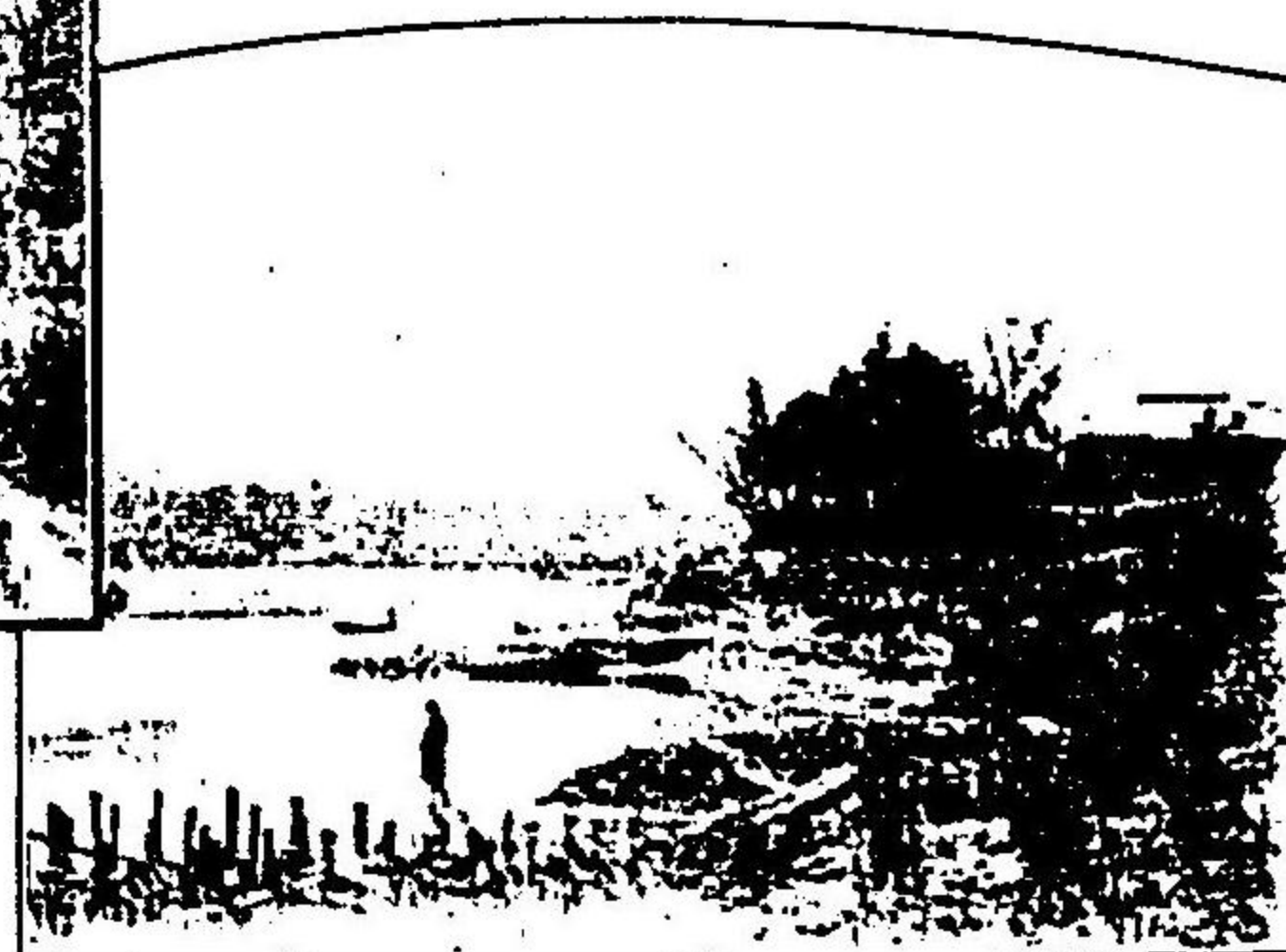
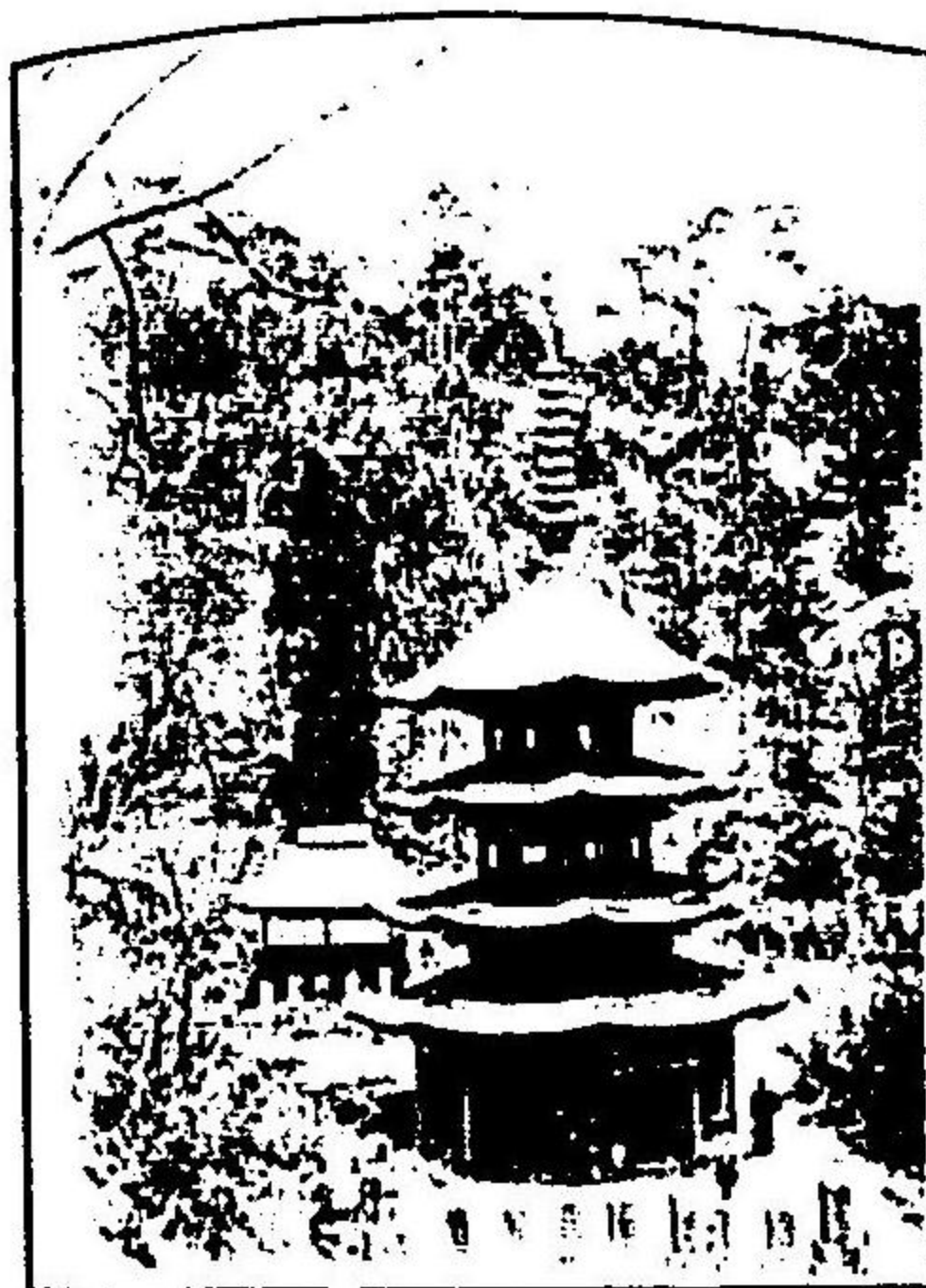
亥の一月

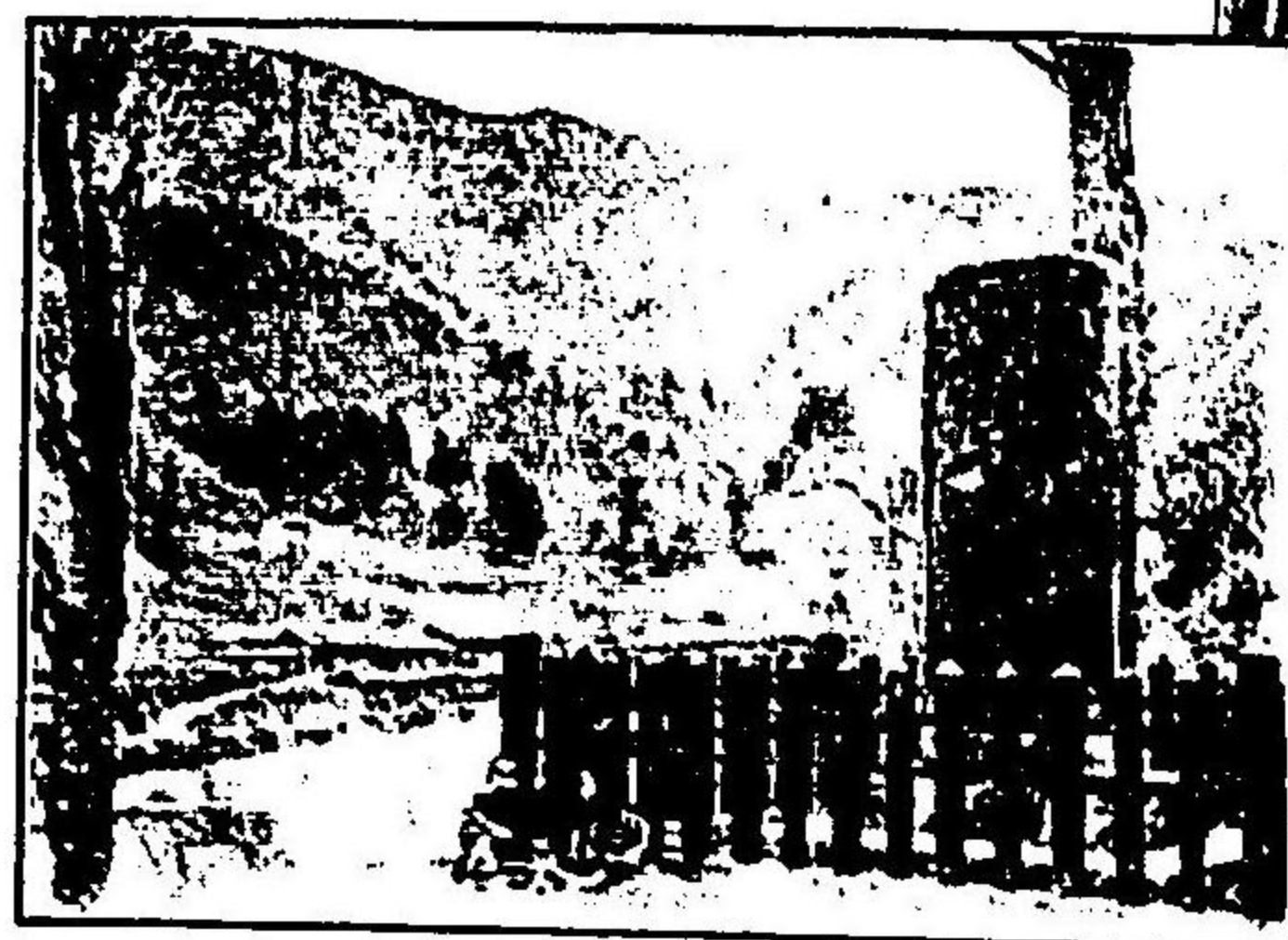
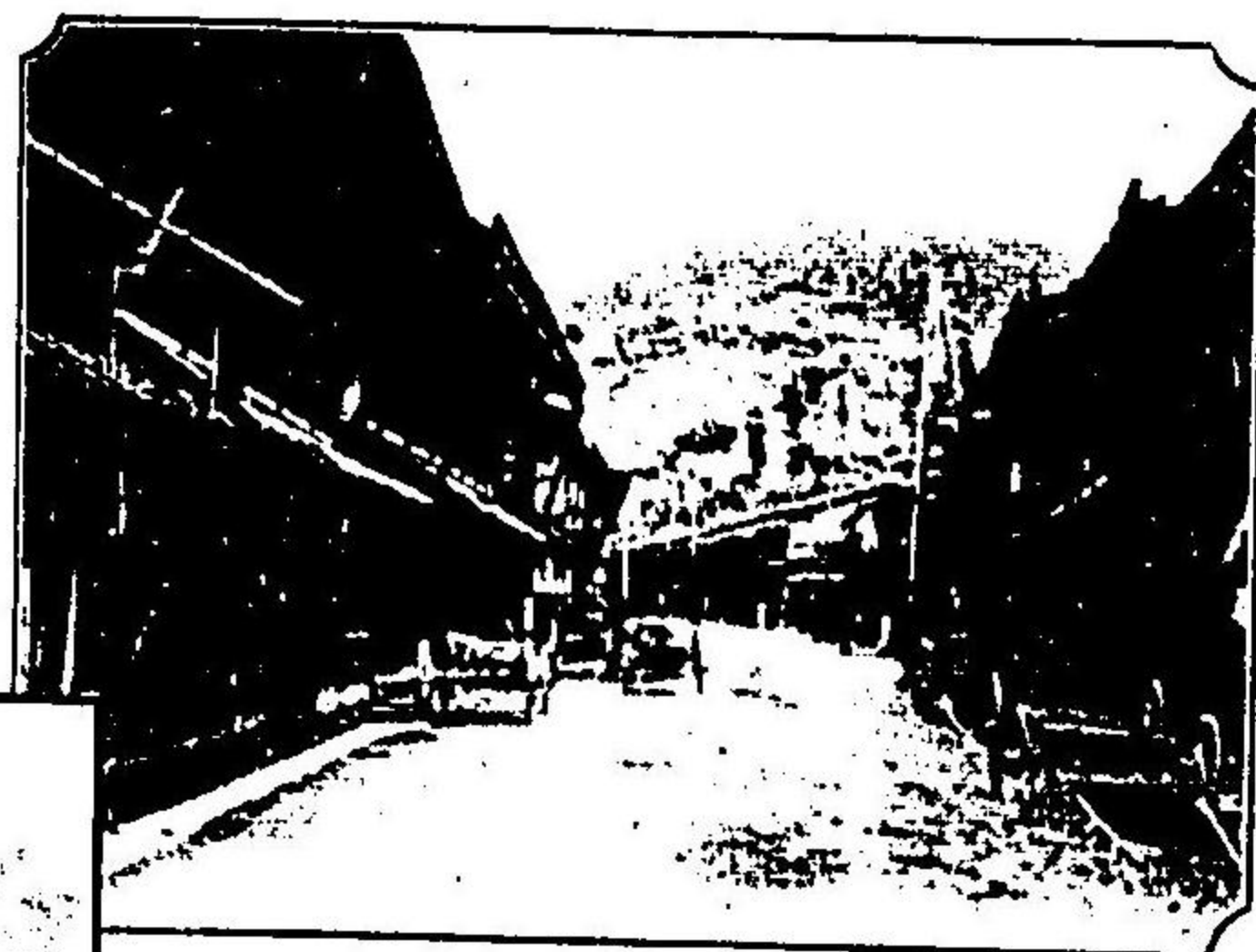
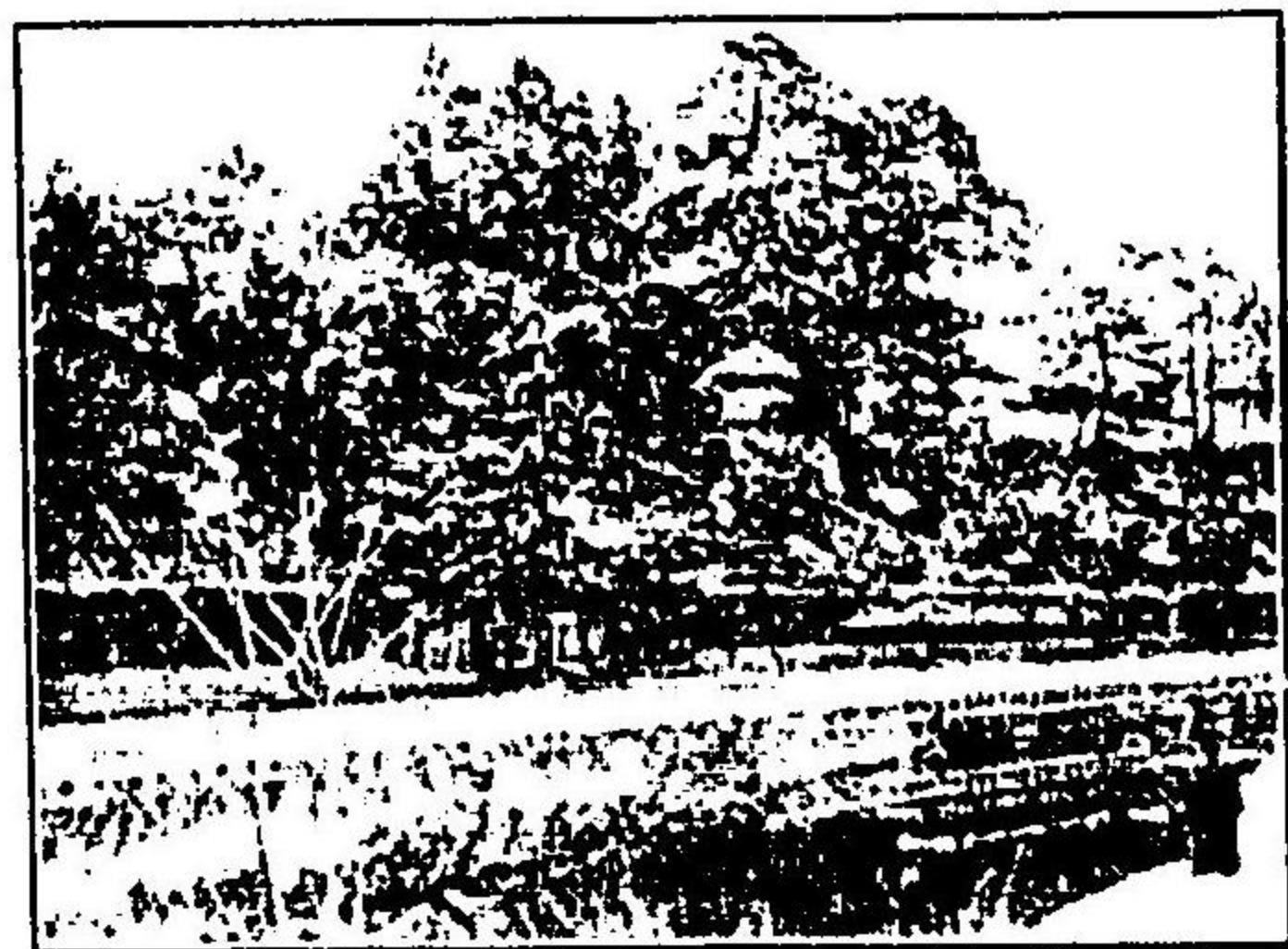
著者

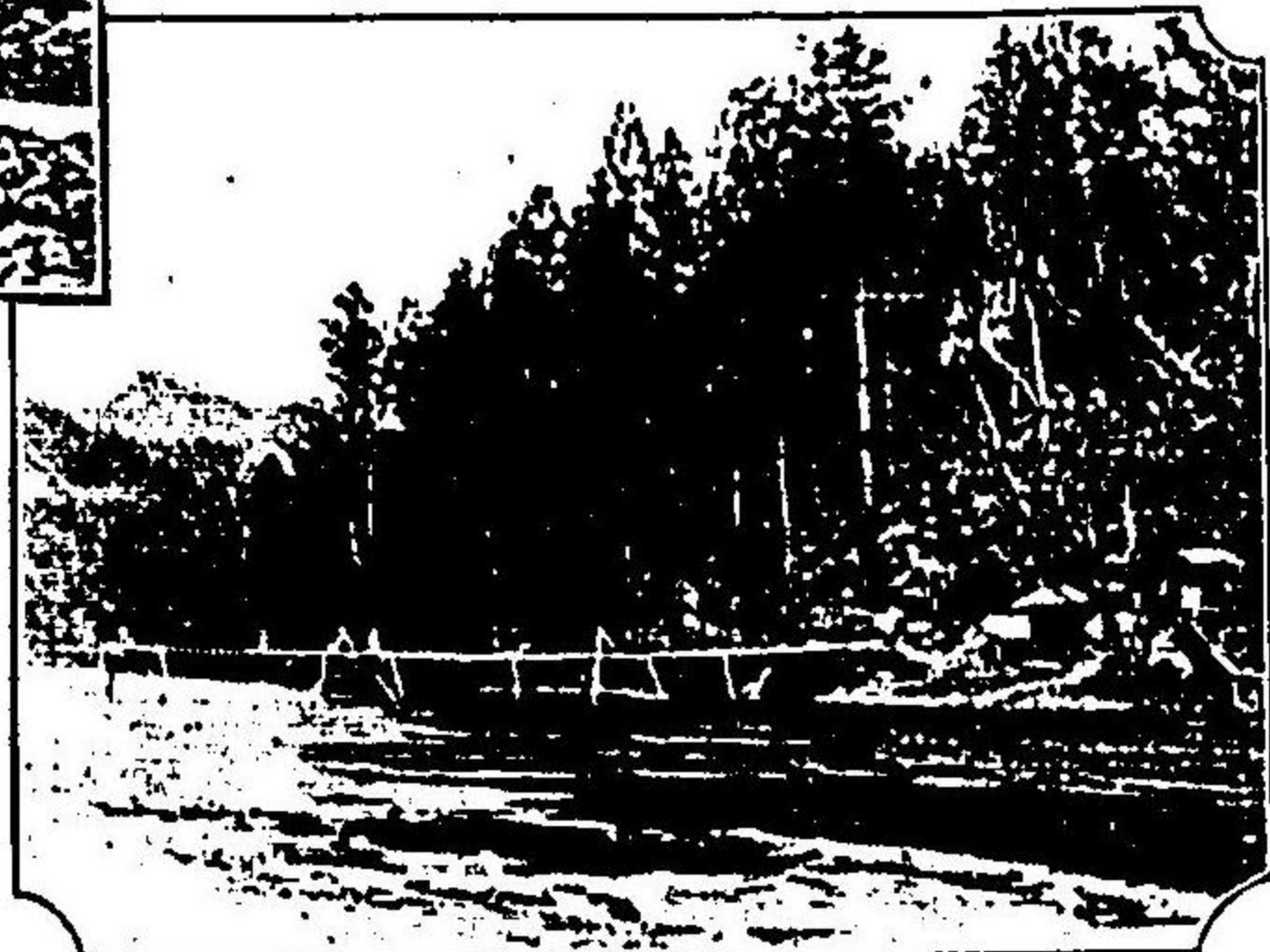
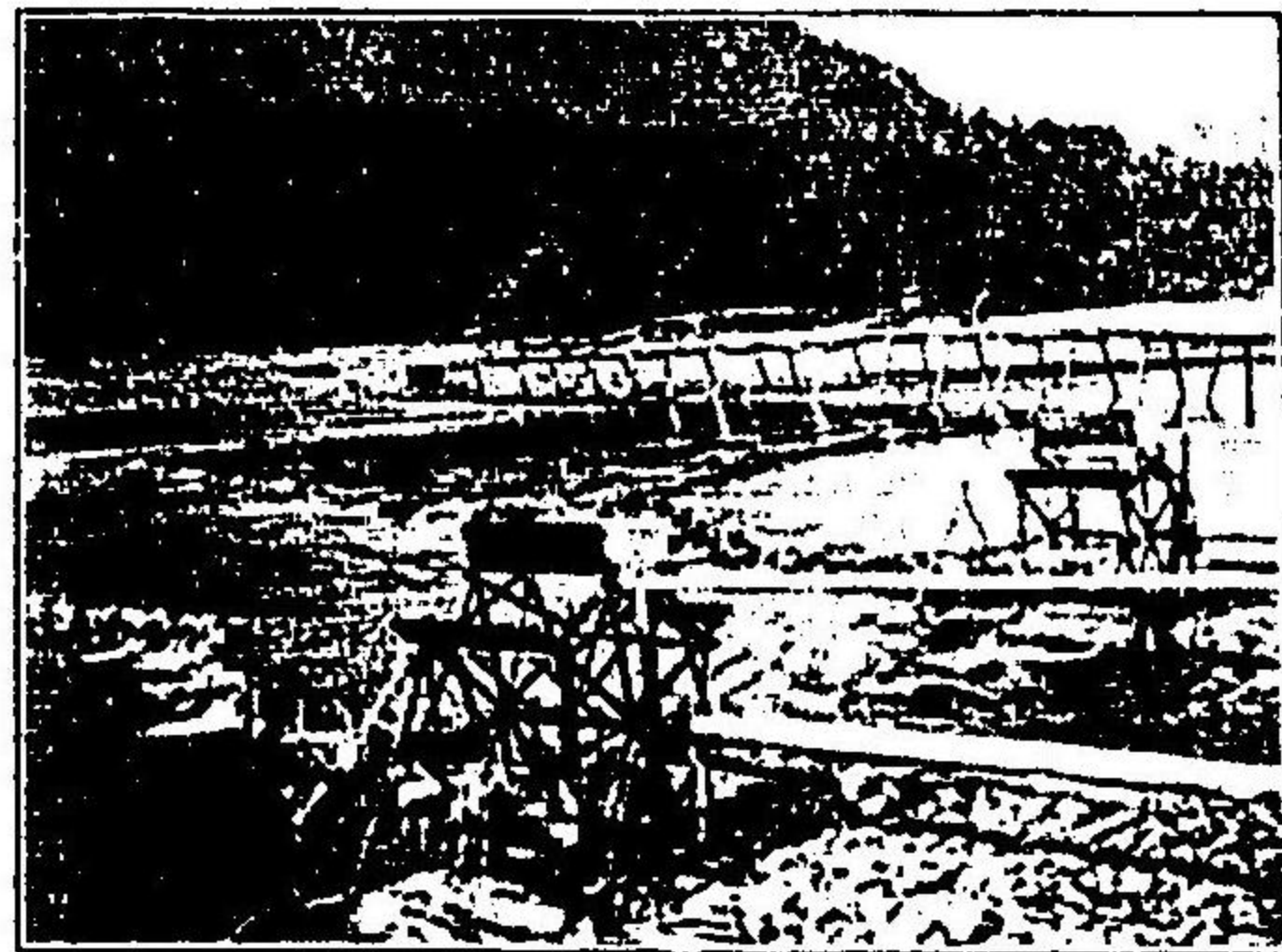
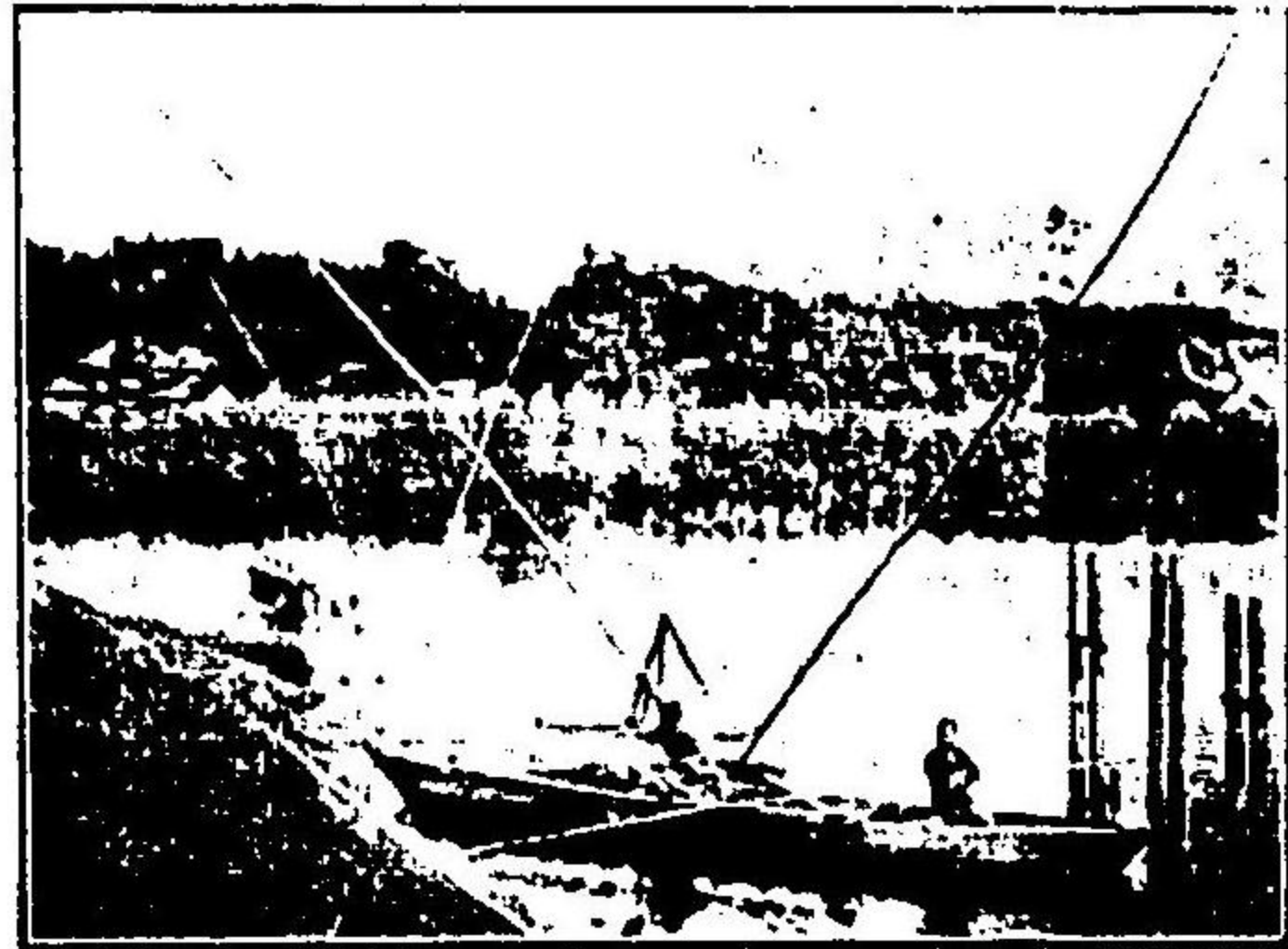






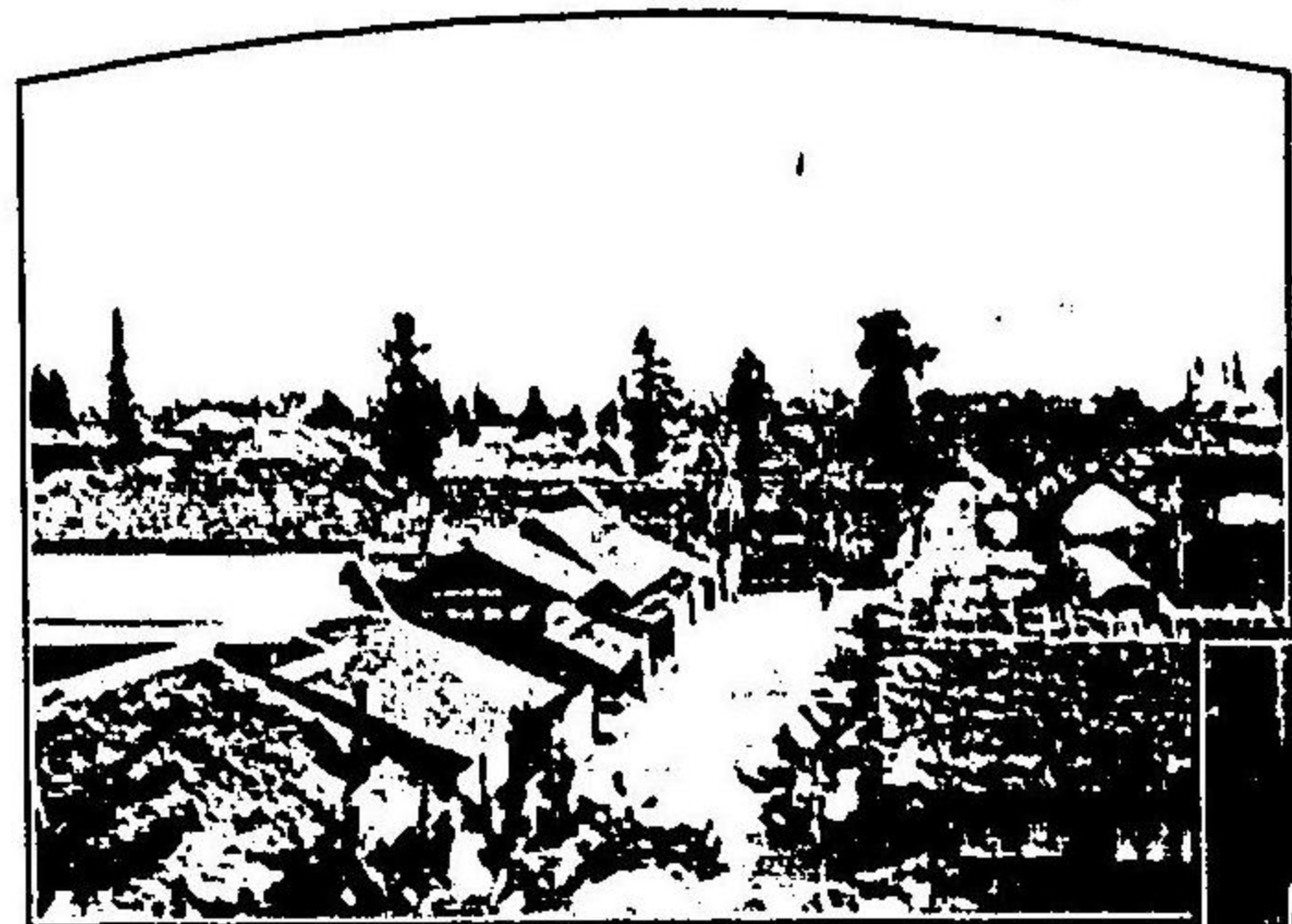
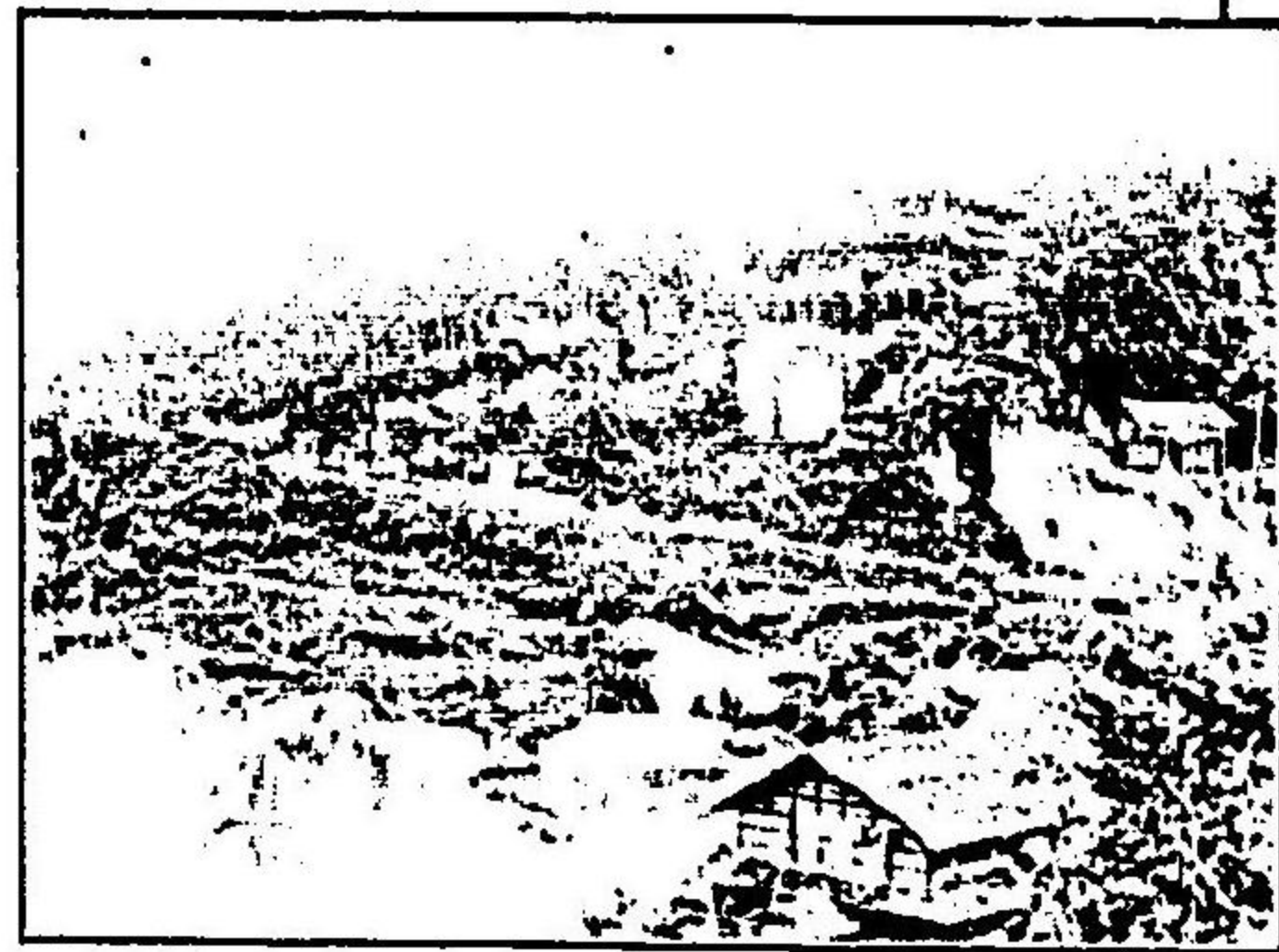


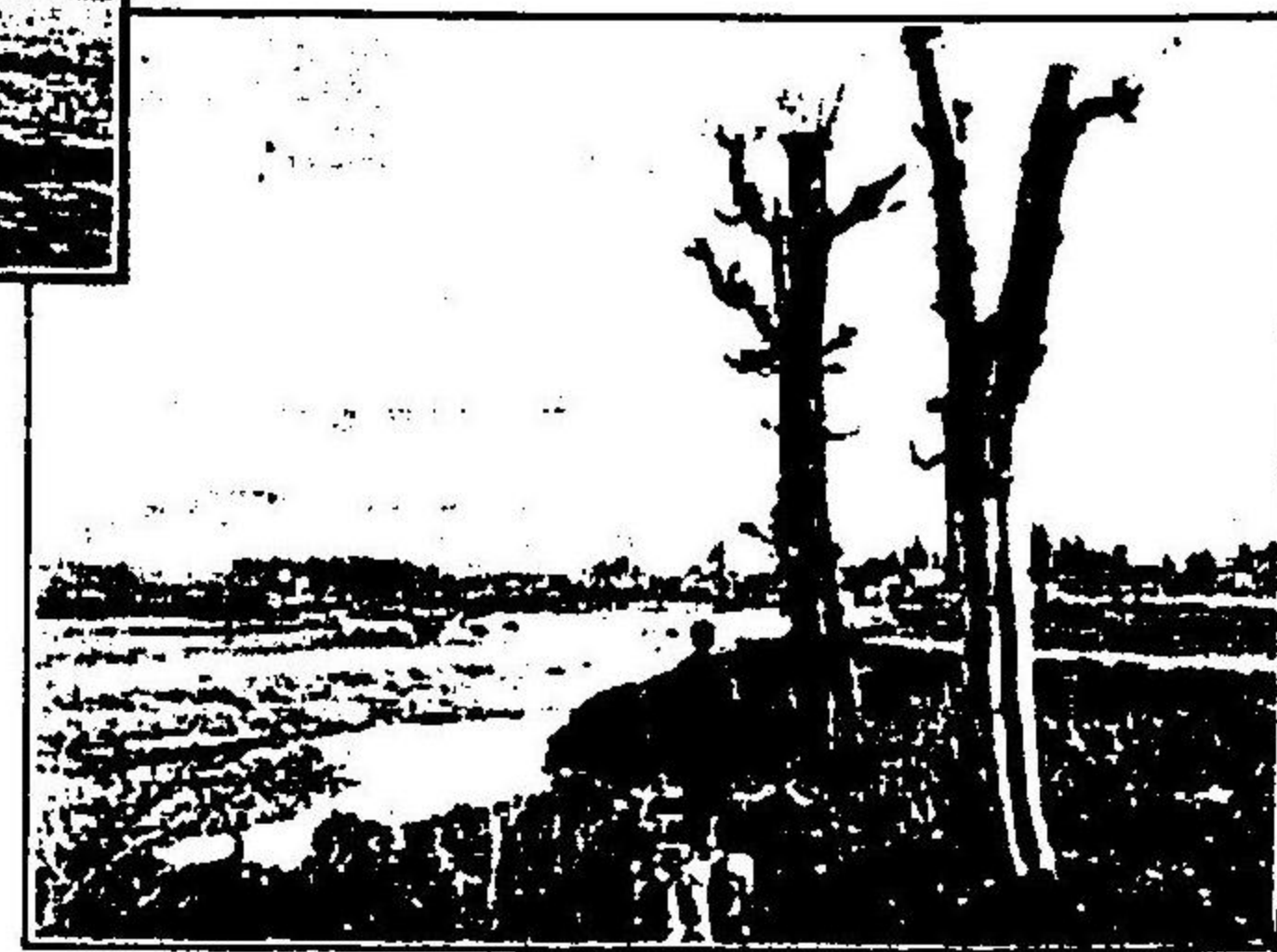
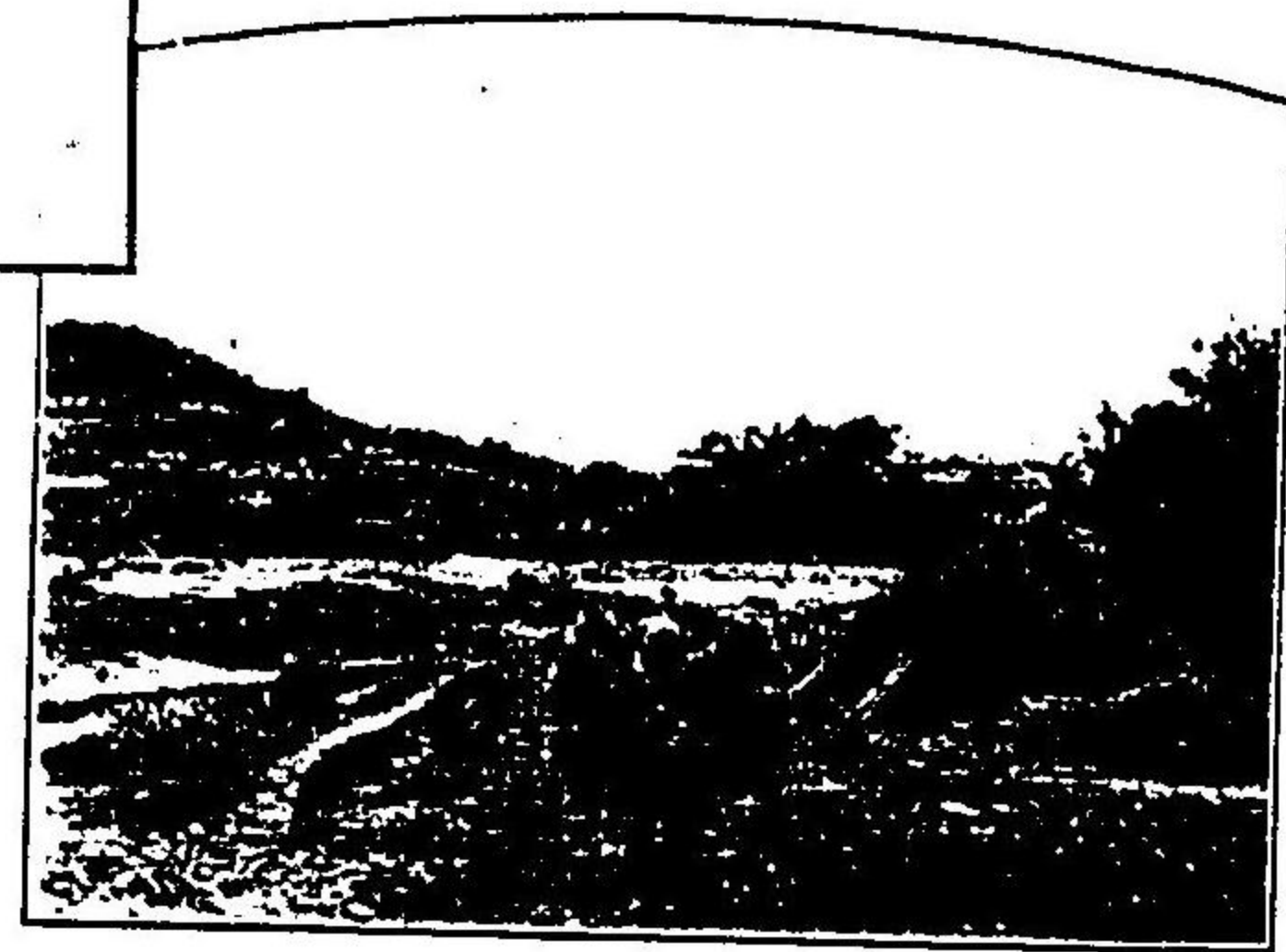


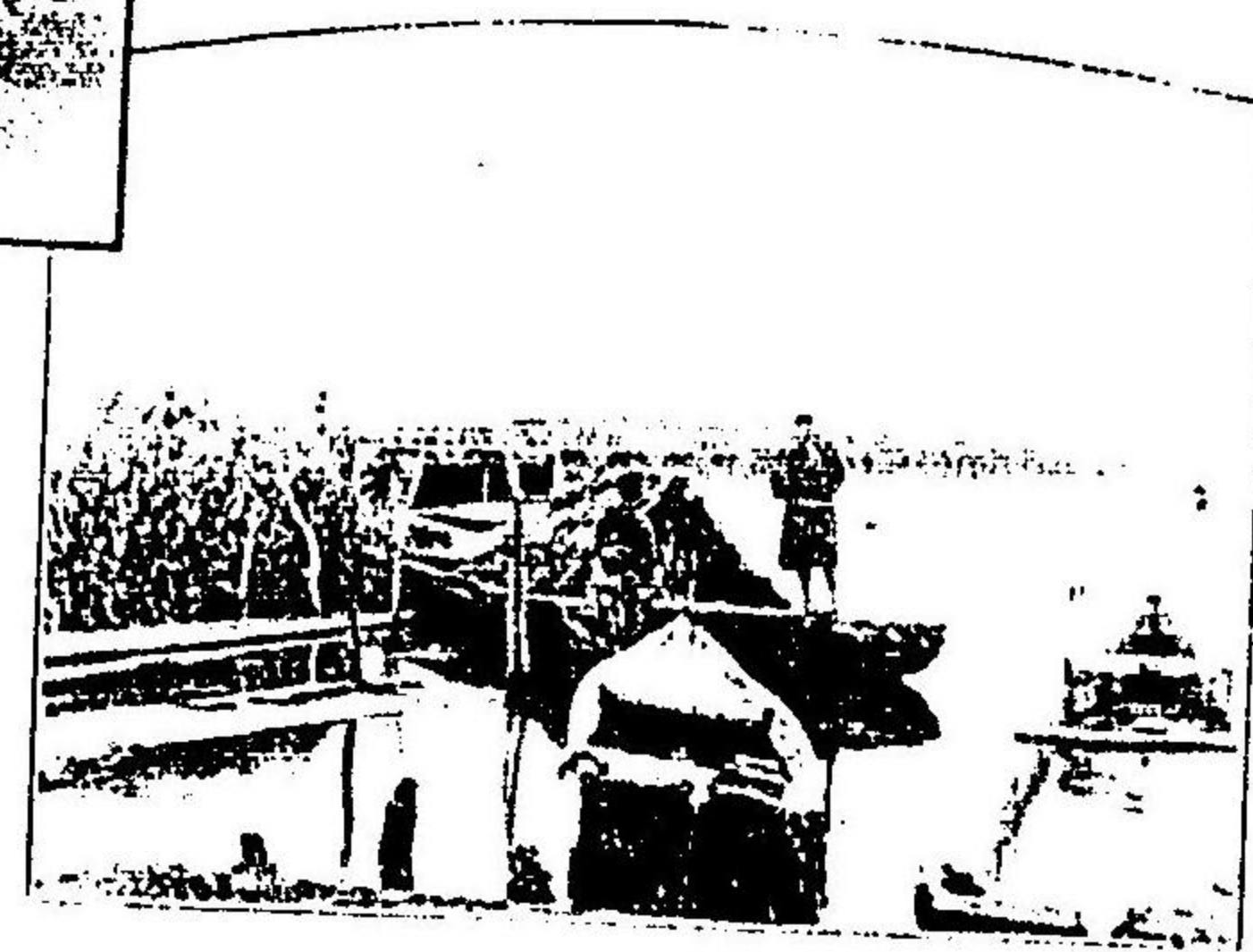
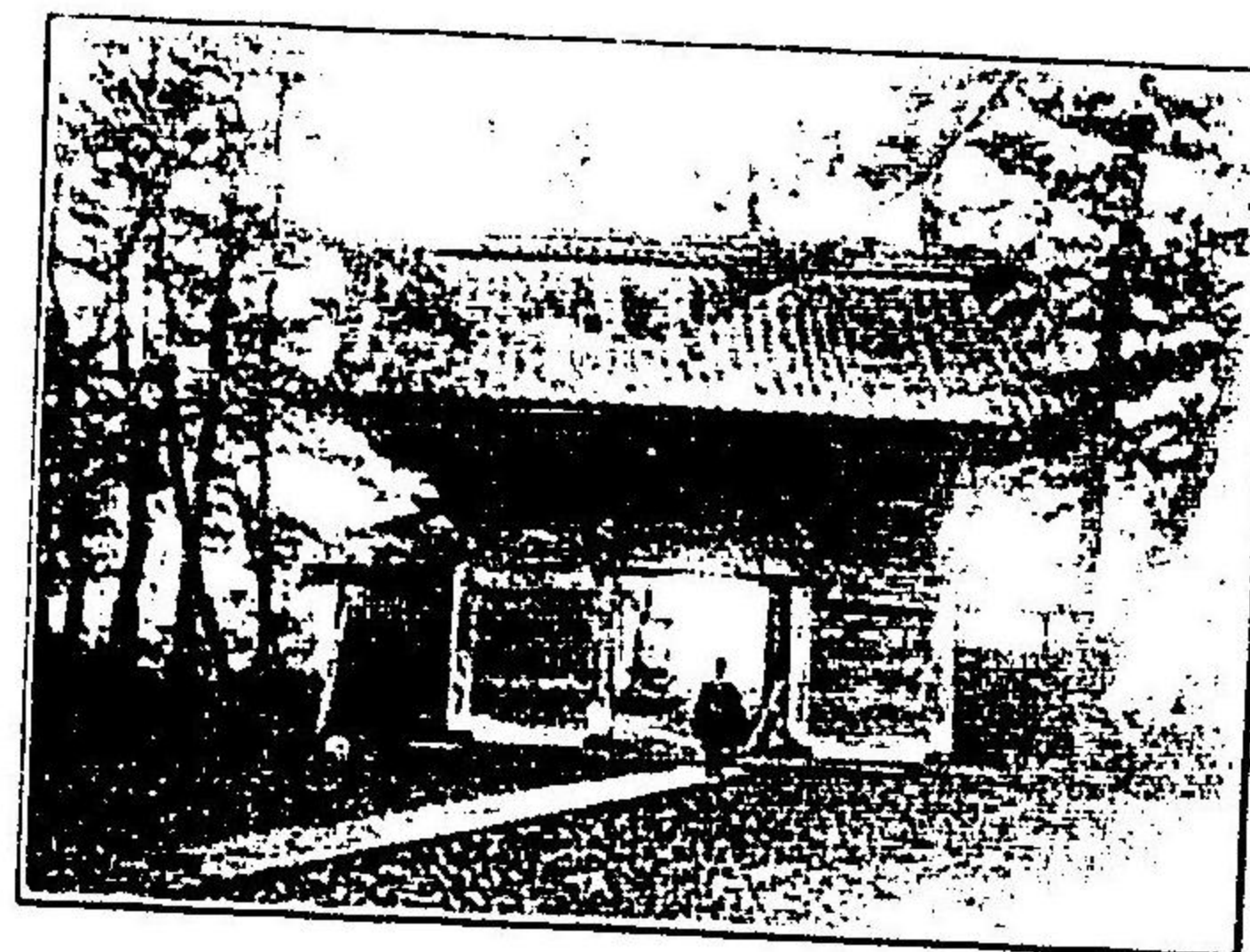
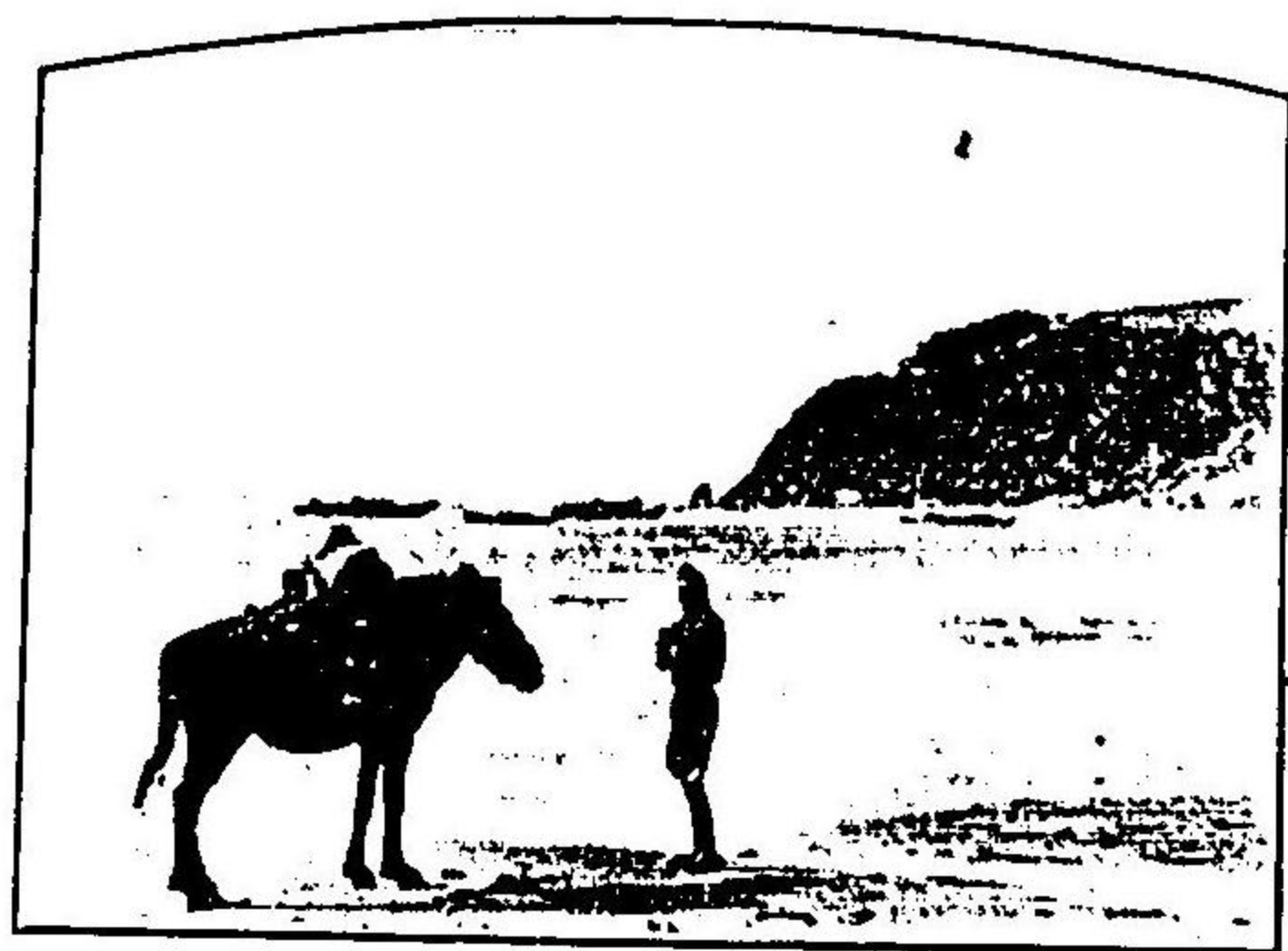


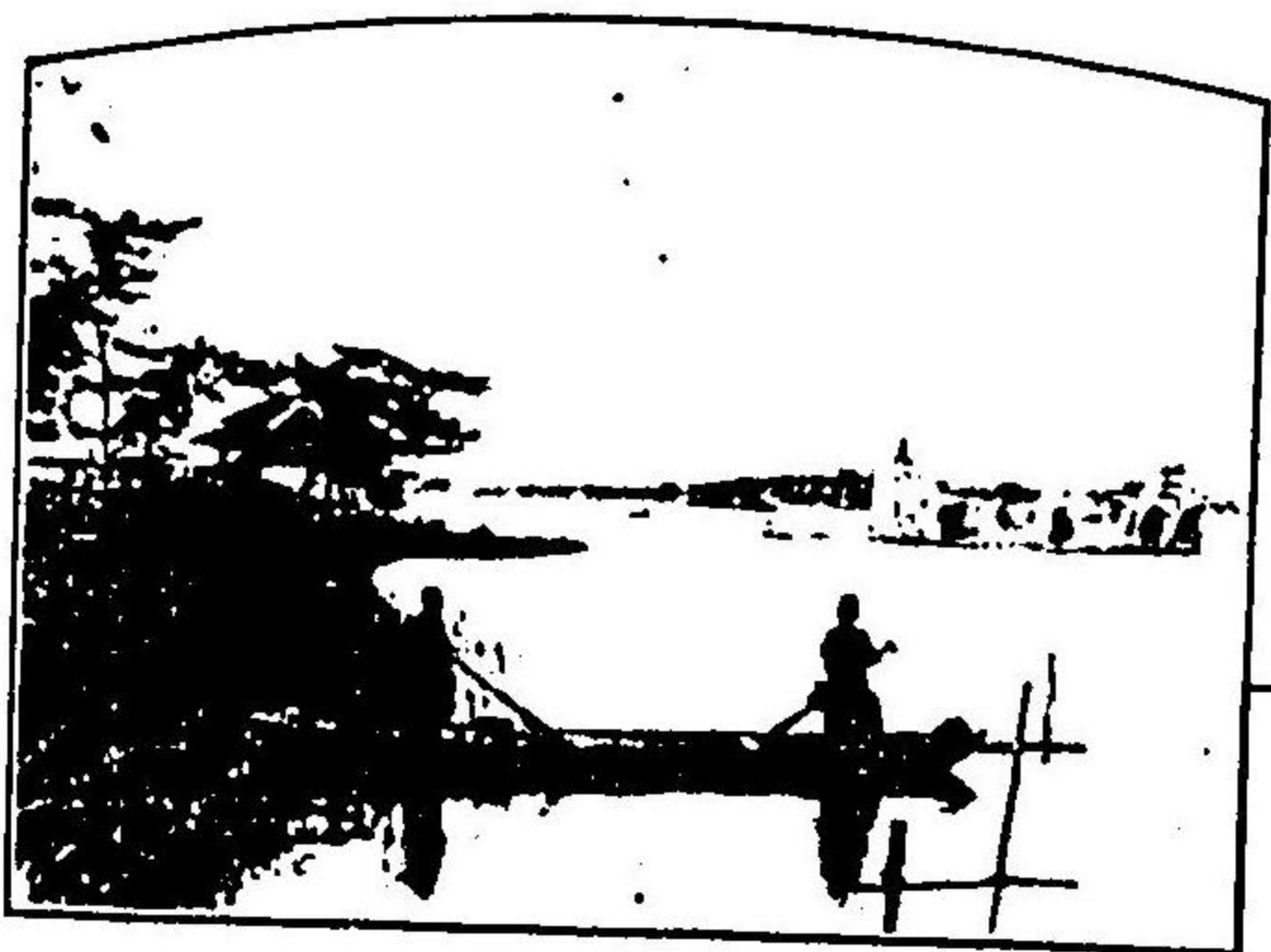












# 千山萬水目次

九重の山水……………一

赤坂御所○仙錦閣○洗心亭○聚芳亭○寒香亭○菊花壇○丸山のお茶屋○蓮池のお茶屋(廿一年)

濱の離宮……………六

お濱御殿○汐先橋○月島○延遠館○御臺場(廿八年)

植物御苑……………九

新宿○養蠶室○植物苑○家鶏苑○主獵局出張所○高千穂艦の猿懸○御休憩所○飯田町停車場(廿八年)

富士の山苞……………一四

駒込の富士○御殿場○瀬川原村○興平治茶屋○富士の裾野○駒返し○太郎坊○東口○

一合目○虎杖ヶ藪○二合目○二合二夕○三合目○寶永山○四合目の日出○五合目○六合目○黒岩○七合目○八合目○大だるみ○胸突八丁○屏風岩○劍が峰○噴火口○銀明水○駒ヶ嶽○淺間神社○絶頂の雨風雷電○頂上の明月と日出○成就嶽の雲の河原○下山の走り○紀念の金剛杖(廿一年)

七湯めぐり……………二八

箱根○湯元○塔の澤○宮の下○堂ヶ島○底倉○木賀○小湧谷○蘆の湯○曾我兄弟墓○血の池○蘆の湖○離宮○箱根権現○元箱根○上長坂○三島○黄瀬川○愛鷹山○沼津○浮島ヶ原○富士川○由井正雪の郷里○清見寺(廿五年)

三保の松原……………三四

三保の乗合舟○三保明神○羽衣松○清水

港(廿五年)

清水の龍華寺……………三七

鍛丹寺○龍華寺○大蘇鐵○湊橋○江尻○松田○二川村○小田原○風祭村(廿五年)

京遊記……………四一

嵯峨御室○祇園社○三本木○下加茂○出町の橋○加茂社○大極殿○山端○修學院村○大原女○平八茶屋○島原太夫道中○壬生狂言○南禪寺○無隣庵○瓢亭○圓山應舉の寺○祇園の清々(卅年)

木曾五鶏行……………四八

木屋町の格屋○七條停車場○美濃大垣○夜芝居○風俗の一斑○岐阜の玉井屋(卅年)

太田の渡……………五六

新加納○各務野○鶴沼○犬山の城○香掛○木曾川○拙堂の文○観音坂の景○犬山○太田

田の渡○伏見の里○御筋(卅年)

日吉峠……………六九

次月村○日吉月吉○日の叢○月の叢○釜戸○大井○十三峠○坂本○中津川橋(卅年)

須原の宿……………七四

美濃信濃の落合○博徒のユスリ○龍殿○山口新道○賤母橋○吾妻橋○三留野○駒ヶ嶽遠望○野尻○須原の名物さるゝ汁と花漬(卅年)

寤覺の床……………七九

小野の淵○滑川橋○寤覺の里○名物の蕎麥切○床山の景○臨川寺○浦島の社○貝原篤信の評(卅年)

棧の跡……………八二

上松○御嶽山○木曾棧の跡○福島の町○木曾の子傳唄○手鞠唄(卅年)

義仲の奮里……………八五

宮の越○徳恩寺の巴山吹の墓○木曾義公菴里碑○義仲論○巴ヶ淵○上吉田○藪原○名物のお六櫛(卅年)

鳥居峠……………九〇

頂上の御嶽社○奈良井の藏餅○鎮目明神○挽物細工○鐵砲心中○登川の檜楊枝○櫻澤○本山○洗馬○義仲馬洗の清水○桔梗ヶ原○松本(卅年)

松本城……………九五

松本の萬菊○松本古城○穂高村○高瀬川○下押野○犀川○川手村の夜泊(卅年)

下犀川記……………九九

下船の準備○奔流激湍○棹纒の如し○粉挽き舟○山水寺の絶勝○新町○久米路の橋○篠井○上田(卅年)

善光寺……………一〇六

上田の國分寺○別所の安樂寺○四層八角塔○別所の温泉場○長野○善光寺の通夜○鼻の都(卅年)

川中島……………一一〇

千曲川と犀川○川中島の古戦場○謙信と信玄の機智○西條山○山本勘助の墓○諸角豊後の墓○八幡原○武田左典殿の古碑○松代城趾○象山の遠望○堤の長橋(廿七年)

月の松島……………一一五

大河原○仙臺市針久○青葉山○躰躰ヶ岡○老女淺岡墓○青葉の城○宮城野○鹽竈神社○籬の島○福浦島○五大堂○雄島○觀瀾亭○三交の松○渡月橋○富山の観音堂○瑞巖寺○松島停車場(廿九年)

嚴美溪の櫻……………一二八

陸中一の關○人間の生勝○磐井川の上流○  
熾美溪の奇勝○神工橋○達谷の窟(廿九年)  
平泉の廢趾……………一三三

清原氏三衛の古跡○芭蕉が夏草の碑○南大  
門の趾○大泉の池○化粧坂○大阿彌陀堂○  
其衛室の古碑○佛像の玉眼○中尊寺○光堂  
○北上川と衣川○山の目村(廿九年)

外が濱路……………一三九  
陸中の盛岡○公園の夜櫻○南部袖さば薬者  
の別名○方言○俗語○尻内○浅虫の湯○背  
森の鍵屋(廿九年)

日光山の一葉……………一四五  
二荒山○鳴虫山○大谷川○神橋○含滿淵の  
夜景○中禪寺(廿四年)

阿武隈川の秋……………一五〇  
流車乗客の品定め○栗橋の洪水○宇都宮○

○俚語流れ山節(同)

松川浦……………一六七

鹿島○銘酒將門○相馬中村○松川浦○水壑  
山○夕顔観音○十二木松○離れ島○沖ヶ島  
○文字ヶ島○原釜海水浴(同)

さんざ時雨……………一六九  
新沼浦○駒ヶ嶺○伊達政宗がさんざ時雨の  
唱歌○亘理○阿武隈川○岩沼町(同)

竹駒の社……………一七〇  
竹駒神社○奥の細道○武隈松の古事○仙臺  
と盛岡(同)

津輕の浅虫……………一七二  
外が濱路○南部領○津輕の浅蟲温泉○鷗島  
○湯の島○津輕の熱海○三國屋の支店○青  
森○弘前○碓ヶ関(同)

碓ヶ関の雨……………一七四

福島○松葉館○阿武隈川の月夜○奥州の盆  
踊○その風俗○俚語○盂蘭盆の送り火(廿  
七年)

常陸の平潟灣……………一五九  
東北七州○田端○千住○龜有○土浦○水戸  
○高萩○磯原○關本より下車○平潟灣○常  
磐の境(卅年)

勿來關……………一六〇  
二ツ島○勿來の關趾○濱街道○關田村○勿  
來の停車場○湯本○磐城平町の住吉屋(同)

波立の薬師……………一六三  
磐城の久の濱○波立の薬師堂○波立岩○廣  
野○木戸○不動鍛冶○富岡(同)

相馬の野……………一六五  
相馬○名馬の産地○浪江○小高○相馬の原  
○五月中の中野馬道○露と添寝○原の町

胡北に入るの情○屋後の温泉○曾吾半ば通  
ぜす○旅窓の小雨(同)

矢立峠の墨雲……………一七五  
乗合馬車○矢立峠○官設鐵道難工事○工夫  
の話○馬車の危険(同)

能代竹枝……………一七七  
羽後大館○鑛山多し○名物櫻皮細工○鹿笛  
と好野○米代川○小繋○馬車中の新味詩○  
能代町○土地の藝妓○秋田名物の俗語○コ  
の字盡し(同)

雄鹿の島山……………一七九  
雄鹿半島○無人境○釜谷村○砂丘○寒風山  
の一角見ゆ○アヤ小屋○電交りのスマキ○  
駄馬に棍棒○日本海の怒濤○銀山扇來的の  
大波(同)

蘇武澤古事……………一八二

蘇武の澤○俗説蘇武牧羊の地○蘇武の坂○北浦の一角見ゆ(同)

寒風山○本山○眞山○死火山○蘆花十尺不見海○相川○北浦名物の雄鹿脚○雪前の大瀧○湯本(同)

湯本の凄雨……………一八五

雄鹿の湯本○寒村の湯槽○寒夜の困臥○島人の根性○加茂村○透對三鞭○大暴風雨の後○布目沼○馬の草山○北浦海峡遠望○戸賀灣(同)

戸賀と門前……………一八八

戸賀と南浦門前間○所謂雄鹿の絶勝○梅雨頃の舟遊○獨木舟○奇岩怪石○神工鬼斧○すがの瀆○沖立岩○蓮花岩○門前村○長樂寺の寶篋印塔○双六村○村長の家(同)

金川灣の大雹……………一九〇

日本海邊の月夜○羽後舟川灣○金川の三層樓○秋田八丈の夜具○朝の大雹○馬上の人○松越村(同)

八郎瀧の清波……………一九一

松越の漁村○八郎瀧橋○立場の茶屋○追分の松原○土崎町(同)

土崎の割烹……………一九三

町並は宛然西京○一丁の割烹○名物八郎瀧の鮭○御物川の鮭○芭蕉菜の香の物○庖丁鹽梅○主人自らの割烹○秋田市○小林旅館(同)

秋田の蒔摺……………一九五

秋田の菰冠○後家宿○名物の蒔摺○能代の春慶塗(同)

象瀧の今昔……………一九七

御物川○新屋○下瀧村より鳥海山遠見○羽

川雄鹿島願望○日本梅邊さんど小雨○内道川の古風○松ヶ崎○本庄町○平澤○金浦○象瀧町○象瀧埋没の古趾○嘉祥と安永の地震○土地の隆起と陥落○蛙滿寺○鳥海山や近し(同)

有耶無耶の關……………二〇〇

奈曾の白橋○有耶無耶の關趾○關村は對す羽前の鼠ヶ關○千貫岩(同)

鳥海の山嵐……………二〇二

女鹿島○三崎峠の雨○女鹿村と男鹿島○湯の田鹽湯○千鳥の間眺望(同)

吹浦の俗謠……………二〇四

吹浦村○鳥海登山の入口○官幣社○子傳唄○錢コを撒く○村童錢を争ふ(同)

酒田の魔窟……………二〇七

酒田の宿○地震後の疲弊○四輪一代男の酒

田管見○浮風○本間家の威望○俗謠(同)

最上河畔の夜泊……………二一〇

酒田町外の最上川○清川○最上川沿岸○本合海(同)

尾花澤の下露……………二一一

船形村○馬上の親子○尾花の波○瀬見温泉の分れ道○尾花澤の町○名物の紅花○楯岡○天童○長町○山形市(同)

阿古屋の松蔭……………二二三

山形の後藤屋○千歳山萬松寺○藤原實方○中將姫○上の山温泉と川樋村○刀工水心子の生地○赤湯○米澤市(同)

鷹山の遺風……………二二四

夜陰の機聲○鷹山公の遺徳○殖産興業○旅館音羽屋の本支店(著者の生家)○名物の絹糸織物と生糸○龜岡村(同)



龜岡の文珠堂……………二二六

智慧の文珠○日本三文珠の一○門前酒樓の別杯○高島○二井宿村(同)

二井宿の義民……………二二七

絶代の義民高梨利右衛門○渠は名主なり○米澤藩代官の虐政○大老直訴○大義徹底○磔刑○義民の巨人石碑○二井宿峠○湯の原宿(同)

材木巖の奇勝……………二二八

七ヶ宿山中○關と渡瀬○材木巖○林鶴梁の文○小原の温泉場○磐城の白石町○蘇峯先生に逢ふ○東都に着す○東遊記○東遊雜記○遊奥曆○七州を一周了す(同)

鹽原越……………二二〇

恐山と立山の比較○地獄變相の圖○活火山○野西那須野○三島知事の開墾○三島神社

若松の城趾○白虎隊の飯盛山(同)

若松城……………二四五

全盛の小唄○天主臺の跡○若松の町○戊辰當時の時事談○智慧山川と鬼佐川○會津戦況○朱雀○支武○青龍○白虎隊○一隊の女軍○君王城上樹降旗○東山の湯本○七曲峠と柳津(同)

柳津の山水……………二五二

柳津の夜景○會津の鋸米澤の鎌○名工中屋重左衛門○名物の繪蠟燭○福満虚空藏菩薩○永代開帳の札○只見川の風景○坂下の市街○青緞の錢○女丈夫中野小竹○女隊官兵を惱ます○耶麻郡の喜多方町(同)

喜多方の在郷……………二六二

大鹽村○熊の皮○大鹽峠の磐梯山遠望○劫餘の民と語る○松明を點して峠を越す○檜原村○村内の禁制○檜原湖畔の一夜(同)

社○關谷○箒川○環青橋○見返橋○大綱○宛轉橋○兒が淵○寒凄橋○材木岩○福渡戸○野立石○高尾塚○古町○楓川樓○上鹽原村○尾頭峠○荒湯○白河攻撃の間道○鹽谷郡上三依村(廿九年)

横川の不動瀧……………二三一

尾川○瀧の如き大瀑布○山王峠(同)

南會津の片山晒……………二三四

鹽原の間道○山王峠○麓の新驛○會津領に入る○山王茶屋○糸澤と川島○南會津郡田島町○名物の片山晒と五郎丸○田島の淫風○彌五島(同)

塔の絶勝……………二四一

塔の絶勝○巖悉く五輪の塔形をなす○洞腹の人道○溪流の浸蝕○火山の作用○地壺○土塔○石林○三十五米の土塔○白岩の村落○山王川○湯の上○小田山と天野川○

磐梯登山……………二六八

埋没者招魂碑○新榎原湖○水底の村落○大磐梯山見ゆ○長峯村○埋没者の遺族○無数の焼山○舟を捨て、斷崖を渡る○小磐梯山の噴火口○川上温泉○上の湯を再興す○猪苗代道○萬年草○郷土穴澤氏の怪談○慘風悲雨○老猫の怪○猫間ヶ嶽の古事○猫切丸と忠義の犬○會津藩の雨乞○開夜幽靈湖を渡る○政宗會津攻の古跡○湖上雨を衝いて榎原に歸る(同)

米澤の夏……………二八三

木挽業○會津漆器○木地の價○榎原峠○綱木峠○山中知人に遇ふ○關村○高湯道○小野川温泉○米澤に入る○殉死○墓參○佐氏泉○板谷(同)

新興の細道……………二九三

芭蕉繪圖に據りて奥羽を旅行す○故郷○關

山隧道○作並温泉○仙臺の抱翠館○榴ヶ岡  
○松島の朝霞○瑞巖寺無相窟○鹽釜太田樓  
(廿三年)

飯坂の月夜……………三〇一

飯坂の堀江○剃髮川○大なる釣橋○湯の村  
温泉場○男女混堂○大瀧村(廿四年)

故郷の錦繪……………三〇五

二ツ小屋○満山の紅葉○西陣織物の雛形○  
栗子峠○その隧道○故郷の快樂○佐氏泉の  
白鶴臺○嗣信忠信の父○名物の甚句踊(同)

雪の細道……………三一三

岩代長岡停車場より飯坂に行く○花水館○  
満山成雪○巨懸橋に婦人を入れて負ふ○洞  
中の氷柱○米澤婚禮風俗○割出川原の風景  
○佐氏泉旅舎音羽屋支店○中田村の不動堂  
○名主の義侠○領主貢米の二樹○磯柱上の  
義民○材木蔵○白石川の春色○東都の夏

噴火行……………三二一

磐梯山破裂○三界火宅○地下の秋元部落○  
噴原不見人(廿一年)

海嘯行……………三二五

東奥の大海嘯○無縁の新墓○岸頭の伏屍○  
人焼く煙○不祀の鬼○乳狼咆哮(廿九年)

滄浪閣……………三三一

滄浪閣上の春風○小磯の海○詩と書○春畝  
侯の美術論○鳴立澤の西行庵(卅年)

椿山莊……………三三六

目白臺の椿山莊○西南戦争當時の木材○天  
狗怪松○乞食谷○福徳館○庭中の眺望○小  
笠原島産材の四阿○駒塚橋畔の裏門(廿九  
年)

芭蕉庵……………三四二

關口の風景○芭蕉庵○眺望恰似瀨田橋○上  
水開發○芭蕉の卜居せる古跡○田中子爵の  
邸(同)

多聞山莊……………三四五

早稻田の山莊○茶會○茶室の構造○守宮が  
池○多聞天堂の古礎○武蔵野合戦の本陣○  
炭籠の珍談○日清戦争陣中の逸話○夕日の  
紅葉(卅一年)

深秀園……………三五一

安田家の別邸○大川端の西洋館○庭園の風  
致○勤儉の美德(卅一年)

葵坂の大邸……………三五五

葵坂の大名屋敷○銀婚園遊會○踊舞臺○廣  
庭のおでんや屋○栗餅の曲揚○西洋館上の  
眺望○天下の名士○所費五萬圓○五十萬圓  
の商業學校○大倉君の大膽(同)

春の風……………三六三

年男の若水○洋服に赤毛布○田舎芝居の産  
辭○大雪の狂句○京都の「おのぼりさん」○  
六條と三條の誤解(廿九年)

長柄山の夜雨……………三六八

兩國の赤馬車○市河の渡○手古那の社○鴻  
の臺と真間○千葉の加納屋○茂原町○長柄  
山の夜雨○六部と道連○木賃宿の一夜○旅  
日記と小遣帳(廿二年)

花見沙干……………三七三

昔の様○今の態○家庭和樂と花見沙干(卅  
年)

目黒の秋……………三七六

品川御殿山○目黒の内田屋○不動尊○比翼  
塚○飯田町の汽車○新橋(廿八年)

練馬めぐり……………三八三

御殿坂○姫婦の縊死○氷川神社○于安天神

○葉嶋の庚申塚○近藤勇の碑○板橋の町○  
乗蓮寺の相生杉○女男松○相生縁結びの杉  
○縁切榎○練馬の大根○志村の清水坂○空  
屋の丁半○戸田川○川越下りの舟○肥料の  
相馬○小豆澤の渡場○川口の善光寺○天然  
痘の祈禱札○名物の鐵器○赤羽○田端の停  
車場○白山の關路(廿年)

柳島の萩寺……………三九四

許六萩の譜○宮城野の萩○柳島の龍眼寺○  
芭蕉の碑○觀萩亭○向島の萩(廿三年)

花屋敷と道灌山……………四〇一

北里の歸雁○淺草の駒形堂○待乳山と竹屋  
の波○向島の花屋敷○秋の七草○小梅引舟  
の通○柳島の裏手○閑人の別墅○王子の秋  
○道灌山の聽蟲○日暮里の夜色(廿四年)

夢香洲……………四〇七

永代橋の川蒸汽○新大橋○兩國○麻橋○緋  
毛布の三徳○吾妻橋○乗合舟○三圃社○牛

○奥の院○胎内くゞり○鮑捕り○裸鉢の美  
感(廿二年)

鳴の羽田……………四三九

廣重の風景畫○大森より羽田○名物麥葉細  
工○太鼓の講釋○狐思信の波皮○羽田の渡  
○辨財天の社○穴守稻荷○雨の狼鞍(廿九  
年)

矢口の渡……………四四三

避暑の風習○別荘の濫用○品川より駿洲○  
鈴ヶ森の曙○池上の朝露○本門寺の伽藍○  
新田神社○十騎社○矢口の渡○平賀鴈溪の  
脚本○川崎の土手○平間寺(廿五年)

武藏野の夏……………四五一

新宿停車場○園分寺行○その古跡○古瓦○  
逸水○府中○武藏野○北條氏康の紀行○玉  
川砂利○一の宮の渡○百草村松蓮寺○百萬  
石の田面○八幡社○玉川の眺望○高幡村の  
不動堂○日野(廿四年)

の御前○長命寺の芭蕉堂○花時の穀漕○白  
鬚社○小松島園○水神の森○木母寺○綾瀬  
川○墨堤の花月○首尾の松(廿三年)

行春の日暮里……………四二五

上野の博覽會○汽車中の觀察○飛鳥山の晚  
春○霞籠の茶屋○運動會○日暮里の養福寺  
○梅翁宗因花檀碑○天王寺の五重塔○不忍  
池畔(廿三年)

盆あゝる記……………四二一

氷天宮の縁日○本所三之橋○菊河橋○古寺  
の白張提灯○横川河岸○洪團扇と螢○業平  
橋の由來○津輕の原の怪○五百羅漢寺○二  
ッ目通○美人と籠蟲(廿二年)

江の島入洞記……………四二八

横濱村○高輪の泉岳寺○神奈川○藤澤の遊  
行寺○小栗判官と照手姫墓○江の島○珍味  
佳肴○旅館樓上の眺望○海上の明月○日出  
○窟の辨天○名物貝細工○掛茶屋の望遠鏡

青梅八景……………四六一

飯田町發車○青梅町○水車小屋○吉野村の  
梅林○萬年橋○御嶽の入口○澤井の溪流○  
多摩川の上流○二又尾の村家○青梅五番組  
○驛長の親切(廿年)

杉田梅見の梨……………四六五

横濱より二里○車橋發船○根岸の堀割○本  
牧沖の眺望○杉田の波止場○妙法寺の古梅  
○名物の花漬○東屋の割烹○吐月峯○房州  
一帯の遠望(廿四年)

晴好雨記……………四六九

杉田再遊○花の眞盛○富岡○金澤稱名寺○  
所謂武州金澤八景○瀬戸の東屋○夏島○鳥  
飼子岩○舟行横須賀○鈴ヶ森の春月(廿九  
年)

柳の都……………四七六

相州鎌倉○白旗山○雪の下○長谷○三橋旅  
館○稻村崎○松間の露花(廿五年)

逗子の避暑

逗子の海邊○夏の朝○船虫と蟹○白瀬不動尊○岩蔭の子守唄○葉山の眺望○小坪村○鎌倉の材木座○小間龍(廿八年)

横須賀の夏月

軍艦の進水式○鎌倉雪の下丸屋○横須賀町○灣口の海水浴○恰好七月七夕○巖岸島着松(廿五年)

箱根の一夜

國府津○酒匂○小田原○湯本○塔の澤環翠樓○徹夜の豪遊○七湯めぐりの一隊○玉簾の瀧○早雲寺○大磯の鳴立澤(廿年)

熱海の冬

歳晚の行樂○小田原○石橋山○給の浦○初島遠望○熱海(廿九年)

清風明月

八百八街の夏夜○田家の清風○夏の不忍池

草花○山寺の避暑○聽虫(廿五年)

月瀬の春

新橋○名古屋志那忠○名物の大根○熱田の宮○四日市○拓植停車場○關西の箱根山○伊賀上野友生屋○伊賀越復讐の古趾○芭蕉の誕生塚○大和月ヶ瀬の鍋屋○梅林(廿六年)

笠置山の今

柳生村○笠置山○笠置の古事○鶏の森○後醍醐帝行宮御趾○笠置寺毘沙門堂○彌勒岩○貝吹岩○アスカセ村○水津川(同)

奈良の古都

水津川舟行○南笠置○駒返し岩○廻野原○水津町○奈良御門町○猿澤の池○興福寺の塔○元林院○木辻○春日神社○鹿のむれ○若草山○二月堂○東大寺の大鐘○大佛殿○南圓堂○奈良の旅籠屋○名物青丹よし○あられ酒(同)

法隆寺と初瀬

法隆寺停車場○菜の花○七堂伽藍○峯の薬師堂○金剛葛城山の遠望○畝傍山○三輪明神社前の茶屋○初瀬○長谷寺の階段○觀音堂の舞臺○瓦の寄進○壺坂越(同)

多武峰

櫻井町○多武峰○談峯神社○巫女の神樂○天笠菴羅樹○十三塔○旅舎花中宿○一軒茶屋○上市○妹山脊山○櫻の渡(同)

吉野の花

花の小道○一目千本○金の鳥居傍佐古屋○藏王堂○吉水神社○如意輪堂○延元帝御陵○小楠公髻塚○竹林院○山駕籠と兩掛の辨當○宛然元祿の花見○村上義光の墓○官幣吉野社○晴傘翳せる花見連○吉野川○車坂○御所町○高田停車場○河内○大阪港町○梅田より京都○京の逗留○歸東(廿六年)

瞥見東海道

箱根の山水○關ヶ原古戰場○江州馬場○大津町中村屋○雪の朝(廿七年)

雪の三井寺

三井寺の雪曉○辨慶の釣鐘○力餅○八景遠望○唐崎と石山○大津の町家○疏水の舟行○京の職上(同)

西京めぐり

三條の旅舎○京極の仁和賀○四條の千もき○東山の雪○祇園と圓山○東大谷○康頼の墓○四行庵○木屋町の生龜○年越の奇風俗○老女の若づくり○小娘の丸鬢○畑の媼の柀○炮烙に年齢を書いて奉納す○淫風(同)

島原の春宵

桃源の宿○大門○出口の柳○揚屋は角屋○お座敷拜見○二百五十三年前の古家○輪違屋○元祿以前の古風○盲啞院○女公事師○

五條大橋渡り初○五十四組の尉と姥○百五  
歳の長壽者○大坂瞥見(同)

京の東山……………五四五

東本願寺○清水○歌の中山清閑寺○小督の  
塔○西郷南洲翁の隠れ家○澁谷街道○花山  
村○空也念佛○鳥邊野○阿彌陀峯(同)

夜雨の泉山……………五五一

京都泉涌寺○夢の浮橋○山門○月の輪御陵  
遙拜(卅年)

青丹よし……………五五五

七條停車場○伏見と宇治○奈良再遊○小鍛  
冶の刀○旅舎菊水○古都の一夜(同)

舞子の濱……………五五七

松風村雨の繪○神戸光村氏邸○一の谷○福

以上

### 千山萬水目次終

原○舞子の佐海屋○淡路島○磯馴松○牛車  
閑なり(卅年)

須磨寺の櫻漬……………五六二

辨慶の什物○敦盛の若木櫻○須磨寺の伽藍  
○漁家二三點○白沙青松(同)

車上馬背……………五六四

辭關歌○鎌倉懷古○米澤歸省中作○所感  
○登嶽所見○登嶽十首○犬吠岬所見○太平  
菴即事○犬吠途上○偶作○返子客舍作○春  
夜○夏夜偶成○墨堤所見(廿一年以後)

をりく草……………五七一

萩○秋の旅人○播衣○初秋○旅枕○小夜砧  
○紅葉○雪○深山の秋○わが宿○松人○浦  
わ○茅が崎○白扇倒懸○繪の島○金龜樓觀  
望○漆の柳○初春○九重の空○田家煙(同)

# 千山萬水

乙羽生著

## 九重の山水

いとも目出たき事こそあれ、赤坂の御所に菊花を拜観せるは、去年十  
一月廿四日、昨日の雨は跡なく霽れて、天高く、氣澄み、風光大に人  
に佳なるの時なりし、此の衛士にゆるされて、表門を入れば、御料局  
あり、また門を入りて東宮殿あり、次の門を過ぎて坂を下れば、茶園  
あり、茂樹の間を通りて、仙錦閣の前に出づ、清き池に橋あり、閣の  
横手に徑ありて、奥庭に通ふ架とす、菊園に通ふ間には、紅楓あり、  
小かなる流れありて、古りたる石橋を架せり、やがて第一の菊の園に

# 千山萬水

乙羽生著

## 九重の山水

いども目出たき事こそあれ、赤坂の御所に菊花を拜觀せるは、去年十一月廿四日、昨日の雨は跡なく霽れて、天高く、氣澄み、風光大に人に佳なるの時なりし、先づ衛士にゆるされて、表門を入れば、御料局あり、また門を入りて東宮職あり、次の門を過ぎて坂を下れば、茶園あり、茂樹の間を通りて、仙錦閣の前に出づ、清き池に橋あり、閣の横手に徑ありて、奥庭に通ふ栞とす、菊園に通ふ間には、紅楓あり、小かなる流れありて、古りたる石橋を架せり、やがて第一の菊の園に

入りぬ、花壇は三所に分れて、霞の小屋をかけぬ、花は見頃は過ぎたれども、なほ七分の匂ひありて、黄菊白菊これほど驚かるゝもありき、そが中にも御衣の黄、賤機山、新月の光など、忘れぬ名なり、糸菊とて、烏毛のやうなるがあり、狸々の髪振亂したるがどとき、また神仙の鬚の如きもあり、なほ進むに、紅葉の夕日にかゝりやきて、樹の間より見れば、その色の美しくしき、爛熳せるやうなり、小川に落葉して、ちよろ／＼流れに、寂びたる橋をわたせる、燈籠の雨に黒みたるなど、何たる風流ぞや、また松と楓の林を過ぎて、廣場に出でたり、道は山の麓につきて、古松に颯々の聲あり、池は平地にありて、斜に橋を見せぬ、彎になれる一路は山と水とに沿ふて、竹の門に入り、小高き丘に登る、道の兩側に熊笹生ひ茂りて、間々紅葉をあしらひたり、こゝに若し狩衣召したる殿上人などおわせば、土佐の繪の蔦の細

道の圖は、これなるべし、丘の上に洗心亭あり、その前に立ちて麓の方を見下せば、池には松と紅葉の影を蘸して、橋は虹の如く見えぬ、小徑を入れば、椿の植え込みありて、花の地に蹴れたるさま、心地よし、また亭あり、こゝには五所に花壇を設けあり、一番のに嵯峨の奥などいへるがあり、二番のには蘭麝、花貝、白髪などいへるがありき、さて三番の花壇に植えられたる菊は、一莖に一輪の花をつけたるのみ、その名も月の都、あけの空、延年、初冠、沖つ波、大江山、白玉など、優しきが多し、花壇の蔭に進めば、笠松の大地に蟠かまれるがありて、丘の上の亭は眺望よし、立食の建物もこゝに設けられ、玉座の趾も残りたり、また前の花壇の處に戻れば、庭面に小菊を數多植え込みて、その美しくしき、花毛氈を敷きつめたるが如し、四番の花壇は、一株に千二十輪の花をつけたる、儀宴の盃、赤城、雛鶴など、その

菊に相應しき名をつけたり、五番の花壇には、中菊の一枝に咲分の美  
くしき、花紅葉色々なるは、西の國の人なんどの好む所なるべし、聚  
芳亭あり、實に花を真中に聚めたる小亭、陪觀の榮を荷ひたる月卿雲  
客の胸には金光燦爛たる徽章つけて、此處に彼處に群れ居つ、君が代  
の千秋萬々歳、天地と共に窮り無き齡草の、花を愛でたるその日の、  
如何に莊嚴なりしや、坂を下れば池の畔に出づ、橋あり、山の容、嵐  
山の傍あれば、麓の水に架せるを、渡月橋と見立てなば面白かるべ  
し、池に沿ふてまた上り、鬱鬱たる松の林に入る、なほ進めば、寒香  
亭あり、前に後に梅の林ありて、樹に千古の苔青し、坂を下りて、ま  
た山路に入る、松は千歳の古木、紅葉は幾夜の霜に飽いて、赤きがあ  
り、黄なるもあり、夕陽は木の間を洩れて、谿間の熊笹を照らせば、  
名も知らぬ鳥の、梢に馴れて、長閑に語るさまの妙なる、仙境とはこ

れなるべし、こゝに古き老木の根ばかりを殘せるがあるに、案内する  
衛士に問へば、これは昔時奥州街道の跡にして、それなる樹こそ、一  
里塚ならむといふ、まことや、山の容、水の態など、自然の儘にして、  
微塵も人工の痕無ければ、こゝ一二町が間は、京の中とは思はれむ、  
やがて樹の間に水見えたり、落葉掻く男の、青草の上に憩ふも見えき  
憾むらくは林間に紅葉を焚くの衛士無く、我に石上に詩を題する能あ  
らざりしを、行き行きて丸山のお茶屋の前に出づ、また菊花壇あり、  
花の名に御垣守、井出の村雨、柴舟などいふがありて、その裏手には  
温室もありたり、斯くて園内を大方は見めぐりて、もとの仙錦閣の邊  
に出でぬ、この閣を蓮池のお茶屋ともいふは、池中に蓮の多きより、  
呼び通はしたる名なるべし、池に二ツの橋あり、橋は白木の反はしに  
して、一橋渡り盡せば、路は山の腰をめぐる、水は鏡のやうに清くし



て、峰の松影を倒に映せば、山の根には舟捨てあり、次なる橋は山と山と、峙ちたる中の水に架りて、幽静なること、形容するに辭無しまた山と水とに送られて、もと來し路に戻り、ベンチに憩ひて、夕日に映つる紅葉の中に、楓林の晩を愛しつ、歸雲の山に入る景色、鳥の啼にかへる静けき態など見たりて、衛士に別れ、御所の門を辭して家路に着きぬ、嘻、菊よ、我は爾の爲に、九重の御園に、半日の清興を恣にしき、嘻、菊よ、我はその爾のあるがために、少なからぬ壽をかさぬるを得たりき、實に爾は我が爲の齡草よ。

### 瀨の離宮

日本赤十字社は戦捷の餘榮を以て、今茲在京と地方とにかゝはらず、

會員を總集して、上野公園に一大盛會を開く、この日會するもの數萬人、辱なくも 皇后陛下亦こゝに臨御し給へり。而してこの大衆は、紀念盃を拜受して後、お濱御殿の拜觀を許さる、予亦その中に在り、その記左の如し。

先づ汐先橋を入るに、觀る者絡繹として、來往織るが如く、御門を入り、衛士に許されて苑に着く、中央に池あり、八つ橋を渡して、その上に藤棚を懸く、花は若葉と變りて、薫風の輕く袂を吹けば、水には魚の波を蹴て、高く空に閃くあり、橋と橋との中程に、水上の亭あり、金碧を飾らず、座は一面に絨氈を敷き詰め、簀戸の腰張は金砂子なり、白木作りにして、四方を開き、風の通ふに任せたり、夏もなほ寒かるべし。また橋を渡りて、松青き處に出れば、庭はバナラマの如く、四望一眇の中に落ちて、木立の茂れる處、芦の戦ぐ態など、いと興あり。

海邊の小高き丘に上れば、月島は左にあり、延遜館は右にあり、高輪の月の夜は、如何に美なるべきや、波熨すが如く、白帆眠るが如きは、御臺場の邊なるべし、若し夫れ天高く、氣朗かなる日は、房總の山は、美女の黛を凝らして、天人も長閑なる春の日に、羽衣を置き忘れやせむ。鶴も九重の雲に馴れて、鳥の驚かぬ様は、諫鼓昔蒸す太平の御代なるべし。やがて御庭の中を一巡するに、こゝに鄙びたる四阿あれば、彼處には清く床しき茶座敷あり、四方の橋々も、木作りの漆を用ひぬば、自ら雅致ありて、雨に柱目の現はれたるも心地よし、木陰涼しき處には夏を忘れ、南に旭日を射けて、冬の寒さを知らずかし。松はみな苔に青みて、千歳經ぬべき大木、芝草は撫でられし如くにて、氈にも優れり、家の棟も二つ三つ、木立に隠れ、水に臨める處にあれど、いづれも質素を旨としたる。畏れ多くも彼の古き語の、茅茨剪らず、

柴椽削らざる聖代の態も思はるめり。かゝる御殿造を見奉るにつけても、今の世の紳士とか云へる族の、尙ほ宮居をも凌ぐべき高殿などつくり設けて、萬金をしも惜まざること、心憎き限りなれ。

雲の峰されども富士に如かざりき

### 植物御苑

開け行く世の嬉しさには、歌人ならぬも居ながらに名所を知り、古跡の花も鐵道の便もて、容易く見られ得るなり、されば吉野櫻も昨日益裁にのみ、その色と香を傳へたりしが、今は一目千本の名花も、小半日の見物となりて、百里二百里の道は、啣へ煙管の煙草ふかす間の、夜櫻の景煙の如しなど云ひて、小金井の月夜を、迎ひの涼車を待たし

ながら、眺めつゝ歸へるもあり、かゝる便利なる中にも、書に耽り文に泥む身の、行く春を趁はんとせで、蝶の落花を吊ふをも知らず顔せんは、餘り世に疎き業なりと、弗と家を出でけるに、遅れは遅れたれど、八重は未だ散り残りて、雨あらんを氣支ふ風情の面白きまゝ、先づ車を急がして市ヶ谷に至りぬ、戸川殘花氏を訪へば、氏はこれより新宿なる植物御苑に行けと勧めらる、よき機會なりと共にいたれば門に入らざるに先づ橋あり、水は玉川の流にして、その色清し、刺を通じて許可を得、右に折れて進み行けば、兩行の櫻樹は若葉と變りて、木陰涼し、蠶室あり、植物苑あり、なほ行けば家鶏苑あり、綿羊あり、駱駝あり、駱駝は旅順口にて分捕せるもの、左に折れて下れば主獵局出張所あり、こゝにて縁ある人に會ひ、案内を頼む、潜り戸を開けて入れば、池あり、多く家禽を養ふ、また門を入れれば、こゝに廣やか

なる庭園あり、青き木立、白き水、苔の上を渡る風の清く、架せる橋もいと古雅なり、鐵柵には珍らかなる諸鳥、晴に啼きて、心地も伸々すれば、鷹の逞ましき眼して睨みつゝ奇しき聲立つるに、小鳥の身震ひするも可笑、また門に入る、多くの鐵柵に數多の鷹を入れたり、中にノソリといへるを嚴島と名づけぬ、これ二十七年十月廿四日畢利河北に於て揚兵する前夜軍艦嚴島に來り止まるを捕へしもの、次を鷗といふ、有明と銘打ちしは同年十一月七日拂曉大連灣進軍の際軍艦高千穂大橋の桁に止れるを捕しもの、中に隼といへる鷹あり、精銳の氣他のものに優れ、能く空中の鳥を捕ふるに妙を得、この鷹も去年九月十七日の夜、我が軍は黃海の戰に勝て、月黒く風清き中を、威海衛港口に航行する時、飛ひ來りて軍艦高千穂大橋の上に止まる、出で、捕ふればこれなり、滿艦の士其瑞なるを祝し、酒を舉げ盃を

飛ばして、劍舞一番す、波平かに夜静なり、吉事を傳へ聞きたる臺閣の諸公、詩を賦し歌を詠じて、畏こき邊にすゝめ奉れりき、今眼前に、其靈鷹を見る、快云ふべからず、又旅順口分捕の鶴二羽あり、金州の人民が君が代を志ろしめせし御恵に酬ひまつらんとて、献上まをせし鶴なり、雌雄にしてその毛色美しくし、また三井家より献上の鳩數多を養ふ、其處を出で、小鳥の栖に入る、門に籠彩といふ扁額をかく、三日月音呼の羽色の美しき、青黄紅と彩りの配合の妙なるは、友染の衣着たる娘の如く、ほろくは小紋の羽織つけたる奥様の如く、さて鶴の姿の優なる、花嫁の白無垢の振袖着たるが如し、孔雀の悪く澄したるは、洋装したる美人にも似、鷺の憎さげなるは、肥え太りたる毛唐人の、脊廣の服をつけしに似たり、鸚鵡の人真似、猿猴の悪智慧、みな興を添ふる媒となり、奥庭近く進めば、鶴も馴れて人に親しみ

て、跡を追ひつゝ來る、出で、別庭に至れば、こゝには朝鮮國王より王子義和宮をして貢せしめたる白鶴あり、庭の趣は一入寂びて、木振枝振何となく床し、御休憩所は數寄屋造りにして、總檜の木を用ひたり、花欄の椽、洗ひ出し木理杉の戸袋、長三州の山水畫は十六年秋の筆にして、その圖いと巧なり、今は故人に入りぬれど、死して尙ほ餘榮ありとは、斯人の事なるべし、出で、は王侯の師となり、入りては子弟を教訓す、閑あれば花に灌ぎ、夜は月を友にして、竹窓の影婆娑たるを眺め、詩書畫の三興を遣る、文墨の士にして、王者に侍するもの、長氏の如きは稀なるべし。皇太子殿下折節この苑に臨御ましく、浩然の御氣を慰め給ふ、その未だ御幼少にましくける時、こゝに臨ませ給ひて、綿羊に猿猴などを載せさせ、いと心地快氣に戯れ給ひけるとぞ、われ等この苑にいたりて、感ずる所あるまゝ斯くは記し

ぬ、花は盛りをのみ見るものかは、若葉に色もいと目出度頃に、このいとく尊き御園を見る、嬉しといふも餘りあり、歸路は殘花氏と別れて、新宿より市中鐵道の便をかり、飯田町停車場にて下る、途中の景色の面白き、四里四方の中にはまたと見るべくもあらずと云爾。

### 富士の山道

撒水に淨めたる氷屋の店に、硝子簾の風に揺らめく夕まぐれ、石菖鉢に水揚を仕掛けたるは、都といへど、駒込は片田舎なる富士前の、その祭日に麥藁蛇を買ふ毎に、今年はくとて、富士登山を思ひ立ちたりしが、兎角に障る事のみ多くいたづらに月日を過しつるを、いかなる風の福吉町より、殿様のお召よと、御状届きたり、急ぎ御前に候へ

しに、黒田侯爵は君も行かざや、登嶽の約なりて、七日十二時半の汽車に打乗り、種竹、不折、鐵巖等六七人して、都門を出づべしと仰せある、直に御意をかしこみて、その日その刻、新橋に馳せ参じ、一番に着到につき、殿と同車し参らせて、湘水函雲、夢裏に過ぎつ、山北といふ處にて、清水法學士の第一銀行重役諸氏と、同じく登山を企てらるゝに逢ふ、さて御殿場（停車場）に着けば、豫ねては先導役野中至君の知らせ置きたる事として、この村の長勝又惠藏君の、弟五郎君と共に、停車場に迎へらるゝに合し、一同茶屋に入りて小憩、午後六時半といふに、強力五人を伴ひ、殿は後押つきの腕車を輾らせ、我等六人は馬車一輛を買ひ切りて、飛ぶが如くに御殿場を出づ、この時日は靄の裏に落ちて、十里の大野に黒き影もなく、層一層に罩むる濃霧は、村を埋め、樹を掠めて、咫尺辨ぜざるまでとなり、沙地を行く車の、

輪は深く野路に噛ひ込みて、鞭撻てども、馬は前む氣色も見えず。折  
から土橋架せる小川ありて、水も左までに深からぬを、馬子は案内知  
顔に、馬に一鞭あつると見るや、橋の上より眞ッ倒さま、横投りにこ  
そ覆せり、無残やな種竹、鐵巖、上野君は下に敷かれ、不折と我ど  
野中氏は、前の三人に重り合ふて、おちこちに立つか水禽水煙、馬は  
吃驚し馬子は仰天しつ、松明振下げ川底を覗ける具合は、繪に見る青  
砥藤綱が、滑川に青銅を捜すに似たりけり、呆れし六人は顔を見合せ  
て、互に無事を喜びつ、またその馬車に乘移りて、瀧川原村に着きた  
るは夜の八時頃なりし、殿には勝又君等の侍りて、豫め馬の用意をな  
しあれば、暫時佐藤與平治方に小憩、それより騎馬にて村を立出で、  
靄深き野道を行くに、松は眞綿に包める如く、小路の傍の夏草は、水  
氣に濕りて火尖に赤き輪を描ける、提灯の明りに照されて仄に青く、

駒の足搔は砂道の、ザクリノと音のする。それに調子を合せてや、  
蟲の音幽に聞ゆめり、この寂然たる光景に、一同感に堪えたるか、た  
いの一語を發する人無く、我も淋しいか閑古鳥とは今夜のやうな時を  
云ふかど、馬上ながらも笠の縁に手をかけて、殿は如何し給ひしと、  
前なる方を打見やれば、白き外套の闇にも知られて、馬上ゆたかに手  
綱搔いくりに進ませらる、斯くして二里あまりも歩ませたりと思ふ頃、  
道は次第に爪先上りに、小松の影のばら／＼見えつ、靄は漸う薄うな  
りて、雲の斷目に星見えたり、空には月の昇れるか、東は仄に明うな  
りて、夜はや／＼深うなりまさりぬ。駒返しは未だやと馬子に問へば、  
もう半里には近しと答ふ、小山にかゝれば松多く、靄は麓に搔消えて  
峯より上げ青空なり、林を迂りて月出でたり、蟲の音は云ひ合はした  
らんやうに鳴き出でし、小草の花も眞白に見えぬ、誰云ふとなく馬上

の同士の、月が富士がと齊しく叫べば、馬子も興にや入りたりけん、  
追分の節面白く、唄尻長く緩やかに、唄ひつれては林の中を出で入り  
つ、漸く駒返しに着きたるに、山に據りて建てたる二棟、荒れて屋上  
に草離々たる下、白衣の行者の二隊二隊が、怪しの布子にくるまりて  
芋蟲のやうに臥せるも見えき。後れたるをこゝにて待受け、また上り  
行くに、木立は一入深くなりて、寐鳥の音も物淋しく、月に背ける樹  
の影の、鶯の小道を埋めては、闇に啼く鳥の聲寂びたり、太郎坊に  
着けば、月を迎ふる富士の峯の、裾を小松にからませて、繪よりも美  
くしく立てりけり。夜は十二時を過ぎたるに、坊にては我等の一行を  
待受けて、氷の如き麥酒をすゝめ、渴きたる喉を湿さしめぬ、六人は  
こゝにて馬をすて、殿の前後に扈從し參らせ、一時に近き頃、一合目  
に至る、夏の夜の月に富士、双方共の丸裸に、帯に似たる雲も消えて

一望十里、凄きまで美しくしき裾野は、雜木全く絶えて、たゞ渺茫たる  
平沙の中を、白衣の我等の、月の光を全身に浴びて、金剛杖を打振り  
つゝ進めば、草といふ草は一株も無く、たゞこの御山の御夢想なりと  
いふなる、虎杖の花の白きと、薊の葉の青きとが、此處にも彼處にも  
見えつするのみ、二合目に至るに、小屋の客は多く眠りて扉を鎖しあ  
り、先づ主人を呼び起して茶を出さしめ、殿は馬をこゝにて捨てられ  
一同と共に進めり、漸うにして二合二夕に至り、小屋に小憩して、三  
合目に着き、憩ひて麓の方を見れば、白き雲の山の裾を埋めて、箱根  
も愛鷹も纔に黒き天窓を擡げしのみ、月はますます澄みに澄みて、二  
子、寶永の山を照せば、その走りも唱ふる傾斜の急なる處を、夜を冒  
して下山する導者の衣の白きが、残んの雪かと思はるゝばかりに、微  
に小なるものゝ、蠢々と動き下りて、忽ち雲の中に隠れ了んぬ、兎角

して夜は三時を過ぎたるべし、殘月曉風、白衣の我等の一人肌寒きを  
覺ゆる頃、四合目の小屋に着く、我と不折とはいつも一行より先なる  
こと三十分なれば、いざこの燭火の端に暖をとりつゝ相待たんと、  
寐轉ぶまゝに何時しか熟睡して、前後も知らずありし耳元に起き給へ  
日の出には間もあるまじといふは野中氏なり、見れば殿も一行も一團  
となりて、漸う白み行く東の空を打瞻り居給ふなり、實にや澄みたり  
し月は影のみを残して光を東の主に譲り、白き雲の日の出でなんとす  
る方は、茜色に異しく光りて、光明佛の繪に似たるもの、一團また一  
團、湧いてまた湧いて、一面に退き、齊しく佛足を禮拜して、王舍城  
に法輪を轉じたりと説きし、法華經序品の趣あり、折しも雲の斷間  
より、さし昇る如來眉間の白毫の光は、普く十方世界を照して、芙蓉  
の峯は紫に、雲は黄金の色と變じ、後光の海を射る状は、賞むるに辭も

無きまで美しく、我等はこゝにて携へたる行厨を開き、澁茶を嚙りな  
がら、飽くまで日の出の景を賞して、また五合六合と登り行くに、路  
は漸う峻しくなりて、其處の難所の黒岩を飛び越えて行く頃は、前な  
るも後なるも顔見合せて嘆息するのみ、七合目にて一同小睡を試み、  
暑さと疲れと空腹とを癒して後、悠々追らず、終日のたりくして、  
八合目にてまた休息、何うせ今夜は頂上泊りだ、緩々水でも呑んで行  
かうと、氷よりも冷たき水を惜氣も無く煽りつけて、ヨイトまかせと立  
つか弓、矢竹心の名々も、金剛杖を力草、くさも人目も枯れ果てし、  
焼山岩根踏みめめて、登る勇氣も八九丁、ドダリバタリと伏し轉びて、  
溜息嘆息のツキ合ひは、これも關東の風習なるべし、また精々と登り  
行く、こゝは難所の大だるみ、路は一入峻しくなりて、空には烈日人  
の膏を絞る、山は宛がら鍼の山、互の顔色血死して、唇は紫に變り、



肌の色は黄になりて、現世からなる餓鬼修羅道、苦しい時は自ら口より出づる唱へ言、六根……清浄と、續けては難儀さうなる息遣ひ、この時五慾解脱して、無念無想となるも不思議、いよく胸つき八丁と来ては、先づ巔を仰ぎ見て、何人も肚胸をつくなるべし、休めば涼しき山風に汗は自然に拭はるれど、進めば惱む絶壁に、名も相應な屏風岩あり、それを目的に攀ち登れば、彼方に高きが劍が峰、一太刀浴せかけられたかど、思はるゝまで冷たき風の、着座の袖を吹きまくる、下をくわいて飛ぶ鳥あり、彼は何よと指せば、強力は振向きて、この山のお鉢に栖む燕なりと答ふ、我もなりたや彼の鳥に、ハテ羽化するの術もがなど、麓の兩袖を摩で、見れど、その風俗は踊にある吉原雀に似た形なれど、飛ばれぬ身こそ怨みなれ。斯くして漸く絶頂に登り着きたり、一行はいづくにあると見渡せば、遙か彼方の下にあり

我と不折は先づ銀明水に喉を濕ほして、噴火の口を拜し了り、棧子を傳ふて駒ヶ嶽に出で、淺間神社に詣で、後、麓の方を見下せば、寔や直立一萬二千八百尺、下界遙に雲遠く、彼水彼山、日本全圖を正の物で見ると心地せり、その氣宇の濶大なること、天下これより優るものなく、その風光の明媚なること、天下またこれより美きはなかるべし、この快ありてこそ、前の煩悶苦痛も償ふに價あれ、兎角見ぬ人に絶勝を吹聴しても、語るに辭はあらざるべし、芙蓉八朶開くと云ふも、この坑口の八の峰、古人の例を借用して、これを扇に比ぶる時は、骨は八ツの峯よりなりて、噴火の口に要あり、地紙は末廣の麓より、五合六合を境にして、それから上は動き無き、大盤石の岩骨なる、マツタ不斷の涼風は、峯より風す夏知らず、五風十雨の本元も、雲に自由を任せ置いて、東海の鎮守様、嗚呼偉なる哉、斯くてこそ富士は其儘の

蓬萊山、三保は不斷の門松と、君が代をお祝ひ申すと、賞めるも先づ大抵にして置きつ、次に名物の甘酒を啜り、岩室に假寐して、一行の到るを待ちたりけるに、暫くして後れたるもの皆來り、殊には殿の元氣雄に、少しも疲勞の見えさせられぬに、先着の我等も、後着の人々も、呆れ申して恐縮せるも可笑かりき、こゝにて紀念の寫眞を撮らんと、一同を銀明水の後邊、坑口の前に立たしめ、首尾克撮影を了れる後、其處此處と駈けめぐりて、頗る材囊を肥せる程に、日もやゝ暮に近づきたり、駒ヶ嶽にて夕陽を觀望して、晚餐の卓に就き、こゝに始めて、一瓶の山酒と、携ふる所の麥酒とを酌み、淺間社の神官が特別なる優遇によりて、逸早く寢に就きたるに、何時しか黒き雲の麓より湧き出で、山下は夕立の雨のトしきりかゝれりと思しく、殷々たる雷鳴も、燐々たる稻妻の光も、たい山の腰を繞りて、響き且つ閃く

のみ、折節は天風の聲と雷の響と、相和して、この石室の微塵に碎け散らんかと疑はるれば、電光發矢、闇を破つて、前なる崢嶸を異彩の宇宙に見るの快は、そも下界の人の曾て知らぬ光景なるべし。一睡して目は覺めぬ、カンテラの燈光に時計を檢すれば、未だ一時に近く、戸隙より大空を見るに、雲は絶え、雷も治まりしか、半輪の月は昇りてあり、目覺めては容易く寢られぬまゝ、戸外に出で、駒ヶ嶽の頂上を見れば、月光に背ける岩の黒く峙ちて、猛虎一聲何やら高しと云ひけん、詩の意も思ひやられ、山下を恐るゝ眺むれば、天地一白、雲は咫尺の間に重疊して、淡きもの、黒きもの、鬼の如きもの、夜叉の如きもの、天魔の如きものなど、簇々と湧き出で、始めは巖角を掠め、飛んでは澄める月を蔽はんばかり、翼あつて翹けるかと思ふまで、怪しく動く有様の凄きこと、言語に絶せり、我は暫らくしてまた

寝に就きたりしに、頓て二時過ぎなるべし、寒威俄に迫り來りて、呼吸苦痛を覺え、厚き胴着を襲ねて綿厚き夜着にくるまりたる脚の、堪え難きまで冷ゆるを感じたりしが、終日終夜の疲勞に我知らず、また一睡して、翌朝夙に起き出で、一同成就嶽の賽の河原といふ處にて、旭日の東天に躍るを見、徐に結束して、下山の途に就きぬ、昨日の苦しきも今日は人の身、我等は一夜の山栖に、全く凡骨仙化して、足も軽く、又小屋に憩ひては、登山の導者を慰むるも、自然から出る人情なるべし、七合目にて一行一團となり、これより走り草鞋とて仁王尊の穿きさうなる大なるものを足につけ、傾斜の尤も峻しといふなる、寶永山の砂走りをも、一目散に飛び下りて、ホンの煙草一喫の間に、また三合目に下り、こゝからまたも眞ツ下りの一直線ゆゑ、我は二合目

一合目を通り越して、また落ちかゝる霧の雨を事ともせず、太郎坊まで息をもつかず歸り着きて、暫らくこゝに待合はする中に、一同揃ふて山を下り來りぬ。先づ草鞋をお解きなされて、緩々と御休息をと云ふなる、主人が款待を喜びて、晝餐を濟まし、勝又村長が豫め備へ置ける乗鞍に跨り、一同騎馬にてこゝを立出で、昨夜は繪のやうなりし馬返しの荒屋を過ぎ、靄の中に一人づゝ隠れ行く奇なる趣を、後より賞しつ、我は少し後れて行けば、瀧川原村より一里あまり此方から天晴れ靄は消えたり、裾野は小松七草の、目も青々と涼しくて、産の袂を吹く風に、送り迎ふる鈴の音は、何んとも云はれぬ心地よさに馬上に高らかに詩を吟じて、道行く人を驚かせしも一興なりき、村に入りて例の茶屋に憩ひ、不折は寫生し、我は寫真し、殿は御機嫌も麗はしく、笠に夕陽を荷ひ行く、道は野路の幾曲り、杜に青田に蕪屋根に

立つは煙よ群鳥よ、渠は時に歸る身の、我も東に歸り旅、無事御殿場に  
に着きにけり、こゝにて下界の湯にも浴り、勞を慰する酔も買ふて、  
勝又君等に別れ、其夜の十一時目出度東京に歸りぬ。于時明治卅一年  
八月八日也と、紀念の金剛杖に銘を打つと云爾。

七湯めぐり

天翔ける羽衣、地を行く破れ草鞋も、重寶に二ツはあらず、彼は天人  
の下界を知らでたい高上りし、此は凡骨の上見ぬ鳥の、合羽の翼をひ  
ろげて、旅から旅と飛びめぐる氣樂男あり、戀しらぬ頃の、連は邪魔  
で無くて、厭がる友を誘ひ出しては、塔の澤に一夜の快夢を貪り、獨  
り抜け参りの箱根権現に参籠なさんものと、飄然として一の湯を立出

でぬ、さて七湯の賑はひは、言語に述べ難く、それをしる七福神に譬  
ふれば、湯元は大黒、塔の澤は惠比須、宮の下は辨財天、堂々島は壽  
老人、底倉は布袋、木賀は福祿壽、さて頂上の蘆の湯は毘沙門、天に  
も近かるべし、小湧谷は番外の寶船、目出度いまでの繁昌も、横を向  
いて元箱根に下らんとす、路蘆の湯を出づれば、山には薄の波そよぎ  
て人は枯草の中を行く、曾我兄弟の卵塔を眺め、地獄山の下にかゝれ  
ば、血の池あり、六道の地藏尊を、岩山に彫りつけたり、秋ならば如  
何に淋しかるべき、山を下れば蘆の湖あり、水の面に影を蘸する離宮  
の眺望は、瑞西の湖畔よりも美しく、道は古松の林に入りて、一方  
は開け、他の一方は竹藪に圍まれたり、箱根権現の社前に至れば、富  
士の峯は影を倒に湖に浸して、漁舟の山に上る如きもあり、水に  
突き出でたる洲崎には、割烹を業とする家の、蘆間に見え隠れして、

その景の面白き、言語にも述べ難し、箱根の古驛は、茅屋根の殿造り本陣などいふ名の今に残りあれど、驛路の鈴の音も聞こえねば、参勤交代の諸侯も見えず、たゞ毛の赤い、眼の玉の青い雌雄の異人の、手を組み合はして番ひ離れぬ鴛鴦を真似つゝ、湖畔を逍遙するを見たりき。村の出口に駒ヶ嶽神社あり、こゝに三島より米をつけ來し小荷駄馬の、空しく歸るに遭ふて、それにうち乗り、的も無く、向ふ坂にかゝる、そこより小徑に入りたるにや、薄尾花の茂り合ひて、道のそことも分かね中を、馬子は手綱を緩めつゝ、追分の節面白う唄ひつれ、悠々と行く夏の旅、穗に出し薄の風に亂れて、一ト山二山大波小波の寄するが如く、一様に靡く尾花の中を、笠流れ去るやうなる景の趣ある、我は馬の上に横向に騎りて、揺られつ揉まれつ、一上一下、虚々實々の境に入る今は、實にこれ馬に寝て殘夢月遠しといへる芭蕉の風

流味あり、あれ彼處に茶の煙が見ゆるといへば、馬子のいふ、あれは上長坂の茶屋なりとて、急ぎてその茶屋の前に出づ、馬より下りて床几に憩ひ、麓の方を見下す、富士は素肌の白粉氣も無く、その下を廻り双六の東海道、三保の松原はあれか、田子の浦は夢の如く遙かに、遠州の御前崎は眠るやうに微かなり、沼津の宿の此方は、三島の遊女町よ、一ツ振つて、一ト廻り休みとあるは、實に面白の賽の目の、届く限りと後邊を見れば、豆州の蛭が小島は、岫の雲をへだて、見ゆ、江川が屋敷は、何處ならむなど、愚にもつかぬ事を考へながら、さて遊意そいろに動いて止まず、よし、遣る所までは行つて見むと、主上の東上遊ばされし砌、こゝに御小休ありし處とて、方二間ばかりの地に、注連張りて不淨を避けあるに三拜し、また馬に乗りて、小徑に入り、山中、笹原、こわめし坂、三ツ屋、一ノ山、塚原、五本松、山上

かはらけ村といふを過ぎて、山は盡きたり、小流に板橋あり、これを境にして、三島領に入り、入口にて富士の峯鮮かに見ゆるを賞しつ行く、赤坂、笛ヶ嶽、ばらけ平などいふ名の、耳に残りあれど、その地は何處なりしや、新町橋を渡りて、三島神社あり、官幣大社なりといふ、三島の町は千五百ばかりの家ありて、妓樓その間に交はり、寂びたる町並なり、時は日暮に近し、急ぎて馬車にうち乗り、沼津へと走らす、途中に黄瀬川あり、橋を越せば、富士は愛鷹山に隠れて、笑顔を袖につゝむも嬉しく、山王前に至りて、夜に入りぬ、やがて沼津に着く、停車場前の星屋といへるに宿かるに、白いもの塗れる下女多き、未だに飯盛の名残を留めたるも凄し、その夜地震あり、我は裸で飛び出したれど、大事には至らずして止みたるに、家内の者の笑ふも面目無く、神田の彌次郎兵衛は一入あれど、八町堀の喜多八無きを如

何せむ、こゝ茶番にもならずして、合宿の男の顔を皺めるに、興は盡きたり、夜明けには間もあるまじと、二階の欄下に凭れば、半月山の端に落ちかゝりて、遠山の松の樹ばかりを見せ、麓は闇雲の中よりして、汽笛一聲鳴り響きたり、間もなく一番の汽車出づ、我はそれに打ち乗りて、浮島ヶ原を曉風残月の中に眺め、すゝ河に至りて、旭日は山の端を出でぬ、富士川の鐵橋を渡りて、岩淵に着くに、川にある舟の形の異なるも可笑しく、蒲原には由井ヶ濱あり、正雪が生國にて、其子孫今も紺屋を渡世となして、跡を絶たずと乗合の人はいふ、濱には鹽汲む海女あり、網を干す漁夫あり、伊豆の山は遠く雲際に青く、薩埵峠は眼前に横はれり、興津は名ある所なれど下りず、清見寺を車窓より眺め、漸うにして江尻に着きぬ、

三保の松原

急ぎ汽車を下りて、本波止場に行き、直に三保の松原に渡らむとす、舟は乗合なれば、二時餘も間のあるべしといふに、さらばとて五錢を奮發して、舟一艘を仕立つ、威勢堂々、十三町の海路を渡りて、天女が住むといふなる三保の松原に着きぬ、村に入れば、漁夫三々伍々、貝売のつきある柴を垣根として、家は茅葺の屋根の、檐に夏草の茂るも嬉しく、松の林を便り、一帯白沙の路を辿りて、三保明神の社に入れば、入口に石の鳥居あり、一路松風の盡くる所に、拜殿と本堂と建たり、神樂堂あり、神馬堂あり、木造の白馬を安置す、前後に石の玉垣をめぐらして、松をわしらひたり、社前の鳥居を出で、また松の林を一文字に、濱手の方に進めば、潮風四季を分かつたず、松に颯々の

音さして、白沙一路、露の零ること多し、直に繪の如き一丘を越え、下りて羽衣松の畔に至れば、二基の古碑建てり、苔を掃つて、その字を讀めば、羽衣松碑の四字を獲たりき、おう、松はこれか、枝は古りて、千古の遺風を傳へ、根は蟠屈して、龍もこれを居眠の枕にやせむ、我は天女にはあらざれど、暫時は通を失ひて、たゞ茫然と風景に見惚るゝ多時、松は濱風に行儀を亂して、丘へ丘へと靡き、平沙は雨に波に塵を洗はして、日に照るところ、水晶よりも美しく、丘には青き草あり、さて彩色の配合には、碧の海、白き波の、岸を拍ては高く低く、鞞の聲を送り、磯の千鳥は、立つ浪に飛び交はして、白帆かけたる舟の四邊をめぐるなど、まこと天人も下界戀しくなりさうな眺望なり、况んや富士は湯上りの影を落して、腰より下の足高や、裾はほかしの浪模様、一天雲も無き今日の姿はまことに天女の舞樂、芭蕉が所謂「山

上の雲より出す雪の不盡とては、目前にある碑の句なれど、景に遭つては脆きが當然、其拙其陋一句も無い所が證據なり。松の間のこぼれ松葉、まツた松の笠などを拾はんとて、一人の童子現はれたり、我は驚きて地に跪き、神仙何處より來給ふと問ふ、童子の答へに、已アこの村の者でがんとあるに、つらくその容貌を見奉れば、日にやけたれど眉昂れり、脊はゾンゾクなれど頬は豊かなり、さりながら神仙にしては附物なる牛が居ず、手に一竿の横笛だも持給はぬは、何んたる疏忽の童子ぞや、荷ひ給ふは組竹の大籠、右手に熊手を提げたるは、高砂の主の子分なるべし、何は兎もあれ、先づ羽衣松の由來なと問ふたれど、知らずと云つて退けて頭を振る、さらばこの島の戸數はと糾せば、三保村が三百、みやかたが六十戸、社の前の松林は八丁ありと答ふ、願ふに神仙化して、村役場の給仕にでもなり損ねたるな

らむ、かゝる談話に興盡きたれば、元のつかまといふ渡場に立戻り、また仕立舟を雇ひ、來し路は面白からずと、わざと海上一里の清水港まで、六錢にて渡さす、船頭は年老ひたる男なり、櫓を押す毎に念佛申して、鼻聲なるも面白く、素性を問へば身の上話に時は移れり。

### 清水の龍華寺

清水の町より、村松といふ小村を過ぎ、鐵舟寺に入るに、二王門、鐘樓などありて、正面に觀世音の堂もあり、寂びて俗氣無し、なほ行きて龍華寺に入り、日本一といふなる蘇鐵を見る、法華堂あり、妙見堂あり、山上の祠に七面大明神を安置す、寺中の眺望一入美しく、何人の擇びしにや、こゝに富士十二景の摺本あり、曰く富士泰嶽、三穗長



洲、田浦古風、清見舊關、興津釣舟、清水晴嵐、鑿山返照、久能晚鐘、村松落雁、矢部夜雨、南方曉色、東海日華と、名を美しく列ねし如く、その景色も壯にして、琵琶湖の姿に優るも劣らじ、我はたゞ景に失神して、寺の椽側に腰うちかけつ、その眺望に見惚るゝ多時、また元の道に立戻り、清水の町に入りて、湊橋を渡りつ、江尻の停車場に着きぬ折しも臨時汽車出でんとするに會ひ、國府津まで切符買はんとするに僅に五厘足りぬまゝ、止むなく松田まで買ひて、急ぎ乗る、草臥れたるにや、車中大方は眠り轉けて、漸う山北にて目を覺しぬ、松田に至りて汽車を下り、三里の道を小田原へと急ぐに、時は午後四時に近かるべし、河登川を漕ぎて越え、金田、西大井、白水の諸村を過ぎて、白水の渡に至れば、日は暮れたり、渡し舟は將に家路に着かんとす、忙て、呼び止め、頼むやうにしてそれに乗り移りつ、二川村に出でた

る時は、躰疲れ、腹は餓えて、倒れんとするもの數回なりし、加ふるに草鞋は破れて、神輿の脇につく、矢大臣の冠の如く廣がりたれど、財布には僅に一錢と、文久一つを餘すのみゆゑ、いづれの飯屋にも入り難く、今日は晝餐をもなさずして、汽車に揺られ、長途を駈けし事なれば、脚は木の如くなりたるに、如何にして塔の澤まで行くべきぞ進退維れ谷まりて、出るは溜息のみなりき、頓て井細田に着く、夏の夜の事として、家並の村なれば、いづれも夜店張りて、名物の饅頭を賣るが多し、我は三作屋といふに入り、財囊の底をはたきて、一錢と文久一ツとを出し、饅頭五ツを買ひ、溢茶を一ト土瓶振舞はれて、漸う蘇生の思ひをなしつ、勇を鼓して小田原に入り、我は神送りとして、若い者が疫癘神を追ふ太鼓の音に送られて、その村を立出で、風祭村に入り、夜更けて、寶泉寺の門を叩きたるは、曩の日に知れる友の紹介

をもて、住持と初めて懇意になりたる縁を便りてなりき、逢ふて絆の由緒を語れば、我の無謀を誠めながらも、懇ろに待遇して、時しも未だ水とならぬまでの風呂の湯のあるに浴みし、夕の膳を濟すや否、身は大の字形に熟睡の夢圓に、その翌日の十二時、しかも塔の澤に残れる廣業の、我の身を心配して、忙て、來るに逢ふまでは、何んにも知らず眠りつゝけたるも心地よかりし、斯くて廣業は住持の恩に酬ひんとて、即座に羅漢の畫などをしたゝめて贈り、我の漸う人心地つきたるをいざと引き立て、共にこの寺を辭して、小田原に出で、片岡といふ旅館に、無事の祝盃を舉げぬ、酒間春畝公の南湖所見の詩に、虫語鐘聲不忍聽、蕭條遺跡淚空零、白雲半露觀音寺、紅葉深藏苦樂亭と題せる、承座の額を見ながら、献酬數番、直に東京に歸りたるは、今よりは、さうよ、未だ侯の滄浪閣の小田原に在る頃とて、廿三年九月

の事なりし、また新玉の初春に、富士の山のお話、附けては三保の松風、箱根土産の竹細工の卓に、盆梅も咲いて、何もめでたし、く

京 遊 記

ことしは如何なる縁ありてや、京に再び觀光の客となりて、雪に、月に、花に、繪のやうなる山と水とを、普く見廻りたる事の嬉しきよ、如月の山は雪に眠りて、人の意の穩かなるところより、彌生の今日此頃は、嵯峨御室の花に、眼も覺むる心地ぞせらる、野に出づれば、堇の紫なる、蒲公英の黄なる、蓮華草の薄紫なる、名ある軍人の胸に懸けたる、勳章の種々なるにも優りて美しく、人は晴傘かざし、割子提げて、田の畔を行くさまの趣ある、京は實に花の本場所なり

予の京に行きたるは、四月十八日の夜なり、翌れば空もいとよく晴れ  
亘りて、比叡の山も、雲の衣を脱ぎ捨て、圓山は輝かに見られ、鴨  
川の柳も煙らむばかりに芽出したり。祇園の櫻は花の色已に褪せて、  
嵐山も亦盛は過ぎぬ、蝶もいづれを晴にするにや、日暮れて、月はあ  
らず、食果て、麩屋町の宿を出で、祇園の社に詣でしに、熱鬧は花  
と共に寂れて、木の間に篝火の紅きと、霞簀張の茶屋に人の無き  
とが、物淋しくも、電燈の光明に輝きぬ。

二十日の朝、土方宮内大臣を訪ひ、それより轉じて、三本木に志賀矧  
川先生を訪へり、座に愛宕郡岩倉村の人田中平義君あり、君の家は村  
内の舊族なり、矢瀬大原の地、君が指願の處にして、近き途上を行く  
に、一往一來、君に一楫せざるもの、殆んど稀なるが如し、矧川君と  
田中君と予と、相伴ふて下加茂に遊びぬ、出町の橋に至れば、柴を頭

に戴けるもの、褸端折れるもの、伍をなして來るに遇ひぬ、葵橋夢  
の如く、比叡の山は雲にかくれたり、出町を出づれば、雨はらくくと  
降るに三人は急ぎて、加茂の社に駆け行く、木立古りて、丹碧寂びた  
り、矧川君のいふ、人もなほ神社佛閣の如きか、大極殿の丹碧と、加  
茂社の塗と物は同じくして、しかも彼は俗なるが如く、これは神寂び  
たるが如し、畢竟人間も古色にあり、吾黨の成業未だしくと笑ふに  
予も爾か思ふなり、進んで社前に憩ふ、櫻の一木二木、未だ花の散り  
残りて、森々たる木立の中に交ゆ、萬緑の叢中に紅を一つ點したる如  
く、優しき眺望なり、木の下に幼き男女の群れ遊べるあり、手鞠唄  
の一す百ついた、と隣に鞠を譲れるも面白く、暫時は雨を避けて、祠  
前に烏帽子着る人を眞似たりしも、雲晴れて、雨も名残無くなりたれ  
ば、相摸屋に上りて憩ふ、欄干の外は川なり、春の眺望はよし、三人

小酌して、また山端に向ふ、野に出づれば、菜の花は今を盛なり、青  
麥の色の美しくきは、午睡の夢を覺さすべく、山は比叡も鞍馬もいと  
よく晴れて、裾の村々の、竹に交るも妙なり、村に沿ふて流るゝ小川  
は、日に照りて、水晶を轉ばすにや、高野川に橋あり、山村分竹一  
路通ずと、古人の口吟みは、よくその實境を穿ちたり、修學院村に出  
づ、牛車の綱を緩めて、煙草長閑に燻らし行く村男と、乳香見を頭に  
載せ行く大原女の往き來ふ、流石に洛北の眺望と、嬉しうなりて、平  
八の家に入る、この家高野川に臨み、小嵐山に據りて、景色頗るよ  
し、座敷も一棟二棟、木の間、岩端などに立交りて、一入の風趣あれ  
ば、料理持運ぶ女の、盲目縞の衣に、白き襪し、四巾の前垂かけて、  
手拭を姉さん冠にしたるなど、住吉が繪巻物に残れる洛中洛外の圖を  
目前見る心地す、淺酌一番、庭下駄穿きて、川の畔に出づ、水は堰と

なりて、白きこと雪の如く、山の根には櫻咲きて、茅屋根の檐に、花  
の白う散れるも妙なるに、鶏の落餌を齧りては、折節吹雪と散る中に  
入る様の趣ある、京ならでは無き風景なり、地も矢瀬大原に隣すれば、  
鶏犬晝閑にして、塵の世を隔つるの想ありき。肴はと問へば、モロニ、  
ヒガイ、アマゴなどありといふ、名は初めてなれど、箸を着くるに味  
美し、何處にて捕れりやと問へば、多くはこの川筋にてなりと答ふ、  
快く飲み、快く食ひ、鳩煎餅を土産にして、こゝを出で、詩仙堂先  
生の古跡を過ぎ、また出町に出で、別れて予は家に歸る。この日島原  
に太夫の道中あり、壬生寺に狂言初まれりと噂す、予は厭くまでも觀  
光の材を得んとて、先づ壬生に行く、未だなりといふ、次に島原に行  
く、時遅れて大門は鎖れたり、予に樊噲板額の勇無ければ、止む無く  
小川を亘り、垣を踰えて裏手より入るに、人多くして見るべからず、

乃ち贅六を排して、名だゝる角屋の表に立つ、時に花車來る、率くも  
の雛妓なるべし、盛裝、次に禿二人來る、高き黒塗の木履を穿ち、紅  
き衣を着けたり、肩より背に太夫の名を記せる、目票を懸け、頭には  
花簪をさしぬ、次は太夫なり、兵庫に結立の髪に鼈甲の笄を交叉  
に挿し、顔は厚化粧しつ、衣は白無垢を襲ねて、帯を前に結びたり、  
素足に黒の木履を穿ち、八文字踏んで、徐々と歩す、襦は金糸銀糸に  
縫箔せる華奢模様、牡丹に狂ふ獅子あり、瀧に踊る鯉あり、その美麗  
眼を眩ます、大傘にはその紋を染めぬき、柄は長くして、男の背後  
より翳せり、男は蒔黄の衣を着け、茶木綿の帯を締めぬ、斯くの如き  
もの一隊又一隊、道中果て、人争つて廓内を出づ、予も本妙寺の畔ま  
で歩みつ、漸く腕車を索めて乗る、その雜沓云はん方無し、  
翌日山縣侯の別荘に抵る、南禪寺畔にあり、邸を無隣庵といふ、庭に

は三層の瀧あり、亭々たる松あり、所謂「幽邃と豪壯」とを兼ね備へ  
たる園林、十年の後大に見るべきものあるべし、歸路瓢亭に憩ふ、割  
烹頗る妙なり、茶味ある所尤も面白し、  
その明くる日、四條の人市原平兵衛氏父子と共に、圓山應舉の墓に詣  
づ、氏はその寺の門前に「應舉の墓此寺にあり」との石碑を建て、  
諸人參詣の便に供せらる、得易からざるの功德なり、この夜氏と共に  
祇園清々に飲む、閑雅市隱の如し、廿三日岡倉天心先生の玉章、廣業、  
劍持諸先生と共に、木曾行をなすに會し、予もその群に投ず、裝成る  
の後、矧川先生と別杯を酌む、先生興到り、筆を揮て、詩を題す、座  
に田中城北君と、上田萬次郎君とあり、其詩に曰く、  
丹後紗衫染旅塵、鐵鉗山外度隣响、勸君更盡白桑酒、西出但州一  
逢故人、

空傳丹國産ニ靈媛一、寂寞香泥跡不存、十里春山船井郡、落花何處吊  
貞魂一

丹波、丹後は先生の遊説し來れるの地、靈媛は握玖媛をいへるなり、  
媛は地頭の戀するに遇ふも、堅く貞節を持して、刃に伏したるが、星  
霜千餘年、今その跡だも無く、澆季の世、今に於て握玖媛ありや、午  
後二時瀛車に搭じて大垣に行き、また岐阜に抵りて、天心先生の一行  
と會して、其夜明ければ身は双鞋一笠の人となりぬ。

### 木曾五鶏行

九郎判官も木曾冠者も、京の水に漬かれれば、みな弱蟲になつて、通を  
氣取り、粹を利かし、在所からの手織木綿の布子を脱いで、柄に無い

お絹布ぐるみ、襟白粉に齒を染めて、細眉の三日月形、柴折戸の蔭に  
横笛を吹き鳴らして、色男がる揚句の果は、堀川の館を夜遁して、後  
の世のお俊傳兵衛と一緒に浮名を謳はれ、これはまた松殿の姫君と、  
譯あつての都落、敗軍の中に項羽を擬するも、賞めた話にあらず、英  
雄元來尻切り蜻蛉の人多きも、畢竟京の水に鴈を腐らすによつてな  
り、君見ずや、柳の馬場と聞けば、蹴鞠もしたくなり、嗟蛾や御室とあ  
れば、江戸ッ兒の常盤津も唸りたくなるにあらずや、お化粧の京の水、  
これ鴨川の清流なり、白粉下の花筏、嵐山の裾に春を浮べて、御見物  
衆の氣を遠くさするも、若い者には毒食へば皿までと、財布の底を投  
かするが故に、お土産充分買ふもの少く、故に出店の三井も大丸も  
流行る譯なり、京は實に金錢の有ツたけ、いざ無くならぬ間にと、四  
月二十三日、大方の花も、チリテットンと木屋町の三味の音を聞き棄

てにして、午後二時の汽車にと觸出す、殿方俄の御出立に、宿の柵屋も周章狼狽、荷を造る、酒をすゝむる、勘定をする、飯も食べるといふ騒ぎに「怪躰なお方はんや」を、女中に五つ六つ呼び續けに怒鳴られて、漸く埒は明けたれど、落着く先は何處と問はれて、いざ僕もお供いたしませうと、急に木曾に行くことに決定し、夫ならば直ぐにせよ、今行かば尙ほ一ト汽車早かるべし、善光寺道は急ぐとあるとて、天心、玉章、宗山、劍波の四君子は、蘭竹梅松それづくに、腕車を急がし出で行きたり。アトには一人と獨吟の躰にて、取残したる要事を片付け、矧川先生と別杯を酌みて、座に樓鳳、城北、上田三君に暇を告げ、都を跡に旅の空、大垣へこそ急ぎ行く、七條には金時の主人見送られたり、醉人に金時、僕が赤くて、向ふが不酔も可笑かりし、さて汽車に乗る、大垣までは一人旅ゆへ、退屈紛れの新聞紙も讀

み盡して、欠伸に過ぐる馬場の驛、湖水遠くして、比良山微かなり。堅田は何處ぞ、田の堅からは、木曾殿の馬も泥に嵌りはせざりしものを、榮華の夢も炊げる粟津、最期の膳きは九郎も爾なり、判官館の古趾を尋ねて、奥州の平泉に落花を踏みつゝ、古墳の青苔を撫でたりしは、去年の四月の末なりき、今年も恰度その月その頃、木曾冠者の趾を尋ねて、遠く信濃路に節を曳くことは、これも何かの因縁ならむと、愚にもつかぬ事を考へながら、行き行きて大垣に着く、こゝには四人の待ち居ればと、その家を名指して訪へば、残念なされた、今の先刻岐阜の玉井屋へ出立れましたとの事に、去らばアノ汽車へと、停車場へ駆け付くる、此の時遅く彼時疾く乗後れたり、次の汽車には五時間餘もありといふに、呆れたれども詮術無きまゝ、茶屋に憩ひて、名物の肴は何ぞと問ふに、鯉、鮒生きたのがあるとの答に、さらばそれを

調理せよ、鯉はアラヒに鮒は田樂こそよからめと命じ置き、荷を帳場に預け、腕車雇ふて、その町を見物しぬ、流石に水に事欠かぬ處とて、川幾筋もあり、本城の天守は今に存れど、夜黒ければ見ず、至りて寂びたる町並なり、願ふに水火の餘病未だ癒えぬ故なるべし、雜鬧場を過ぎて、また川あり、此處より四日市下りの舟出づと教ゆ、岸の柳蔭に芝居小屋あり、擔下には役者の名を記せる板札を懸けつらぬ、そが前に火を燭したり、木戸札賣る男、川風に聲を引絞りて、觀るを勸むるまゝ、車夫と二人して、平土間に入りぬ、印半纏着たる男火鋒持て來て、場代四十錢出せといふ、安からず思へども、郷に従ふ心して渡し遣れば、車夫氣の毒顔して、案内の甲斐無きを打詫ふるも質實なり、外題は兒雷也 譚にして、役者は名古屋男なりといふ、筋には間々猥褻なる節ありて、公然に男女相抱くの状さへ怪からず覺ゆるに、その

臺辭に女のいふ、「この動氣のすることば」を、男は「それは私がかゝした汗ぢやはい」と受けるなど、言語道斷なり、見物の風俗を如何と見るに、機敷はたい一間塞がれるのみ、他は多く土間なり、女は總躰に容目美しく、男は言語嬌たり、女は花に露を添えんとてか、多くは薄化粧を施し、黒の襟つけたる半纏を着けぬ、黒人かと問へば、娘なりと答ふ、さらば僕に隣するは、藝妓なるべしと糺せば、さなり、名古屋妓と低語す、幕の間には藝妓他の場を侵して、頻りに客を誘ふれば、門前の小僧群がり來て、土間に角力するなど、鄙びたるに興あり、幕明けども、小僧喧嘩歇めず、伎を演ずる役者の、舞臺の上より「この小僧ども擾み出せ」と聲高に叱るなど、藝に實の入らぬを證すべし、僕は中入より芝居小屋を退き、茶屋に歸りて、微醉を沽ひ、東行の汽車を待つに夜は更けたり、風は寒し、待合室に入りて、今や今や



と足を爪立て、も、汽車は来ず、欠伸交りに待つ中に十二時は過ぎたり、自然躰紛れに卓上の古新聞紙を読み出せば、彼方も僕と憾みを齊しくする人か、退屈さうに欠伸して、貴君は何方までと問はる、岐阜で下りますが、玉井屋まで幾丁程ぞといへば、我もその玉井屋へ行くのなり、貴君は東京の誰様ぞ、我の名はど名刺を出されて、見れば折節その人の技術は、諸所の展覽會杯に見たる、土地の書家坂井藍涯君なり、君に逢つては地獄で佛、夜が明けやうが、鶏が啼かうがと度胸を据え、間も無く着きし汽車に一ト飛び、途中は土地の名所話に、寝むい顔もせずして、岐阜に着き、玉井屋の夜の門を叩けるは、雲も水も眠りこけて、音さへ出さぬ丑の刻頃なりき。

やア来たか、難儀したらうと、夜具を掻退けて飛び起きたるは、市原疏香君なり、君は京都四條の市人、その父平兵衛君は玉章翁と同門

の因縁よりして、前の一行をこの處まで送り來られたるなり、疏香君のいふ、我知らずこの處まで送り來りしも、名残は明日も盡きざるべし、人々の目覚めぬこそ、袂を振切るに便好ければ、これより夜を込めて京に歸らむ、皆の衆が起出でたら、君から宜しく頼みますと僕に乗つて來し腕車に飛乗り、さらばの聲も雲霞、送つて跡はうつ、なく、夢の間も無き春の夜の、明けしも知らず眠り轉けたり。

鶏が啼いた、夜が明けたと、呼び覺されて、顔を洗へば、朝飯の膳には珍味あり、六人車座になりて、給仕する下女を轄に見立、それ飯、それ茶と急がし立て、その家を立出づ、町外れにて藍涯君に別れ、加納の城趾を右に見て、急かす迫らず悠々たる春の旅、天よく晴れて、

山輝かなり。村家の屋根には鶏の居て、五人の行を送るなど、實に治まれる君が代は、諫鼓若蒸して、鶏驚かず、犬さへ巡査を吠えぬまで

に開化したりとて、一同袖手の足軽く、間も無く新加納に着きぬ。時に天心君のいふ、今朝の啓行に鶏の啼いたのが目出度い、啓行も音で讀めば啓行、鶏口となるも牛後となるなの例へもあれば、今度の旅を五鶏行と名づけては何うか、鳥の啼く東男、兎角鶏には御親類筋なればとて、その身は先づ錦鶏と呼び、玉章君は烏骨鶏、宗山君は野鶏、劍池君は髯むしやなれば軍鶏と名乗を揚げ、僕は夜陰に戸を叩きたる例もあればとて、水鶏とこそは命名したり。さる程にこの五人、如何なる事をかなす、そは次を讀め。

### 太田の渡

野鶏子と僕とは、岐阜にて盲目縞の脚絆を買ひたれば、毛脛だけは隠

れたれど、木曾の驛路六十九次を、股にかけて、テクラうといふ豪の者が、黒の山高朝も似合しからず、雅にして何か徳用向の笠もがなと、新加納の町に入りて、荒物屋の店を窺へば、名物の檜木笠あり、これさくくと名々一ツづゝを手にし、古手拭を引裂きて、紐に捻りて結びつけ、阿彌陀に被りて、この町を出でぬ、手力雄の社を通り過ぐれば、村あり、松原あり、稻葉山は次第に遠くなりて、前には廣き野の横はれり、並木の松を分けて、一路砥の如く平かなれば、落葉拾ふ童の、大熊手引ツ擔ぎ、鼻唄うたひながら行き過ぐるを呼び止め、鵜沼まで幾里あるかと問へば、未だ二里に遠しといふ、時は十時を過ぎたり、物欲しき頃なれば、飯賣る家も無きやと問ひ返すに、この原が三里あり、茶を飲む店もあるまじとて、松原の小徑を横に外れ、松の露やら涙やらと、土地訛の鈍聲振絞つて唄ひつ、姿は木の下蔭に隠れ

て見えぬ、五人は三里の廣野と聞いて、一たびは吃驚したれど、この天然の松の廂あり、枝吹く風も心地快ければ、一里や二里はお茶の粉なり、勇ましく駈け出すべしと、軍鶏子は八字髻を捻りながら、大股に歩けば、野鶏子元來芝居氣ある男とて、後邊からコッソリ駈抜けて「親の仇其處動くな」と檜木笠に手をかくる、軍鶏子左はさせずと、クルリと身を反して、また大股に駈け出すを、追ひ懸けて腰なる洋傘の柄を攫んで引寄せれば、前なるも今は觀念して、笠の縁に手をかけ、行先を睨んで突つ立つと、野鶏子また身を屈めて、「處も恰度中山道、日頃の願も加納の宿の、此處で逢ふたは百年目」と、眞面目に臺辭を並べるのを、松笠を拾ひながら、切株に腰うちかけて、煙草を吸つて居た老婆が、怪訝な顔して見惚れるも可笑し、折から彼方より二人の男女の來るを、珍らしと見れば、これは此邊の花嫁なるべく、田舎芝

居の衣裳でもあるかの如き、金ピカの半襟かけて、島田髷は悪る光りのする程黒髪付に塗立てたり、故郷歸りの戻りでもあるか、扈從せる驛殿が葉苞を兩掛に吊下げたるも珍らしと見送る僕、僕等を見て不思議と振向く夫婦連、目と目、顔と顔とが一緒に合つて、兩機相投する間も無く、フンと冷笑つて通り過ぐる僕等に引かへ、花嫁も驛殿も稍々立止つて、あれは役者だアとの鑑定は、流石に眼力が届いたものなり、宜べなるかな、五鶏の風俗を云はんに、錦鶏子は黒紋付の薄綿入に、羽織れるも黒の紋付なり、股立とれる下には、龍紋の脚絆を穿き麻裏草履に紺足袋は、笠も取合せ好き打扮なるに、烏骨鶏子は鼠子ルの單衣を、布子の上に纏ひつゝ、白の股引大原女の、穿くてふ脚絆を召されたり、残る三人も黒装束にからみ帯、笠を後光に背負ひし態は昔ならば小大名のお行列とも見ゆべきなれど、さて殿様を誰ぞと指さ

ば、錦鶏子の人品尊きは、隠しても隠されぬ氏から素性、烏骨鶏子も肥えたる所に貫目ありて、さし向き家老職は外れぬべく、軍鶏子の骨逞ましき、御指南番は斯人なるべし、お小姓近習も引ッ纏めて、同行五人の忍びの旅ゆへ、雨が降らば笠参らう、晴れて威光も大鳥毛、槍持奴の尻振る癖は、僕が持病と御免ぬへ、それ君等を役者だと云つて笑つて居るぜ、悪洒落は廢止にして、句でも案じやうやとは、烏骨鶏子の即興なる、

笠の上にひさご躍るや春の旅

發議者一騎駈の即吟に、一同感服して、我も我もと駄句を吐けども、恩賞に預からんもの一つも無きに、いざ一献と、野鶏子が笠の上の瓢箪取出で、口を切るに一滴も無し、こは不思議とよく見れば、先刻加納で買ひし儘の、穴は初めて見出したれば、安しと思ひし十銭

の、瓢も高くなる瀧の水、その養老の酒よりも大切なのを、一滴も残さず吸ひ居つたる、笠は檜の木赤い顔、呆れた顔と一對のよい見物だと哄と笑ふ、斯くて五人は行けども行けども松原盡きず、路傍に葦美しくう咲いて、小さき神の遊び給ふと、誰やらが見立たるも、無理ならぬ姿なり。

木曾入や松原三里つぼ葦

とは僕の駄句なり、ダクく流る、旅の汗、綿入二つ襲ねたも、天の冥罰、他人を怨むにもあたらぬと、手拭に汗を拭ひては、もう幾町でと、そろく弱い音を吐けば、第一番の足弱なる烏骨鶏子にも笑はれて、漸く松原外れの茶屋に着きぬ、何かあるかと駈け込めば、神代頃の人間かとも思はるほど寂びのついた村婦が、餅の煮たのに、玉子があると、生地を見せたるソツ氣無さ、お鐵漿の兀げた齒を見せるの

が愛嬌か、口元に笑み傾けて、さアあがらつしやいと鯡を皿に山盛にして出す、茶を呉れと云へば、器は缺けて濫に時代のあらはれたり、僕はまた堅パンを一つ摘んで、價を傍に飯食ひ居る悴に問へど、笑ふばかりで答は無きに、また問ひ返せば母なる人の、それは啞でと顔赤らむるに、氣の毒なことだ、十一や十二の年頃の悴が、啞聲では親が世間を羨むだろう、東京ならば僕の裏の學校にでもと、思ふても役に立たず、腕車があるまいかと問へば、はあ一輛あるが、挽夫が野良へ出てゐるから、急の間には合ふまいと主婦の言ふに、さらばまた歩し通ると、議鳥先づ駈け出せば、皆なとりくに動き出して、四五町行けば小村あり、荒れたる藁屋、破れたる垣根、道には椿の落散りて、春も名残の流し紅、小川の水の日に照りて、水晶とまで見られたり、岸なる方に鶏の居て、落餌を拾ふも繪にはなるべし、錦鶏子弗と目に

止めて、

藪垣や鶏三羽落椿

これ寫生的なりとの遁口上、また句となり、歌となりて、五人の草鞋の、切れて煙の立つ頃や、小さき坂を一つ降れば、鶉沼の宿は眼の下の瘡とも見えき、こゝに荷をつけたる車夫の欠伸して待つに、今の松原はと問へば、各務野と云つて、三里四方あります、以前は田島も無く、青草のみ茫々と生えておりましたが、今は開けて御料地になりましたと、話しながら行けば、間も無く鶉沼の宿に着いて大島屋といふ茶屋に休む、ち出でなさいませと入口に立て、如才無くお辭儀する娘の十八九の年頃なるが、薄化粧して、揉手する手の紅差指に、金ピカの指環嵌めたるも、土地の富饒は知られたり、裏手の座敷に通りて、障子を押明くれば、田に畠に眺望は廣くして、麥の戦ぐも見頃なるに、

滴るばかりの新緑に、犬山の城の浮き立つて見ゆるも、眼の覺むる心地ぞせらる、アノ城までは幾町ありやと問へば、近いやうでも一里あります、犬山近邊からは瀬戸物が澤山出來ますので、此村までが繁昌しますると、話して居る中、飯になる、山うどに竹の子と木の芽を味噌あいにせる鹽梅の旨さ、白味噌の豆腐汁も空腹には珍と唱へ、食事を濟して、いざ今一と息ど、名々脚絆の紐をべめ直して、烏骨鶏翁の腕車の來るを待ば、翁は草臥し膝頭を撫でつゝも取あへず、

春の旅三十年來五里の道

と口吟みながらヨイトマカセと、今來し車に上り出づ、かくて時は二時にも近かるべし、この時までも、野鷄子は澁茶を幾碗か啜りつ、手障の美事なる朱泥の急須を、妙だ、珍だ、奇だと賞めそやしては、さも欲しさうに上げて見、下げて見、思ひ切つてこれを我に譲り呉れよ

と、言葉を卑く懇に主人に所望すれど、それは二つ無き品なればとて、躰好く断はる、顔を膨らしたれど詮無きまゝ、四人こゝを立ちて野道に出づれば、危橋あり、石地藏あり、沓掛に至れば、木曾川初めて見ゆ、暑からず寒からぬ風に波を打寄するまでに伸びたる青麥の裙を、白く光りて流るゝ大河、滔々として海の如く、犬山城は水を隔てゝ、高く蒼穹を摩づる態、繪も及び無き妙あるに、白帆の列をなして鏡の上を迂るやうなる、ペラ／＼松原の中より見れば、我等も仙人になり負せたかと思はるゝ程、身躰も足も軽くなりて、長坂にかゝるに崖を切崩して、道を水邊に通せるなり、松原を越せば、景色一入美しく天地を二分して、左は巖々たる山峙てば、右は木曾川雪代水の青く湛えて、早瀬を下る舟は、飛ぶよりも尙ほ早く見ゆ、あれ危ない、それ突あたるわと對岸の岩間を傳ひて下る舟を心配するも、川向ふの

喧嘩に齊し、古人齋藤拙堂は我等の旅行とは逆に、この川を舟にて下りしが、その折の記文に「灘急にして舟走り兩崖の巒嶮一時に皆揺く前に當りて見ゆる所倏忽後ろに在り、唯岸行き山走るを見て、舟の移るを覺えず、山皆石身にして土を載せ、松之が髪を爲す、而して紅杜鵑其間に粧點す、腥血滴るが如し、又處々に水簾ありて懸り、綏々灑々と潭石の上に墜つ、石皆奇狀、兩岸に羅列す、或は特立して柱の若く、或は折裂して門の若く、或は渴驥の澗に飲むが若く、或は臥牛の道に横るが如し、五色陸離として相間はる、皴おほむね大小斧劈を作り、間ま荷葉披麻を作る者あり、波浪に濯がれて以て出づ、交替去來應接に暇あらず、蓋し譎詭變幻の中に清秀深穩の態を帶ぶるもの、荆關の筆、倪黃の手にあらざれば狀する能はざる也」と書けり、寔に愛度き景色なれど、荆關倪黃の筆ならでは描き難しなどは、大に我が

一行を侮辱するものなり、此方には玉章宗山の二畫伯あり、マツタ技師としては憚りながら僕の寫眞あり、天保とは時代が違ふぞと、力みかへつてまた觀音坂を過ぐ、道の傍にその堂あり、橋を渡れば勝山なり、この邊の名物を竹竿、申柿、美濃紙、鍛冶等とす、茶屋あれば憩ふ、こゝよりは錦鶏子腕車に乗りて、烏骨鶏子の跡を追ふて急ぐに殘れるは三人、太田の宿に着けば、日も入相の頃なりし、木曾川を舟にて渡り、今渡村に着きて、名物の鰻鮓を食ふに、摺胡麻を役味に添ふ、これは乙だと、腹をしたゝかに膨らせば、反比例に足が重くなつて、僕はもう一步も進めずと唸る、一人が乗らうと云へば、乗らんせくと土地の車夫に足下を見られて、高い賃錢を食られ、夕暮の風の襟を吹くに、心地快く眠に入りて、伏見の里も知らず、行平朝臣の墓も見ず、右に揺られ、左に崩れて、海月の如く、海鼠の如く、ノラリ

クラリと骨も鎔けやせむかと思ふ程に草臥を覺えて、御簀の升屋に着  
くまでは、悠々として花鳥風月の夢圓なりし。  
遅かつたを彼れ一句、お早うと此れ一句、直ぐ湯にゆけ、いざ酒にせ  
むと、烏骨鶏子の軍配に、三人ドカ〜と浴みして立出でしが、僕如  
何して近眼鏡を見失ひけむ、一寸先は闇の夜盲、詮方無きまゝ、雪燭  
點けて、再び捜し見んと湯殿に至れば、折しもあれ五右衛門風呂の釜  
の火の、板圍ひを焼き抜きて、焔炎々と燃え上る、こは大變なり、火  
事よく〜と人を呼べば、勝手よりは若者多く駈來りて、漸うに消止め  
たる騒ぎに、眼鏡も庇陰に見つかりて、急ぎ座敷に戻れば、兩側に居  
流れたる四鶏、郡内の座布團も居心好く、膳に珍味あり、酒は市原父  
子の情の籠れる千兩福あるを、且つ飲み、且つ食ふて、夜の更くるを  
も知らざりき。

日 吉 峠

朝の冷氣に心地快く目を覺せば、御簀の山は霧にかくれて、小雨そぼ  
降る、旅中の雨とは歌の題によき空なれど、さて實際には面白からず、  
各々桐油に檜木笠の身繕ひして、腕車を急がすれば、町外れに小松原  
あり、しかも山は高からずして、杉の一村、水車の草の家の檐に轟く  
も妙なり、未だ植えつけぬ田には、水の漲りて、山の腰を映すも趣  
あれば、雲は麓を徘徊して、崩れては裾に禪寺の門を見するなど、垢  
ぬけのした眺めなれば、手は先づ

田に山の影見えながら春の雨

と車上一句を唸る、斯くて道の程二里餘も來りけむ、次月村といふ  
にて、車を下る、小川あり、水車小屋あり、橋を行く簀笠の人、野牛



を追ひつゝ、駈ける村の童、麥は伸びて、雨に露草の螢を思はせ、木は裸にして、こゝには未だ春の來ぬかと疑ふ、來ぬかといへば、糠の雨誰も遅れたものも無からうかと云ひつゝ、村男に荷を昇がせ、五人勢揃ひして、山を登る、頂上に茶店あり、憩ふて峠の名を聞く、日吉峠といふ、麓には日吉、月吉の二ヶ村ありて、西行の歌に「夜晝のさかひはこゝに有明の月吉日吉里をならべて」とあるがこれ、名物には日の糞、月の糞とて、奇妙な石が出まするが、一つ買ふて行かんせと、茶屋の媽が二つ三つ攫んで出すを、軽石なれば兎も角も、身軀一つさへ持て餘すのに石の土産物杯は御免蒙ると、一同汗を拭ふて澁茶を啜りつ、麓に下れば、村の下口に櫻美しう咲けり、谷川の水白く流れて、青山の腰をめぐり、四五の草の家の、杉に隠れ、枯木に見えて、實にこゝは日吉月吉の眺望なるべしと、急ぎ捷徑を駈け下れば、村の

童の番傘持てる二三人、櫻の木に攀りて、時を得顔の花の枝を折るが、我等をお役人様とでも見違ひてや、飛び下りるやうにして遁げ出しつゝ、折りたる花を泥に投げて、また逸散に我が家の方に駈け込みぬ、予は投げ捨てし花の一枝を拾ふて、一二町は持て行きしが、美しくして土産にはならず、さりとてこの泥道の杖にはなほならずと、惜しけれども棄てて行く、また二三十間行いて振顧へれば、以前の童の拾ひて歸るも興深かり。さて村に入りたれど、泥濘深くして、春海の如しとはこれをや云ふらむ、烏骨鶏子太り肉の足弱なるに、この道の悪さに閉口して、溜息嘆息せらるゝ熊見るも氣の毒の至りなり、錦鶏子は斯かる時まで、それを介抱して、遅れて來らる情の厚さ、誰か高士ならずとせむや、こゝよりまた峠あり、竈山といふにや、頗る嶮しき難所なり、山上に薩摩芋を賣る茶屋ありて、芋に墨もて何十文と

價を記すも質朴なり、一同物欲しき折なれば、飽まで食ふて麓に下れば、こゝはまた一段泥深ふして、道容易に脚を容るべからず、一同頼りに縣治の宜しからざるを罵りて行くに、新任知事の騎馬にて、この山を通り過ぎ給ふに逢ひしが、これにてお氣がつかれしならむ。釜戸に近き小山にて、一ト休みする、雨は全く霽れ、雲も消えて、麓の村々は恰も地圖を伸べたらむやうに見ゆ、その景色の廣き、其邊の岩石の奇なる、何れを繪にせむなど、寫生の筆を措かざりしも興ありき釜戸に着けば、午後一時は過ぎぬ、一同草臥れて足も上らねば、馬車一臺を買ひ切りて急がす、道は石出で、泥深ければ、馬飛び、車躍り車中名々鉢合せして、額に手をあつるも可笑。竹折を過ぎて、また山路なり、下口にお六櫛賣る家あり、大井に着けば、はや日暮なり、只ある茶屋に憩ふに、其の店頭に蛇の皮を剥き居る男あれば、そを何に

するぞと問ふに、焼きて食ふなりと答ふ、この村の男は蛇食ふやとまた問ひかへせば、蛇にも種類あり、食はるべきは食ふなりと答へつ、脊戸の方に入りぬ、氣味悪しとて眉を擡むれば、立場に群れ居る車夫の、旦那氣の弱いことを云はんすと、笑ふ男の相好愛たからず、昔時はこれも雲とか云はれし毛臍の壯丁なりしか、今もなほ一癖あるべき面構へやと合點しつゝ、種々土地の噂話など仕懸れば、先刻追剝がありました、貴君方途中で二人連の女衆に逢はざりしか、あれがその情夫に着換までも裸にされて、突放されたる松本の茶屋女なりと教ふ。この前途白晝追剝の出さうな、そんな淋しい山路があるかと問へば、十三峠越しちやア、もう酷い山はありません杯と、問ふも語るも旅の恥と、聞きすてゝまた馬車に乗る、坂本の宿は闇なりき、夜黒けれど、馬車に燈を點さねば、一同は冥土を辿る心地して、中津川橋を渡

### 須原の宿

りし時は、名に聞く賽の河原かと、齊しく馬車に懲々して、其町の橋  
 利喜に泊り、心地の快かりしも夢の間、遅く着いて早立の哀れさを、  
 木曾路は可愛兒に旅さすべきところなり。

中津川にては、篁村翁歌媛に木曾歌を聞いて、袷に足袋を添書の述懐、  
 俗なるゆゑに人に通ず、俚歌は軽んずべきものならずとて、梨下に冠  
 をも正されず、萬事真面目に通られたる古跡なるに、露伴君も亦この  
 宿にては、餅米を桑に代へて、蠶兒を飼ふといふ魔法遣ひと同宿なさ  
 れて、面白可笑く一夜を明されたるに、我等は着くと直ぐ食ふて、寝  
 て目覺ませば、朝立の雲は時に横はれり、ヨイトマカセと越して行く

美濃と信濃の落合より、道を新道にとりて、木曾川に沿ふて上れば、  
 山は嶮しからずして、しかも景色は面白く、國界標の畔に至れば、一  
 軒の茶店あり、床几には漉皮の剥けし十七八の娘二人と、男もこの村  
 の者とは見えぬ厭味なのが、予が憩ひ居る傍に来つ、寫真機を我知れ  
 り顔に講釋する面憎さ、機械を荷ひ居る車夫に、アレはたい者では無  
 からうと後に問へば、旦那のお鑑定が當りました、アレは博徒で、ア  
 として網を張つて、お導者衆を引ツかけ、エスリといふこととして、一  
 杯喰はせるので御座んす、賭場は飯田、福島、この邊はその巢で御座  
 いますと云ひつゝ、行きて、後邊を振向けば、四鶏はいたく後れたり、  
 いざ暫待ち合せて、共にこの景色を眺めばやど、路傍の石に腰打か  
 けて、木曾の流れを見下せば、淵に湛よう水は藍よりも青くして、底  
 ども知れぬ凄味あれば、岩に激して狂ふ波は、日に輝きて雪よりも真

白なり。道は崖を切崩して、山の腰を通じたれば、九十九折して、前なる人に追いつき難し、こゝに年老る奇檜怪松、夜刃の如く、鬼の如く蟠屈して、その危さは妙と云はむ、斯くして上り行き行くに、龍巖といふ奇岩あり、河中に小さき島をなして、杜の中に祠あり、龍栖む處と稱ふるとか、麓に下れば山口新道なり、茶屋に憩へば、店頭には水車あり、柳櫻をこき交せて、住めば都の山里も、篋に春の水温み、畠に麥の葉青みたり。折から馬追ふ賤の女が、此方をさして來かゝりぬ、その風俗の鄙びたる、柴蒔る童と比べて見たし、また行く山に入りて、賤母橋あり、正午過ぐる頃吾妻橋に着く、橋の根なる茶屋に入りて、晝餐の仕度を命ずる時、烏骨鶏子いたく草臥れてこゝに來らる。この村山に據り、水に臨みて眺望美く、膳には川魚の新らしきさへ上りあれば、給仕する女中に、この肴は何といふぞと問へば、

たい魚と申します、さらばこの山川の名はと問ひ返せば、たい谷川と申しますと答ふる辭の、訛無きは土地の者にはあらぬべしと、生國を糺せば、名古屋なりといふ、これも博徒の玩弄物にもやと、身震ひしてこゝを出づ、烏骨鶏と錦鶏の二子こゝより車に上る、軍鶏、野鶏の二子と、予との三人は、また鐵脚を踏み轟かして、讀書村なる三留野を過ぎ、雪に眞白の駒ヶ嶽を夕暮の雲の中に眺め、野尻に着けば、未だ日は隠れず、いざ足下の明るい中にと、また急ぎに急ぎて須原に着きしは、宿屋の行燈の檐に淋しき頃なりし、吾等が宿の住吉屋ほど、重き脚を引摺りながら、戸毎に問ふて行く向ふから、弓張提灯のちらつくを見てやれば、彼方は笠に見覚えあるか、闇から聲を振立て、住吉屋でござい、お連様がお待兼で御座います、御案内をど先に立ちて行くに、これぞ地獄で佛と、漸くその店に着き、三人先づ湯に入る

に、五右工門風呂の心地悪さ、湯には濃き油の浮びて、墨にても浴び  
たらんやうなれば、番頭呼びて仔細を問ふに、それは善光寺詣の婆さ  
ん達が、黒鬢附の髪を洗へる油の浮んだのであらう、木曾路では後れ  
て宿をおどりになると、得てさうした事がと、天窓を掻いて詫ぶるも  
奇なり、貯へ來れる銘酒も、こゝにて残り少なになれば、金命水と名  
をつけて、笹の露の滴んで呑むも興は深く、山深ければ肴は無けれど  
名物のどろ、汁に、給仕の目をまはす程飯を迂らせて、酔も十分、腹  
も十分、これから寝るも惜しいものと、晝は左程にも思はざりし氣候  
の、夜は寒さに堪えねば、炬燵の爐に火を煽さして、寝轉びながら、  
歴史文學などの話する時、これは風流佛にもある花漬賣が、名物の花  
漬木曾をお通りの印に買ふて遣つてと、此方に入り來る娘を、弗と見  
やれば、年の頃は十四か五なるべし、未だ肩上げも初々しき所作、微

塵戀などは目薬にしたい程も無い罪の無さに、五人打揃ふて土産壹百  
買ふたるは、名物よりは娘を買つてやつたのなり、花漬賣の出で行き  
たる後は、酒も醒め際、更けて夜も寒ければ、名々都の花は若葉とな  
りしに、こゝは春の片だに無しと、色は襟垢、香は旅する人の汗の匂  
ひのする夜具にくるまり、夢のみは蝶となつて、足腰伸す中の極樂と  
前後も知らず。

### 寢 覺 の 床

都の花は散り果て、馬蹄に色香も留めざるに、木曾路は春の遅くし  
て、駒ヶ嶽は寝白粉に、未だ目覺めたる氣色も無く、裾野に氷の鏡は  
張るべく、川は雪代の水嵩増して、滔々として物凄し、須原の宿にて

目を覺せば、爐に火は煽してあり、澁茶に梅干も添へてあれば、朝飯も心地好く喫べて、ここを立出づ、町並の家を覗くに、名物の花漬賣れるが多く、宿屋は大方戸を鎖して、客を迎ふる氣色も無きは、木曾路の寂びたる證なるべし。錦鶏子この地を離るゝとて、

麓には花と見るらん深山木の梢は今も雪にうもるゝと一首唸られたり、綿入二つ襲ねても、なほ朝風の寒きを覺ゆる程なるを、名々健脚を誇りて、大地も窪めと歩み行けば、一里許にして立町に着きぬ。なほ行くに小野の瀧あり、山間より落ちて、木曾川に流る、瀧の裾には土橋ありて、通路とす、細川玄旨の老の木曾越に、布引箕面などにも、おさくおどりやはする、是程の物の此國の歌枕には、いかにもらしたるやと見ゆ、小さき坂あり、上りて行けば、山窮りて路はその腰をめぐる、滑川橋あり、閑靜なるどころなり、寢覺の

里は二三町を隔てしのみ、駒ヶ岳の根末に枯木に交る一村、家は路に沿ふて、申の字の如く、宿屋は越前屋、たせ屋などありて、名物の蕎麥切をうる、床山へはその村の裏手に小徑ありて、臨川寺の門に通ず、寺の門を入れば、浦島の社あり、寶物の釣竿は二股竹なりと聞けと見ず、さて庭の欄干によりて、木曾川を見下せば、實に眠れるが如き床山、流水は溪に挟まれて、刀して削れるやうなる岩に堰かれ、藍よりも青く湛へて、雪の如く白き床岩の下を流る、床の高き處に松ありて辨財天の祠建てり、屏風岩の下は川幅一入隘く、俎板岩の日に白く輝ける、大釜、疊岩、烏帽子岩など、緑青、胡粉、種々の彩色したる如き眺めあるに、山には檜、樅、梅、松の、枝振の妙なるが、茂り合ふて、山の色を彩れば、水は日に照り、雲に隠見して、その景色の面白き、木曾一番の眺望なり。貝原篤信はこゝを、他所のすぐれたる風景

にもこえて、奇妙なる風景なり、いつくしく潔きこと、心にしるしが  
たく、ことばにも述べ難しと褒めぬ。謠曲にもこの地の風景をうたへ  
るを見ても、名所の一つなることは明なり。

棧の跡

十四五町行けば上松なり、繁華須原に優りて、電信局もありと覺ゆ、  
ここを出づるに、御獄に上る道あり、木曾棧の舊跡あり、上野屋と  
いふ茶店ありて、家の脇に芭蕉が「棧やいのちをからむ葛かつら」の  
石碑建てり、名物の蕨餅賣りあれば、喫べながら名所の話を聞く、そ  
の道を上り行けば、御嶽川なり、谷間に材木夥しく、檜、さら、  
松、けやき多けれども、杉は少しも無しといふ。また柄の木多く、土

民其實を粉にし、飯にあて、食せし由、木曾路の記に見ゆれども、今  
もかゝることありや。さて山に入りて木を伐る柚人は和泉、紀伊、近  
江などより來り、春の雪消に山入して、十月山を出づ、伐りたる木は  
多く川に打込み、錦織よりそを筏に組み下し、美濃太田を経て桑名  
熱田に流すところ、かゝれば大鋸負へる柚人の、一群二群伍を爲して、  
上松の宿を通るを見たり、福島町の町に入れば、御料局の支部あり、こ  
れ山林を監督する所とぞ。この町は木曾第一の繁華場なり、昔時は尾  
張侯の番所ありて、鐵砲と女とを改めしとかいへば、兎角女は物議の  
種と見えたり、葛屋にて晝餐したむ、店頭の子傳する女の數多居て  
拍手揃へつ、子傳唄をうたふを聞けば、  
「烏鳶何處へ行く、お諏訪様のお迎ひに何々持つて行く、麴三合米  
三合、橋の詰へ蹴いて、瓜立つて拾つて、せん湯で洗ひ、ゆすぎ場

でゆすぎ、圍爐裏の傍へ持つてつて、甘酒造つて置いたらば、下の町の黒犬と、上の町の赤犬と、うまいと云つちやひん舐め、まづいと云つちやひん舐めて皆んな甜めて仕舞つた、其跡は何うやつた、太鼓に張つた、太鼓は何うやつた、夕べの踊に、たゞきつぶいて仕舞つた

と泣く見の尻をたゞきつ、節面白く無心に唄ふ、手は興あることと思ひて、手鞠唄をど所望すれば、顔赤らめて遁ぐるもありしが、中にもはぢけたる一人の小娘の我知りとて、紅葉のやうな手を振上げつ手鞠をはづませ、聲優しげに、

「一ツでは乳をのみそめ 二ツでは乳首はなして 三ツでは親の寝間を離れて 四ツではよりこよりそめ 五ツでは糸をとりそめ 六ツでは麻機織りそめ 七ツでは錦織りそめ 八ツでは

錦織をりそめ 九ツでは嫁入しそめて 十で殿さどぬいそめて 十一で玉の様なるボエを設けて、世話にするする、すふとんとんと、殿さまち年が若いとて御油断なさんな、清水のく干本柳に、一羽の雀が鷹にとられて、乳やぱんく、チヨト百ついて、落したオヤ落したと、遣つて、退けたる罪の無さ。

### 義仲の舊里

斯かる事して時刻を移すに、四鶏は呆れて、皆なちりくく此家を出でたり、手は後れてここを立ちつ、宮の越にて追ひつきたれど、草臥果て、足さへ上らず、無念や口惜ど切齒をすれど、詮なき顔ぞ見苦し



かりし、徳恩寺には巴山吹の墓ありと聞けど、日もはや西に沈みかゝるに、藪原までは二里ありと聞き、われ又一入衆に遅れて、夜に入らば淋しさ一入なるべしと、墓には終に詣でさりし。なほ行きて例の癖にまた寫眞する、この間に再び遅れたり、儘よと獨り度胸を極めて、供する男と並んで行けば、山窮りて崖高く、川は道に沿ふて、流れては淵に渦巻けり、山の裾に板葺の家の二ツ三ツ、枯木立に夕陽を射けて、繪のやうに立つ。荷を負へる男のいふ、こゝに木曾公の墓あり、詣り給はずやと、二人小徑を縫ふて行けば、丘の上のやゝ小高き處に大きやかなる碑あり、檜木笠もて夕陽を蔽ひつ、その面を讀むに字鮮に見ゆ、木曾義公菅里碑と題したり、碑の畔に村の童の、木攀して遊べるがありけるが、予の何時までも碑の前を去らざるを奇とし、傍近く進み來て、予に親しむ景色の素直なる、鄙びたる中にも高尚相

好のあるは、冠者が稚立にも似たるか、そも冠者は二歳にして、父の國を追はれ、母の懷中に在りて、木曾山中に情ある人を便り、野に山に生ひ長ちける頃は、願ふにこの兒童と伍を分たざりしならむ、中原兼遠が、遠謀は圖に中りて、平家潰え、冠者は旭將軍と仰がれて、京洛に暴威を振ふ時まで、兼遠は冠者が影武者なりしなり。頼朝には時政あり、義仲には兼遠あり、その頼朝義仲の強きが如く見えたりしは、影の形より大なりしにあらざるか、冠者が百戦百勝、破竹の勢をもて、京に攻め登るや、崩れんとしたる平家は、盛砂の如く潰えたりと、それよりして冠者の京に在るや、無謀無識、勝つて忽ち騙り、敗れて忽ち斃さる、勝てるは方のみの強かりしなり、敗れたるは策の拙きなり、冠者より兼遠を除き去らば、その影の脆かりしこと、豈夫頼朝の手を俟たんや、粟津の一敗、その最期の見苦しき、果して英

雄豪傑たる者の末路なるべきや、冠者は、畢竟木曾の英雄のみ、天下を經綸するの才なかりし也。後の人の歴史を讀まんもの、眼を紙背に徹さるべからず、必ずや亂世の英雄には、影に添ふべき其形あり、形より落す影の大なるに感ひて、その原形を無にするは、所以無き事といふべし、大義といふも、名分なるものも、ツマリは策士の影にして、世は傀儡の機關仕掛と、變通を極め込む中に、童兒は居らずなれり、日は峯の松蔭に落ちて、木曾の川水物凄く、裾の一村、魚油に火點す頃となりぬ、急ぎて丘を駈け下りつ、川下を見渡せば、月はあらぬ薄暗がり、馬を洗ふて歸り行く男は、骨逞しき偉丈夫なるが、道もあらぬ野の草を踏み敷きつゝ、急ぐ後姿の、粟津の冠者に似たるかなど、また七百年の昔を撥斥すも、旅なればこそする業なりと獨語しつ、予も落武者のやうに藪原宿に足を早めぬ。

巴が淵は物凄く、上吉田は半ば夜に入りぬ、斯くて漸く藪原の宿に着き、米屋といふに尋ね至れば、四鶏はここに待合されあり、座敷に通れば、錦鶏子先づ料紙を取寄せて、木曾公の碑に詣でたる折の所感なりとて、さら／＼と下の一絶を書いつけて見せらる。

亂山老木挾狂飈、一蹶雄圖恨未銷、白日雲翻旌旆影、落花古驛馬蕭々。

ど、まことに能く其景情を盡されたり、古驛の落花馬蕭々とは、面白き句ならずやなど、杯をとりて評し合ひぬ。その夜の膳には、例の金明水も盡く飲みつくしたれば、地酒を所望せしに、新らしきは甘く古きは酸し、肴も「でんぶ」の罐詰が、デンプ陀金など、命名さるゝ程なれば、膳の上の淋しきは勿論、山も淋しく、夜も淋しき山嵐、それよりして歴史文學などの談話も仕盡して後は、寝る外は用も無き草枕

木枕ならざりしを仕合と、足らぬ勝なるは何事も旅と諦めて、寝やうとする所へ、名物のお六櫛賣りに来る、木曾の旅寝も今宵を果と、櫛百枚買ふたるは、連中ながら出過し業なり。

鳥居峠

山近ければ、白雲儘徘徊して、麓の家を覗くも清く、谷川の水の、氷よりもなほ冷たきに嗽きて、心地爽かなるを覺ゆると共に、藪原の宿を出づれば、村の多くは名物のお六櫛賣るか、家の檐に種々の看板吊せしも興は深かり、見仰れば鳥居峠は、我等が前途に両手を廣げて立てるが如く、路は爪尖上りになりて、漸うに息苦しくなり來れり。一行は後になり前になりて、我先きにと峠を駈け上れど、九十九折の掛

取らねば、若きは捷徑を見つけて迎るに、老ひたる鳥骨鶏子のや、遅れて上り来るを、上より見れば、寸馬豆人の筆法に似たり、兎角して一同は絶頂に辿り着きて、御嶽社の祠に憩ふ、板葺板壁の嚴丈なる構造、拜殿と本社と別れて建てり、本社の側には、青苔の蒸したる石像數多ありて、坊主山の早蕨かとも怪まる。拜殿に太鼓あれば、戯に撥を揮つて、鑿々と打鳴すに、山に響き、谿に應へて、いと爽快なり。折しも谷風の雲を吹き捲いて、山の腰を裏むかど見れば、麓の村は闇になりぬ。雨さへ颯と落し来るに、一同呆れて、祠の中に縮み上ること多時、天は寒く、遠き山には雪さへ残るに、實にこゝは夏知らぬ國なるべしとて、衣うち襲ぬる人さへありき、雲時して雲断れ雨は霽れたり、いざとて祠の中を出づ、見下せば、山は波の如く起伏して、窪き所に村あり、水流れたり、彼の米點の一村は、藪原か、杜に隠れ、

野に見えて、遠く流るゝものは木曾川や、その眺望の廣き、街道第一なるべし、舊道を下れば茶屋ありて、餅を賣る、なほ下れば奈良井宿なり、入口に鎮目明神あり、こゝ東海道箱根の古驛の如し、只ある茶屋に憩ひて、名物の挽物細工の價など問ひつ、我と軍鶏子と野鶏子とは後に残りて、嫁が手に木の芽合するを待てば、錦、烏二子は先づ去りて、残れるは氣隨氣儘の三すくみ、圍爐裏に足を突込みて、折焚く柴の煙に咽びつゝ、なほ予は土地の風俗など問ひ尋ねれば、嫁なる人の濡手を前懸に拭ひながら、變りし事も御座りませぬが、木曾はこの五六年、めつきり淋しくなりました、御嶽詣りも少くなりましたが、神佛の御利益も近頃薄くなつたので御座りませうかと、物語るその顔の嬋妍さ、色は飽まで白くして、唇は丹花を合むか、締ありて愛嬌深し、筒袖の半纏を羽織り、下に破れたる布子を襲ねつ、始終笑み傾け

て、客に應接する美しくしきは、神か、佛か、かゝる山家に、色あり香ある花一輪、珠運ならぬと我もなほ振捨難き思ひしたりき。我は近頃この村に心中は無きかと問へば、今は御座りませぬと、四五年前にこの山奥に御座りました、それは聲を始かきらへど、嫁はこの人ならではといふ所から、浮世を狭く見切つて、鐵砲で心中して果てました、田舎の人は義理堅う御座んすが、こゝ邊ではそんな馬鹿氣な事はしませぬと、意味も無く云つて退けたる小伶俐さ、其辭の中には輕薄の語も含み居れど、世はみな戀なれ、山の奥も海の果にも、戀あればこそ人も明日を樂しむなれ、これ無くば、鳥も容つくらず、花も色無かるべし、ツマリ戀と無常には、打勝てぬ人生、五十年を二十五で果すも、多寡が遅いと早いとの二つなりなど、いろく妄想を辿らせつ、さて奈良井の宿を立出で、贊川村に着く、曲物賣る家、檜楊枝賣る店と櫓

を並べて立つ、空腹になれるまゝ、名物の蕎麥切を喫ふに、下地も旨く、器もよし、また行いて櫻澤に着く、溪流を境にして、昔は木曾を尾州領とし、東を松本領となしたり。本山に着けば、一時は過ぎぬ、只ある茶屋にて晝餐したため、馬車一輛を雇ひて走る、但し烏骨鶏子は中津川にて馬車に懲りられたれば、錦鶏子と共に腕車を走らせ、我等三人のみ、石高道を南瓜のやうに轉がされて、洗馬に着く、こゝに義仲馬洗ひの清水ありと聞けど見ず、桔梗ヶ原を過ぎ行けば、木曾路はこれで打留めど、昔時の合戦を語り合ひて、武田が豪らいの、誰が何うだのど、話の聲は一上一下、馬車の揺動に膽を冷して、郷原、原新田、芳村を過ぐるに、櫻は今が盛なり、花の吹雪と散り布く中を駆け行く疾さの心地快きには、旅なる事も忘れたり、

松 本 城

斯くて松本の城下に着きたるは、日も西山に傾く頃也、こゝにて劍客某の案内にて、萬菊といふ宿屋に泊るに、風呂場も清く、室は主人の物敷奇にて造れる離れを二間借したれば、疊も新らしく、酒は望むまゝの好きもあり、肴は川魚の鮮なるも膳に上るに、校友赤羽雪邦、松原善人二氏來りて、座に興を添へられたれば、旅の苦も忘れて、一同再生の想をなしぬ、酒果て、松本城畔に劍客の試合を見る、天真無敵流と呼びて、劍法の尤も精れたるものなり、三番五番と濟みて、眞劍の試合をなすに、その氣合の充實せる、態度の常を失はざる、初めて劍の興あるを覺りき。翌朝赤羽松原氏等に伴はれて、土豪の家に古器を見れば、人類學に精しき翁あり、松林某と呼ぶ、土器、曲玉、雷

斧石など、室内處狹きまで置並べて見する、その熱心驚くべし。萬菊に歸れば丸山團平氏來り訪はる、それより一同松城館に遊びて會飲す、劍客某々氏、赤羽氏松原氏兄弟等大に幹旋の勞をとらる、午後一時また馬車を驅りて、穂高村に向ふ、これ犀川を下りて篠井に至らんとてなり、豊科、成相新田を過ぎて、穂高村より馬車を捨て、間道を辿り、高瀬川を渡りて、下押野に入る、日暮れて犀川を渡るに、急流矢の如し、川原に立ちて、前なる風光を觀望すれば、犀川漫々として海の如く、日落ちて微に遠き山は、雪に明くして、裾の霞に打消されたるも面白ければ、夕焼に向ふ近き山の、浮き立つばかり美しきも興あり、遠樹は煙の如く、近村は夢に似、渡頭に舟を呼ぶ人は、そも何物にか似通へる、繪にせば興ある圖となるべしとて、一同砂利に腰を下して、馬子の荷をつくるを待つこと久し、川手村を過ぎ、闇の夜道

を辿り、いづれも草臥果て、大和屋といふを力に、木戸村に着けば明間無しとて斷る、今は座敷の善悪を論ずるの違無ければ、茶の間にてもよし、枉げて泊め給へと乞へども、頑固なる老主の、なかく聽入れぬのみか、果は我が家には鐵道のお役人様が、名々一人で一間宛を占め居給へば、泊めることならじといふ、腹立しさに、さらば頼むまじとて、次の村に引かへして、宿屋を尋ねれば、今は廢業して客を泊めずといふ、夜は八時なるべし、山近き麓の村の、夜氣一入靜にして、雲も眠りたらんか、而も淋しく凄き荒村を、宿にはぐれて大の男五人が、的も無く迷ひ行くも哀れなり。今はハヤ飢と疲勞とに堪えかねて、止む無く巡查派出所に訴へ出づれば、課を終へて角袖になれる巡查の、我等の風躰の密ならぬを見て、兎角は疑心晴れざる態なりしが、かゝる折には官職を明すこと肝要なれとて、錦鷄子先づ身の上

を明して頼めど、熱情薄き土地柄とて、頼には世話し呉れず、途方に暮れて呆然たる時、更に一人の巡査來りて、我等が所思を慙れと思ひけむ、さらばとてまた川手村に戻り、柳屋といふを叩きて、無理に一同を泊らし呉れしは、その高意謝するに餘あり。止む無くば野宿にもど、覺悟して後の今宵の宿、家といふも名ばかりなる草枕に、蚤や、虱や、何やらの虫にさされて、容易すくは寢就かれざるを、酒の酔に紛らして、僅に一睡の夢に入れば、山寺の鐘は響いて、夜や明けぬらむ、鶏は謳ふて、日は出でぬらむ、今朝こそ舟して犀川を下るべしと夜具蹴ぬ退けて飛び起き、飯したゝめて待てば、頼み置ける舟子も來り、酒に風爐を用意して、川原に出づれば、山の容、水の色、その美しさ、詩も歌も物かはと、寫生の筆を措かざりしも妙なりき。時に四月九日なり。

下犀川記

夜一夜餓鬼の如く、闇黒界に押籠められたる一行の、山寺の鐘に目覺して、麓の泉の氷よりも冷たき水に嗽ぎ、朝の食事も手早く済して、川原に出づれば、今朝は柳屋の主人の、我等を何彼と待遇して、出船の用意など疎かならぬに、感情新なると共に天晴れたるに勇み立ち川縁の石に腰うちかけて、遠く雲に聳ゆる雪の山を眺むれば、昨日は夕陽を背に負ひて、茜色の空の眞只中に、來迎佛にてもあるらむやうに、白く怪しく光り輝きたる峯の一角の、今朝は裙に白紗を被りて、日を迎ふる色の、紫の匂ひ深きも面白く、水村山郭、一樣に目覺した

る如き景色の、若葉に花を點ずるも興あり、いざ召せ、船の準備は好  
しといふ、一行我勝にと乗移るに、底には布團を敷き詰め、水押には  
屈強なる水手の名匠に刻まれたる木像の如く、太き圓竹の棹を持て直  
立てり、櫓を押すものは、年の頃四十を越えつらむと思はるゝ荒男の  
煙管啣へて、悠々と煙を輪に吹く、船尻には風爐に湯を湧かし、青竹  
にて編める番に、瓶詰めの酒を用意したり。未だ朝風の冷たきに、棹  
の槓の折ふしは面を撲つなど、寒さに縮まりて、早くも酒欲しき顔の  
人あれば、この景、この興、酔はざるべけんやなど、賛同の意をほの  
めかすもありけり。川手村を離るゝに、急流矢の如くなれば、船は瞬  
く間に木戸村に下れり、昨夜我等を断りたる宿屋のあるやと、伸び上  
りて見れば、窓に横はれる松の木蔭に、憎むべき老爺も立ち居たり。  
あれ見給へ、彼方の谷川に架せる土橋は、烏骨鷄子の行惱み給ひたる

古跡なるに、紀念の句無かるべからずと、我先づ「春の日の行き暮れ  
て遠き土橋かな」は如何にやと問へば、それは秋の日ならば、いと趣  
あるべしとて取消さる、見れば見る程飽かぬ眺望の、青山に古寺あり  
溪流に危橋あり、寒山寺楓橋の詩の意もこれか、我等は夜泊の客なら  
ざりしも、今日彼の憎むべき宿屋の老爺を、畫中に點景の人物となし  
て、本職の方々が寫生せらるゝも、これも何かの因縁なるべし、觀ず  
れば世間、心からよこしまに降る雨はあらじ、風こそ夜の窓を叩きた  
る柳屋の、居心悪かりしも、今は笑ひの種となりて、見るゝ舟はこ  
の村を過ぎぬ、木戸を下れば、崖や高く、川は彎となり、弓となり  
て、屈曲して山の麓を流るゝにぞ、水潭をなし、淵となりて、緩く、  
激しく、流脈一様ならざれば、舟子須臾も安居せず、二人兩端に立ち  
て、棹を投ずるに、太き竹の弓の如く曲れるを見ても、膽の寒さを覺



ゆるなり。拙堂の文に忽遇一大巖屹立水中、舟殆觸之、少誤則壘粉矣、衆懼而默、舟人笑振柁避之、輒掠巖角一過、如此者數處、未嘗差三絲毫一と、よくその實狀を盡したるものといふべし、かゝる難所も四五箇所過ぐれば、水緩く、漫々海の如くなる中を、舟夢の如く行くに、江南の村には竹林あり、江北亦花に乏しからず、青巒に布を曳くは瀧なるべしなど、彼を指摘し、是を品して、酒を擧げて高らかに詩を朗吟すれば、山に響き、谷に應へて、聲水に落つ、魚やあるかと、流水を掬むに、雪代の冷たき、齒も浮くばかりに思はれたり。日はハヤ午にも近かるべきに、前を遮ざる楮山の高ければ、麓の岸には川霧立てり、岸を傳ふる曳船の、其趣の晝味あると、流し舟には水車のかゝりて、水切る音の長閑なるに、裾に粉挽きの轆轤もかゝれり。山水寺といふに至るに、山迫り水窮りて、奇岩溪流を嚙む物凄さ、水は

深潭に藍を湛へて、深さの程も知れざるに、舟子舟を岸に繋ぎて、こゝにて遊山し給へといふ、これ面白き景色ぞと、一行平らなる巨岩に坐して、石上に詩を題するあれば、風爐の火を煽ぐもあり。日は暖かに龜の子の、甲羅干す岩、浪は立ち舞ふ獅子岩と、名もつけたき程奇なるがあれば、翠微に雅なる四阿ありて、これぞ一六犀川の、目抜き場所と感服なしぬ。折から錦鶏子は好き隠れ家を見つけしとて、窟の中より我等を呼ぶに、何事と其處に至れば、岩と岩と相抱きて、日影を隠す洞の中は、三四疊も敷き得らるべき廣さあるに、砂は絹篩もて漉したらんやうなる清きに、坐禪して、こゝにて酒盛すべしとあるに、こは妙々と手を拍て、微酔を帯ぶまで酌み交はしつ、未だこの窟には名もあるまじと、假りに五鶏窟と命名して、矢立の筆もて簡短にその由緒を記し、空瓶の裏に封じ籠め、「遇鴻開」と題して、窟の奥に

秘め歸りしは、百八の魔王を封じたる水滸傳の古事も思ひ合されたり。斯くして船に乗り移り、山水寺を過ぎて行くに、山開きて景荒みたり。船の搖ぎに酔さへ出で、睡氣頻りに催し來れば、後には此方が彼方にもたれ、彼方は此方の膝に憑れて、櫓聲の夢とは酔酒落の極なり。旦那方も新町に着きました。オヤ左様かど目を覺せば、船は茶店の下手に着き居て、いざ上らつしやいませといふに、喜びて陸に上り、暫時川口の茶店に憩ひて後、駄馬を雇ひ、荷を附けさして、烏骨鶏翁を其上に安置し、我等四人は草鞋の足並揃へて、篠井にと急ぎたり、新町を出で、一里許、久米路の橋といふ名高き名所あり、犀川に臨みて、岩山峙ち、松危氣に立てる中に、年古りたる社あり、その山の腰を繞りて、橋ある處に至れば、袂には櫻咲きて、橋は蒼旻の虹かど疑ふ、行手に高き山ある、麓には不動瀧あり、ばら／＼松の木蔭には、

草の屋の檐に轟く水車もかゝりて、崖は千尺もありぬべく、犀川滔々として、水は青く淵に渦巻くなど、柔あり、剛ある山水の配合、景と景との取合せの面白き、多く得難き名勝なり。また山路を行くに、兎角して稻荷山道と、篠井道との二つあり、烏骨鶏翁は馬に飽いて、この山坂をホク／＼歩かる、事なれば、我はそを勞り參らせて、兎ある焼山を登るに、傍には沼あれど、路は急上りの趣無きに、翁も今は草臥れて、たゞ行き惱む老の坂、木蔭を便りて憩ひ給ふ氣の毒さに、後れて來る馬子を待ち受け、またその駒に乗せ參らせて、我は後れし三人の行衛を追ふて急ぎ行く。日は傾きて路遠く、連に離れし雁金の、暮れ行く空を打仰ぎつ、漸う麓の村に下れば、野は廣くして、村饒かなり。時候の違ふか、遅咲きか、咲き残れる櫻のあるに、野川に沿へる青麥に、風の度るも見えたりけり。斯くて篠井の町に入れば、田舎

めげども家並も好く、往來もや、賑はへり、停車場前の茶屋に會して  
今宵は上田に快く語るべしとて、断れたる草鞋も、今は長途の名残  
と思へば惜しく、名々に荷を分て、汽車に乗り移り、夜に入り上村屋  
に着き、酒も好き程にして眠りぬ。

善光寺

夜も明くれば、この町の友人金井魁華、飯島嬉笑の二氏訪はれたるに  
案内を頼み、我と錦鶏子は國分寺村にその古跡を尋ねるに、本堂と三  
重塔とあり、住職の家には古き瓦などあるを見了り、また上村屋に歸  
りて、烏骨鶏、軍鶏、野鶏の三子の善光寺に赴くに別れ、我は錦鶏子  
と、もに、別所の安樂寺に抵りぬ。野外の風光また一入の興味あるを

喜び、車上に名所圖繪を繕きて、男躰女躰の山はあれか、藍染川マツ  
タ縁結びの古木は何れぞなど、四方に目を遊ばして、別所の町に入り  
ぬ、安樂寺の境内に抵れば、松青く、堂古く、瀟洒たる淨寺の、而も  
境幽にして俗ならざるまゝ、喜びて案内を乞へば、僧は出で、我等  
を塔に導きぬ、山に據りて、四層八角の寶塔立てり、金碧を假らざる  
も、結構の奇なる、寔に天下一品なるべし。これは足利の初年、開山  
樵谷禪師の、入唐歸朝後建立せるものと云傳ふ。寺には禪師の持歸り  
たる、紅花緑葉の卓ありて、こも希代の珍品なり、時午に近ければ、  
柏屋にて晝餐したゝめ、温泉場を一巡すれば、市中に浴場數多ありて、  
男女混浴の無様なる、高帽子蒙れる田舎者の、兩眼鏡もて湯の中を覗  
くもありき。それより再び上田に出で、汽車にて長野に着けば、停車  
場前の雑沓は言語に絶えたり、茶屋の擔に花を染出したる暖簾のひら

つく、床几には如來の影頼む爺婆の一群二群、宿引の男に率かれ行く  
後になりて、われも御光を便れば、扇屋てふ高樓に導かれぬ、不平は  
多けれど郷に入りては業腹も煮されずと、また酒に旅の苦を忘れて、  
欄前に暮る、日の遅々たるを憾み、坐に入る春風の醉を吹くを喜びつ、  
明日は久々にて故郷に歸らむをのみ心頼みにして、宴をたしむ、月の  
黒きに乗じて、善光寺に詣でぬ。たい看る闇に本堂の黒装束、星と煌  
く兩眼の常燈明を便りて、階段を上り、堂内に進めば、通夜とか唱へ  
て、佛の御前に稱名申して、明朝の日の出を待つなる男女の、蛆虫の  
やうに寄居たるが、作りし罪を滅さんとして、懺悔し合もあれば、廊下  
を巡る不寝番の爺の、節哀れ氣にナマダブくと百萬遍を唱ふるもあ  
りき、堂内には天井に吊せる紙燈一つのみ、光明十方を照らさず、隅  
々の小暗き方に、幟天蓋などの、ちらく眼に入る外、闇中物色無け

れば氣澄み神穩にして、世を厭ひ俗を惡みする人の、如何に信仰を  
深うするならむ。人定識無ければ迷信深し、迷信は闇なり、信仰は火  
なり、されば今宵通夜する輩の、この薄淋しき大堂に、この星の如き  
一道の火を頼みにするは、なほ道に迷へる旅客の野に燈光を認めしが  
如くなるべし、しかく安心して眠らば、夢には繪に見馴れたる如來の  
來迎もあるべく、經文の中の極樂にも到り得べし、畢竟邪正は一如、  
榮華も遊山の酒の泡、花を散らすまでは吹かぬ春の風に、消ゆる間こ  
そ、夢なれ、浮世なれ、觀じ來れば義仲も幸村も謙信も信玄も、榮ゆ  
る中は醉心地、醒むれば矢張熊八同様の土饅頭が關の山ぞと、悟り顔  
して東都に歸れば、右にも左にも英雄豪傑の鼻突合、木曾の冠者、渠  
何者ぞ、僕も人なり、奴も人なりなど、鼻蠢めかする人の多くて、實  
に住まば鼻の都なる。

川 中 島

國滅びて山河在り、城春にして草青みたり、川中島の古戰場は、今に於て何物をか存せる。千曲川北に流れて、鏡の影を寄せ、西條山翡翠の色を凝して、誰が爲に年々の春を粧ふにや、當年汗馬の跡、蓬絶え草枯れて、唯鳥雀の噪ぐを見るのみ。去年の秋、善光寺の伽藍を見たりて、信州川中島にいたりぬ。こゝを島と呼べるは、千曲川と犀川との間にあるをもてなり。先づ犀川を渡りて南すれば、一面の青田に初風の戦ぐも床しく、路細ければ城南に行くもの、先づ城北を忘るゝ趣あり。天高ふして遠山晴れ、群峯の起伏して蒼龍の眠るが如きは、英雄去りて天地寂々たるの觀あるべし。頃は永祿四年の八月、上杉謙信兵を信濃に出して、犀川を踰え、赤坂山の東に陣をとる、武田信玄は

甲府より兵を川中島に進めて、謙信の軍の囊の中に在るが如きを攻め、塵にせんと計りけり。されば彼も此も、自ら死地に入りて陣を敷きたるは、戦の勢とは云へ、不思議のこと共なり。謙信も一生の大事なれば、死を期して時の至るを待ちたりしに、秋の夜の月隈なく冴えて、霜に輝ける兩軍の、武器の白う見ゆるに、更けて俄に大雨降り出で、黑白判らずなりたり、理に敏き謙信は天候を幸ひとなし、急ぎ千曲川を渡りて追りに迫る、信玄これを知らず、夜明けて見ればこは如何にせむの一夜の中に車攻の陣に布き更へて、信玄を狭み撃にせむとせり、驚き騒ぎて急に士卒を勵まし、拒ぎ戦はしむ、さる程に兩軍入亂れて闘へば、殺傷は算無く、川の水は紅となるばかりに色を添えぬ。時ならぬ花の流れ、雷光の閃きて、未だ消えやらぬ朝霧の中に、蹄の音高く、刃を合する響するにぞ、敵味方共に片唾を呑む折から、

眞一文字に馳せ寄る武者一騎あり、白き布もて頭をつゝみ、大太刀を  
提げ、馬に鞭ち、信玄が前に立塞れば、屹と睨みて餓鬼と呼ぶ、騎馬  
武者は太刀を振翳して眞額微塵と下せば、軍扇にうけどめつ、一合二  
合立合ひけり。其の危きこと、螳螂の斧に當るが如く、その早業の妙  
なるは、間一髪をも容れざりき。信玄の臣原大隅は、我が主を討たせ  
まじと、馬上に槍を捻つて、謙信を刺せども中らず、馬躍りて遁れ去  
る、信玄の弟信繁、單騎追て撃たれども、却て左股を斬れて死しぬ。  
この日の死傷千餘人、接戦せしこと十七合、十一戦は謙信勝ち、六戦  
は信玄勝てり、時に山本勘介諸角豊後等戦て死す、斯くして兩軍激  
しく戦ひし後、白雨の過ぐるが如く、逸早くも軍を撤ぎ、謙信の勢は  
西條山の西なる甲斐勢の通路を横ぎりつゝ、甘糟近江守殿して、容  
易く引揚げたりき。兩雄この地を去りてより四百年、血痕苔蒸して花

早く傾き、枯骨蔓草に封ぜらる、諸角の墓は路の傍に在りて、新愁  
を喚び起さしめ、勘助が墓は千曲川の向ふにありて、野渡人無く舟自  
から横はる、尙ほ行きて八幡原に至り、牧童に古戰場は此處かと問へ  
ば、犢牛に跨りながら、その社のある處は武田方の本陣跡なり、今も  
弓矢八幡の祠を建て、昔の威風を仰ぐといふ。堂小かに槐老ひた  
り、槐の森をなせる下に、石碑ありて、「十六夜もまた更級の郡かな」  
てふ、芭蕉翁が句を彫りぬ。日や暮に近し。夕陽の影凄く、風習々  
として枯草を吹き、鴉の二三羽、淋しげなる一基の古碑に止り、啼く  
方より暮色迫りて、暁て田の面の黒ふ見ゆる頃、徳本が建てたる南無  
阿彌陀佛の墓の邊に立てば、身の影長く地に映りて、旅人に宿を急が  
しむ、只見れば七ツ八ツばかりになれる女の兒の、鬪體の下より咲け  
る女郎花を折りて翳に挿せる風流は、世の興廢を知らで、斯かる山野

に人と爲れるか、桑田は碧海と變り行く中に、田家の風月を樂しみて、蝶花に戯る、愉快は、利に敏き都の人の真似ても真似得ぬ處なるべし。信繁の墓は何處ぞと問へども知らず、酒屋はと聞けば、彼方の櫓に杉葉立てたりと教ふ、行きて酔を買ひ、其家の主人に事問へば、物知り顔に古へを説く、出で、典廐寺といふに入りて、武田信繁の墓を尋ねれば、入口に閻魔堂あり、松の大木の下に、眼るが如き古墳あり、雨に黒み苔に鎖されて、文字も定かに見えざれど、闕伽桶の水を注ぎて、熟々と撿むれば、中に松操院鶴山巢月大居士と記し、右には永祿庚……秋九月十日、左には甲斐源氏武田左典廐信繁とあり、餘りの慘はしさに、英雄の末路を吊ひて涙の落つるを覺えざりき。勘介の墓は、夜に入りたれば見ず、清き川を距て、疏柳絲の如き下にありといふ、松代の城趾は、眞田幸村が餘風を傳へて、尙ほ松風の音を送り、象山

を遠く望めば、佐久間修理が人物をも思ひ遣られて、山水秀靈の氣、偉人を生むの語眞なるを悟れり。月出で、路白く、西條山朝日山は夜の雲に、一刷毛の淡墨を彩りて、松杉の隈取面白く、武士の骨は形見の薄のみ、穗に出で、風に姿を作りたり。堤に出で、千曲川の流れを見、長橋の横はるを眺むれば、月に虹の趣ありて、我も畫中の人となりぬ。更けなば宿るに悪しかりなむと、急ぐ程にせくほどに、月に迎へられ、虫の音に送られて、長野の町に入れば、夜は已に初更を過ぎぬ、その夜の夢に故郷に歸れりと見しも、川中島の興亡に感深かりしより、自ら米澤なる上杉の城下に夢魂の飛しなるべし。

月 の 松 島

母と共に花を嵐山に賞したる山陽の風流は無くとも、今月今日都の花は早く散りて、半は若葉に行く春の名残を留むる夏と、寒からぬ裕着の節に方りて、一家を提げ、母を護りて、月を松島に観ることの嬉しさよ。家を出でたるは四月廿六日、空は麗に晴れ渡りたり。我等の一行を見送れる三四人の男女の方々は、逸早くも上野に在りて、何彼にと世話し呉るゝ心の切なる、別けて父よりは、旅路遙けく、汽車の中に在ることの長ければとて、飲むもの、食ふものにも心を注げ給ひ、辨當も途中のは買ふな、菓物駄菓子なども、腐りたるに心せよとて、前の夜一夜煮炊せさせて、この朝の用に贈られたり。兄は家を一入して、統治し給ふ身とて、少しの暇だに無きまゝ、番頭二人に意を合ませ、懇に一行を見送らせらる。實に親とし子としなれば、暫時の別だにも、たゞ行先の事のみ案じ過されて、誰は寐相悪し、寐冷さし

て、風邪感かすな、彼は勉強は過つるぞ、氣を注げて、運動を怠らすな杯、母は孫子の上を氣支ひて、汽笛の鳴るまで、種々心を勞し給へること、世にも有難し。汽車出で、見送りの人は埒外に退きたり。頓ては眼に映つるもの、緑滴るばかりの若葉、時に謳ふ小鳥の聲のみ、田端の新停車場に至れば、母は六阿彌陀詣でし給ひし時を想ひ出して、眼を郊外に遊ばしめ給ふ。王子も過ぎ、大宮も過ぐる程に、一つ二つの野も越え、山も度りて、眼の一入に清しうなれば、母はその孫なる男子と共に、それ川、それ花と、指し笑ふて、心を慰め居給へば、我は寫真機を車中に据へて、美しき景色もあらば、寫し撮らんと待構ふれども、那須野も白河も面白からず、殊に目に馴れたる山水とて、珍らしくも思はれぬまゝ、器をとり片づけ、寐臺に凭りかゝりて、手近に置きたる古書をとり上げ、讀みもて行くに、隣に腰かけ居たる紳士



の、此方を熟々と見詰むると思へば、俄に膝を打て、君は乙羽子なら  
ずやといふ。我は左なりと答へながら、その人を見れども、誰なるや  
を知らず、誰何すれば、君は忘れたるも道理なる、予は山形なる佐藤  
玄々なりといふ。左なりく君は玄々子君よ、今はハヤ十年の昔とな  
りぬ、君も我も共に文の林に分け入りて、彼の風景の詩中の物なる、  
この山河のゆうに優しきなど、共に文を論じたりしが、星霜三千日、  
君のいたく肥え太りたるに、その 係をだにうち忘れたり、然して君  
は今如何なる業をし給ふやと問へば、今は實業の舞臺に出で、某商  
社の副支配人となれりと云ひつゝ、傍なる二人を紹介して、此方は前  
山形市長濱村君、彼方は今の雄倉市長なりといふ、それより汽車中の  
奇遇を喜びて、彼方は蓄へ來れる麥酒、日本酒を出せば、我も葡萄酒  
などとり出し、父の贈られたる薬物を、時にとりての好下物と、花は

無けれど、寐臺を立食の卓に代へて、こゝに旅中の園遊會はなり立た  
り、斯かれは陸前大河原まで、百里に近く遠く來りたる長途も、欠伸  
一つだにせず、談笑の間に着きて、今は仙臺まで五里一里なりといふ、  
名残は未だ盡きざれども、行く春をといめ難く、三人は停車場より出  
で、躑躅花の咲ける草原に入れば、汽車は暮雲と共に淡き煙を野に  
靡かせて、陰曆十四日の月の、色つき初むる頃に仙臺に入りぬ。針久  
といふに宿かりて、明夜は松島の月觀んを楽しみ、湯に浴り、臥房に  
入りぬ、明朝も空は曇すかと思ふばかりに晴れ度りて、曇となるべき  
雲だにも見えず、腕車に揺られて青葉山、躑躅ヶ岡、老女淺岡の墓、  
青葉の城など巡覽れど、心を慰むる節も無く、彼の名所なる宮城野に  
は、菜の花美しくしう咲きて、詩ども和歌どもなるべき萩の一株も無く、  
千秋の名勝、今いづれの地たるを知らず、たゞ小鳥の晴を謳ふあるの

みなり、時刻來れりと促さるゝが儘に、鹽竈行の汽車に乗りて、正午  
 とも思しき頃、無事に着く。晝餐、舟なんどの準備せさせつ、鹽竈神  
 社に詣で、その境内にて、一つ二つの寫真をも撮り、石階を下り、路  
 狹斜に入れるに、後方より我を呼ぶ者あり、何事ぞと立止まれば、俵  
 なる若き男のいふ、君はもう歸り給ふか、我が家には娼妓の數を盡し  
 て、君の御來臨を待てり、一枚寫してんやといふ、我うち笑ひて、渡  
 世する身ならぬ由を云へば、若き男は顔を赤らめて、遁ぐるが如く退  
 りぬ。ふり振れば母の、片頬に笑みを浮べて、人違ひを興がり給ふ。  
 食事を濟まし、小舟にうち乗りて鹽竈を出づ、風少しく吹き出でたれ  
 ば、水夫を二人頼み、櫓と片帆とにて急ぐ、港を少し出づれば、籬の  
 島をはしめ、六つ七つの島影、翠の松の影を水に映して、眼も清しう  
 覺ゆ。我は舷頭に寫真機を立て、送り迎ふる青山白水の、忽ちにし

て奇、忽ちにして怪なる態を寫し撮るに、波次第に高うなり、飛沫舷  
 頭を掠めて、人の衣を濕す、水夫は楚にくるまり、一行はそれ毛布よ、  
 シヨールよと立騒ぐ中に、早くも福浦島を過ぐれば、風は風ぎ、景色  
 も一入面白うなりて、母の喜び給ふに嬉しく、漸う五大堂の邊に舟の  
 着けば、直に觀月樓に上り、夜に入るを待つに、雲も無く、風も風ぎ、  
 夕陽の沈む間もなく、東の海面赤うなりて、頓て月は出でんとす、風  
 流はこゝの漁夫も知れりや、月の出汐に棹さして、漕ぎ行く舟のあり、  
 尺八吹くあり、唄うたふあり、空は全く嚙れたれど、五大堂の後邊、  
 月の昇らんとする方、一躰に明るく、白き波に島影松の影、まつた透  
 し橋の影を映して、島も松影も浮び出んかど怪しまる、母は一行と欄  
 干に凭りて、月の出づるを待ち給へば、我は濱邊に立ちて、空と波と  
 の明るうなるを目も放たで眺め居る後邊より、直と我が肩を叩く者あ

り、振向けばこれはこれ友人高山樗牛子なりき。  
黒装束の高山子は、闇より出で、徐に我が肩を叩き、何うだ月の寫眞  
は撮れるかといふ。撮れなくツて！と負惜みを云ひつゝ、今し月の昇  
らんとする方を眺むれば、金色の縁をとれる雲の一片、先づ嫦娥の腰に  
纏へる羅縵のごとく、飄々たる風に舞ふて、襪塵を生ずるかと思はる、  
頓て月出づ、月前の島影の黒きこと、墨よりも優れり、波には光を墮  
し來りて、漣漪の寄する間に、長く一條の金モールを布きつ、そ  
の中に入る舟は、光を辿りて、月宮殿にや行くらむ、廣寒宮にや詣る  
らむ、月は一尺二尺三尺と、海を離るゝにつれ、五大堂の島影の、地  
中よりセリ上げらるゝかと思はれて、初めは暗かりし松影、堂の屋根、  
三段になれる島影、透し橋の影、橋下百仞の下に維げる漁舟の影まで、  
墨繪の如く浮び出で、五右衛門や出でむ、久吉やセリ出されん、山

門五大堂の桐といふ劇の、龍宮より現はれ出づるかど、其面白さ云ふ  
ばかりなし。月の出汐と共に、岸を打つ白波の、碎けては雪となり、  
金蛇となりて、月光を弄べば、最寄の漁夫の、今宵しも雄島に、稻  
荷祭のあるに乗じて、一艘の小舟に、酒を置き、樂器を載せて、遠く  
近く月前に漂ふあり。笛尺八の音など、五大堂の島陰に聞えて、天女  
の奏つる樂にも似たり。月は地を抽ずること一丈あまり、近くに見ゆ  
る島の影の、碁盤に黒きをのみ並べたるが如くに此處にも彼處にも、  
海に痣を置きたりき。我は黒き布を被りて、頻りに寫眞の位置を撰べ  
ば、高山子は月に歩いて、興あり顔なるもよし。それより島傳ひに五  
大堂に至り、石地藏と枯木立の、月の光を脊に浴びて、黒く立てるを  
撫て、見つ、橋二つ渡りて、堂に上れば、松影地に落ち、白露砌を淨  
め、境轉た幽なり。高山子いふ、この境この月あり、徒らに安臥すべ

けんや、いざ水を度り、島めぐりして、雄島の奥まで行かむといふ、  
この時我未だ夕餐濟まさざれば、一先づ家に歸らむとて、埠頭近く來  
る時、今が今までいと睦ましく、唄ひつ酌みつせる舟中の漁夫等の、  
少しの辭咎めより、争ひを起して、後には權を振上げ、尺入を閃かし  
などして、月前に喧擾す。我は宿に歸りたれども、母は尙ほ欄干に倚  
りて、外の方を眺め居給へば、何をさな眺入り給ふぞと、背後より問  
ふに、汝は無事なりしか、寫真機は破られざりしか、生命知らずの漁  
夫などに構ふなど、宛がら我の争ひでも起せしかの如く心配し給ふも、  
慈愛なり、夕餐食べ了れる頃は、母は孫を抱きて臥房に入り給ひけれ  
ば、我は高山子に誘引はるゝが儘、家を出で、觀瀾亭の後邊より、小  
村を過ぎて、地藏堂の邊に至る。前に田あり、後に池あり、遠く雄島  
を望み、近く三交の松を見るべく、水には樹影倒に映り、田には月の

影の圓きを浮ぶ。棧道を渡りて、倒さ松のある處より、水際を通れば、  
渡月橋は夢の如く、雄島は眠れる獅子の如し。月のみ獨り醒めたるに  
や、波白く光りて、山影淡く水に落つ。こゝに馬洗ふ若者あり、馬は  
栗毛の骨達ましく、男は牧者の風俗鄙びたり、月前の波に馬を洗へば、  
満身月を浴びて、鬣も滴も銀にや化しぬらむ、誰やらの詩に、一痕  
眉月春潮白、叱咤何人洗馬、歸の趣あり、又近き頃見たる或人  
の句に、馬洗ふ温泉の裾や春の月とは、能く實境を寫したるものとい  
ふべし。我はその夜の景色の餘り面白きまゝ、翌日その人と其馬とを  
其處に立たしめて、寫眞して家土産になしぬ、斯くて橋を渡れば、月  
波に映りて、光流れんとするなど、橋も人も畫中の趣、渡月橋の名、  
懸直なしといふべし。雄島には俳人の碑殊に多し、納骨堂あり、古松  
あり、觀潮の亭あり、佛像の石に彫れるものあり、地は人寰を出で、

四隣聲無く、松は苔の青むに任して、鳥の啄むを妨げず、境古りて風  
斷碑を吹き、月照して僧の歸來遅し。この幽棲、この寂境、人松島を  
將りて俗地といふは、未だ全く松島を知らざるなり。汽車に據り、或  
は鹽釜より舟を借りて、僅に五大堂を瞥見したるまでにて、早く已に  
その美を喋々する、大膽なりと云はんか、無謀なりと云はんか。松島  
の景は月に在り、雪に在り、その景を縮むる時は、一の林泉となれど  
も、富山より望む時は、實に雄大一幅の活畫となるなり。故に松島の  
勝は、忙殺劇殺せられんとする、都人士の知悉する能はざる所、眞に  
その勝を愛するの士は、先づ外海より内海に入りて、舟にて仔細にそ  
の景を探るか、一笠双鞋、遠く富山の觀音堂に詣れよ、月に雪に初め  
て其眞を知らるべし、我今茲再びこの地に遊びて、而かも漸くその美  
を知り得たるのみ。と、語り續げて雄島をめぐる、松の影、堂の影、

古碑の影を踏んで、納骨の離堂に至れば、鳥眠りて聲なく、月澄みて  
双影の長く、地に黒きあるのみ、生ある者の影は、我と高山子とのみ  
にて、淋しさ云ふばかりなし。斯風景懐む我の寫真機を携へざりしを。  
只ある石の苔を掃ひて腰うちかけ、持ち來れるビールと鮎とを開き、  
共に獻酬するに、その心地好き、羽化登仙といふ語の、興あるを知り  
たるは今宵のみなり。こゝにてまた寫真熱に感じ、急ぎ家に歸りて、  
再びビールと梨子とを用意し、今度は觀月樓の持舟と若者とを雇ひて、  
月下雄島に漕ぎつけ、青松白砂の間より、月を寫真せんとすれども、  
果さず、杯を擧げ、詩など吟じて、月の天心に沖するを知らざりき。  
舟は若者をして、先に宿に歸さしめ、高山子と我とは、再び渡月橋を渡  
り、地藏堂を過ぎて、小村に入れば、夜はいたく更けぬらむ、いづれ  
の家にも人語なく、瑞巖寺の門に立て、月下の僧を氣取りたれど、樂

みも淫せぬまでにと、逸早く宿に歸へれば、一行は早くも夢に入りて、今宵の月を枕にして眠りぬ、翌朝また早く起き出で、日の出を眺め、瑞巖寺中を一見して、政宗の爲人を胸裏に描きつ、高山子と共に其日一の關中尊寺に行くを約して、先づ母を富山の觀音堂に導き、一行とは午後三時松島停車場に別れ、我また高山子と合して、陸中一の關に向へり。知らずこの後の月の松島、母と友と席を同じうして、何日亦再び我が眼に映るべきや、以來清興夢に通ひて、今も尙ほ忘れ難し、愉絶、快絶。

巖美溪の櫻

陸奥と云へば、胡砂吹きまくる夜嵐に、路もせに散る山櫻花かと

クサシたがれど、瀛車のある今の世に、八幡太郎の口眞似をせずとも、いざ住めば都の、田舎人に道を問ふて、平泉の古跡など探るも妙ならずやど、高山子とともに松島より陸中一の關に向ふ、窓外の景色の、これとて目を留むべきものも無ければ、恍乎手を組み、瀛車に乗り居る人の容貌など、人相觀然と睨みつむるに、中に廿二三歳とも覺しき男の、打扮のいと見苦しきが、何の見る所ありて、ツマラぬ見榮に中等瀛車などに乗るやと見る中、傍に居たる札幌の商人に、これを見給へとて、緋毛布の手荷物の中より、小さき懷劍をとり出して、我はこれ去年征清の役に随ひて、臺灣に渡れる鍛冶職の一人なり、以來櫛風沐雨の間に身を處して、命を繋ぎ留めたるが、そが中にて尤も愉快に覺えたるは、人間の生膽を、南蠻に貿易せるの一事なりと、誇り顔にふる。我は可笑さに堪ねど、暫らくその人の云ふを聞くに、君知ら

すや、人間の生膽は勞症の妙藥なり、一回これを服すれば、如何なる  
難病も即座に平癒する故に、我は支那人の生膽五六を奪ひて、この手  
荷物の中に塞み歸れりといふ。如何に青年の活氣なりとは云へ、生膽  
の手荷物とは妙ならずや、江戸ッ兒は活馬の眼を抜くとは聞けど、陸  
中の田夫が人間の生膽を抜くまで進歩せるも、戦捷の餘榮か、兎も  
角も開化の世なりけりと、片隅に小さくなりて、念佛申ながら、更に  
江戸ッ兒風を吹かせずに黙す。かくて送り迎ふる驛々は、いづれも凱  
旋の兵士を迎ふる爲に、萬歳々々の聲に埋まりて、紅塵十丈、窓さへ  
明けるとのならぬは閉口なり、頓ては一の關に着く、石橋といふに泊  
り、明日見物する名所の順序など問ひて、夕餐を濟まし、湯に浴りて  
後、市中を散歩するに、人家も左までに多からぬと、在郷廣き故にや、  
や、繁昌の都會なり、床屋に入るに、この土地の粹客ともいふべき親

方の、頭の髪を後の襟足まで長く分けて、香ひ油をいやといふ程つけ  
たるが、半熟の江戸辭もて、我等を迎へながら、髯そり、髪を理らふ  
間も、女の兒の窓を覗きては、こなたの床屋に用あり氣なるも怪し。  
そいろ歩きの時、我いふ「一の關に過ぎたるものは二ツあり、火の見  
櫓に丸長の店」と、總じてこの物賣る家の、この町並に比べては、  
店も身代も太きが多くあり、さて宿に歸りて靜に臥す。翌朝は未明よ  
り起き出で、巖美の絶勝を訪ふ。風は未だ寒し、遠き山は雪、近き小  
村は桃の花櫻の花に裏まれて、瀬の早き小川の、水車を操るも、田家  
の風光自然と備はり、鶏の聲に目を覺して、前なる溪流を見渡せば、  
崖の具合、湍流の鹽梅、流石に磐井川の上流はこれかと、感心しつゝ、  
も進むに、巖美の村に出づれば、日は高く昇りたり、兩側の崖は前る  
かと思はるゝまで、怪しう角立ちて、水の觸るれば雪となり飛沫とな



りて、白き泡の藍の如く青き流れに交ちる態は妙、松は幾千歳を經ぬらむ、苔に緑の汗生みたるが、龍の如く蟠れば、此方には今を盛りの櫻花に、芽立ちて美しくしき柳の交りて、自ら春を粧ふも面白し、先づ神の成せる橋を渡りて、彼方に至れば茅葺の堂の物見あり、こゝより崖下を見下せば、邃からぬ溪ながら、青き流れに白き泡の碎け飛ぶなど、目も眩めくやうに覺えて、夏も寒さに粟の生ずべし。それより危うき小徑を辿りて、溪底に下り、棧橋を見上ぐれば、實に人工とは思はれぬに、人工なるは訝かしといふべし。この景この花あり、豈酒無かる可んやと、只ある茶屋に憩ふ、二階は一入眺望好しといへば、直に登りて四方の景色を見るに、これは亦花は一目にて、柳の青きと錦を織る中に、鶏の遊ぶも畫の趣あり、興は盡きぬと山越えして達谷に出づ、此間一里あまり、赤土山の風情無きこと頗る没風流なり。達

谷は了得に田村磨將軍の開創といへば、老杉日を裏んで、晝も尙ほ暗く、泉水山の腰を浮かべて、影倒に立つ。夜は老梟の棲所となるにや、池中の古祠に鳥の毛の降れるも凄く、岩に刻める大佛の像の、年々とも雨露に碎けて、全からぬも哀れなり。毘沙門堂に登りて、窟中に入るに、闇々として人の面も判かず、去て祠中の古佛を檢するに、いづれも古色蒼然たるもの、傳へて雲慶の作なりといふは、非耶。また車にゆられて平泉に向ふ。

### 平泉の廢趾

松風白露孤徑に驛路の鈴の音を聞かざるも、春は自ら野外に溢れて、遠村近落の花、年々の姿を粧ひ、その昔劍を閃かし矢を飛ばしたる戦

場は、夢を牛背に眠る牧童に寄せたり。一路の古松風颯々として、草頭の露を拂ふの地、これ俳豪芭蕉が夏草やの句を、碑に彫せるの所なり。その奥の細道に『三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里となりにあり、秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形を残す、先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る、康衡等が舊跡は衣が關を隔て、南部口をさしかため夷を防ぐと見えたり、偕も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て時のうつるまで涙を落し侍りぬ、夏草や兵どもが夢のあと』と見ゆ、實に此地は奥州の三衡が威を八方に振ひし地にして、王城に擬したる大門の跡は莖草に委して、城南に行くもの、先づ城北を忘るゝの憾みあり。然れども山河縈帶、南大門の古趾雨に黒

み、大泉の池今も尙ほ千古の鏡となりて、塔山の變らぬ影を映せり、國衡重衡の屋敷跡、化粧坂の趾などいづれに尋ねべきや。折ふし馬夫の鄙謠唄ひて、過ぎ行く者に問へば、渠は額の汗を拭ひて、世には氣樂なる男もあるものよとて、後庭花を唸りて去りぬ。噫古戰場の跡、山により水によりて温ぬべきか、嵐氣語らず、流水長へに逝く。池を向ふの杜の中に常行堂あり、雨の日は奈何腸を断つべき。松の下をくぐりて大阿彌陀堂の邊に至る、古松參差、草枯れ露乾ける處に一基の古墳あり、顧ふに源九郎の墓かと、先づ苔を撫で、石を摩して、その字を讀めば、前鎮守府將軍藤原基衡室阿倍宗任女墓仁平二壬申四月十二日とあり、顧ふに後人の建てたるものか、渠はその風姿に於て、楚々人を動かし得るに足るものありしや、否、地は蝦夷と稱せられて、長く王化に浴せざりしとは云へ、その上に溯りて、平泉全盛時の遺

物に徴して考ふるも、その今人の想像するまでには野卑ならざりしや  
 知るべし、況てや佛像に玉眼を入れたるは、この毛越寺に始まれり  
 など云ふを見れば、清原氏の富豪にして、而かも京洛の文物を輸入す  
 るに吝ならざりしは無論、然らば則ち基衡の室は如何、渠亦綺羅に  
 褻まれて、櫻山に春を賞せりや、一代の浮雲、世の榮華を蔽ひて、今  
 に於て斯荒涼を見る、畢竟榮枯は一睡の夢なるのみ。去て中尊寺に行  
 く。俳人大淀三千風の文に『當山は行基開闢より、法繁の靈地として、  
 眞天二宗の梵閣、やごどなき聖跡なりしが、いつしか老松枝を垂て御  
 坂をかくし、蒼蘿露ざれては、參詣の履を滯む、杉外の一燈耿々とし  
 て神寂たり、石室金床いつしか螢炳の闇となり、百房千舎いたづらに、  
 臥猪の宿と成にけり、されども爰に五百餘歳の形見三間一字の光堂殘  
 り、紫銅栴檀の良具をもて、彩麗軒、琢瑠楣、見るに睫乾き、いふ

も口吃し、いでや大虚の朗月は、七寶莊嚴の詩楹の雜巾にかはり、玄  
 大の白日は、萬徳圓滿の佛眼の羽帶となる。此香花の壇下、石窖の  
 中に清衡、基衡、秀衡、三將、頭北面西の夜臺、佳名不變の御靈室也、  
 信に物みな昔にかはれども、形見は神魂の枝折ぞかし、さすが顯密二  
 季の花施は、辨慶櫻の長刀風に、永く六塵の妄霧をはらひ、觀禪兩  
 旬の月雪は、龜井が松の弓勢嵐に遠く四迷の闇雲を除く、泉城の儀  
 鸞は、忠名を萬代の詩歌に嘯き、高館の猛鷗は、功を三軍の淨瑠璃本  
 に嘯る、かゝる中にも蝦の錦戸は物冷しき姥杉の懷所立、天狗太郎國  
 七と今もいふめる、於如幻の身をおしみてか不滅の悪名を殘す事の口  
 惜や「月花瑩こや三衡のひかり堂」と見ゆ、今も光堂と經藏とは昔の  
 係を改めず、松古く、境清く、夜は千古の月も澄みぬべし。鐘樓あ  
 り、石地藏あり、僧の晚歸あり、みなこれ畫中のも、辨慶堂の邊よ